

大沢遺跡

第1土壌は竪穴住居跡に接する西に位置し、1.35×1.40mの方形をなす。深さは検出面から20cmで浅い皿形を呈す。南端が幾分深くなっており底部に凹凸がある。埋土は黒褐色腐植土で遺物等は含まない。第2土壌は住居跡の北西内側にあり住居跡を切っている。1.1×1.85mの方形で深さが37cmである。埋土は黒褐色腐植土で壺形土器が出土している。第3土壌は住居跡の南約1mにあり第4土壌を切っている。1.6×0.85mの楕円形で深さが約40cmである。舟底形の底部をなす。埋土は黒褐色腐植土で遺物は含まない。第4土壌は東端が第3土壌に切られている。2.5×1.6mの楕円形をなし、深さが約40cmである。埋土は橙色凝灰岩風化土で遺物は含まない。

五 D区

D区は平泉、戸河内線の西、平泉、大沢線の北に位置する。現状は南に緩く傾斜する畑地で大沢溪谷の中央部にあたる。表土層が厚くⅡ層の遺物包含層は擾乱されず比較的良好的に保存され、東西約12m、南北約25mの範囲に広がっていた。出土遺物は下表のとおりである。

第4表 D区出土遺物一覧表

遺物	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
合計	11	45.2	12	4	4	7	9	2	4	9	4.4	

六 E区

E区は平泉、戸河内線の西に位置する。10グリット調査したが、遺構、遺物はともに発見されなかった。

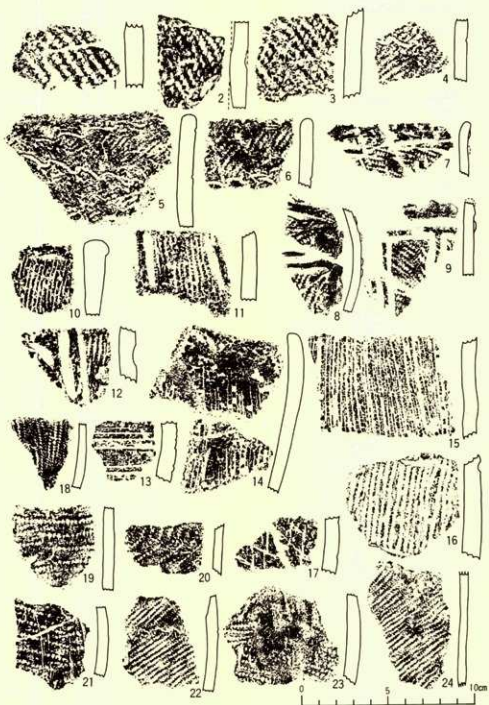
Ⅲ 出土遺物

一 縄文土器 (第9図 第10図 図版2)

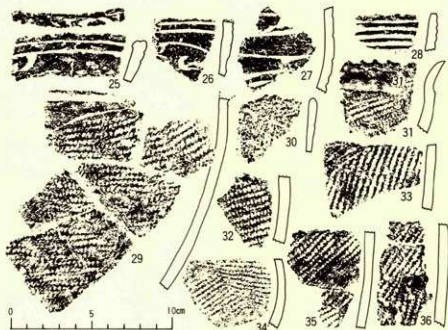
縄文土器は1群土器：早期末葉～前期初頭、2群土器：中期中葉、3群土器：後期後葉、4群土器：晩期中葉の4群に大別される。いずれも磨滅、器表面の剝落が著しく文様の観察できるものは少ない。

1群土器はA-2、C、D区で僅かずつ発見され、比較的A-2区に多い。1～3は太目の単節斜縄文が鮮明に施文されるもので、胎土に植物性繊維を含む。色調は赤褐色、灰褐色、青灰色を呈し、焼成は良好である。

2群土器はA-2、D区で認められるが、数はそれほど多くない。綾絡文をもつものと隆線・沈線による装飾文をもつものとに細分され、後者には縄文を地文とするものと、櫛目文、燃糸文を地文とするものがある。4～6は綾絡文をもつもので、単節斜縄文を施文した後に絡条体を横回転している。地文は鮮明なものและไม่鮮明なものがある。7～9は同一個体と見られるもので、2条の細い隆帯と3条の沈線が文様構成要素をなす。隆帯の剝落部分には縄文が認められ、隆線は縄文施文後に貼付されたことがわかる。10～12は櫛目文、燃糸文を地文とするもので、10は口唇部が幅の狭い隆帯をなし幾分肥厚する。色調は褐色、黄褐色をなし、胎土に石英を含む。非常に脆く原形を留めないものが多い。



第9図 縄文土器拓影図



第10図 縄文土器拓影図

3群土器はD区の大半を占め、A-2、C区では少量である。地文のみで櫛目文、撚糸文、縄文の3類に細分される。13~15は櫛目文をもつもので、櫛状工具で鮮明に施文される。縦位のものと同様に横位に施文されるものがある。14は口縁部破片で口縁に僅かな無文帯をもつ。16、17は撚糸文をもつもので、前者が正整撚糸文、後者が網目状撚糸文である。18~24は細かい縄文をもつもので、18~21は撚糸文状に間隔を有し、22~24は間隙なく施文されている。21は縄文の他に縦位の条痕が認められ、22は綾絡文状の文様が付いている。地文は概して不鮮明なものが多く、色調は赤褐色、暗褐色、黒褐色で黒褐色が多い。胎土には石英を含み、黒雲母のめだつものがある。薄手で堅緻である。

4群土器はC区の大部分とD区の半数を占め、当遺跡最多をなす。復原可能土器を含む。文様等から雲形文をもつもの、工字文をもつもの、縄文のみのものの3類に細分できる。25~27は雲形文をもつもので、細かい縄文を地文とし沈線と摩消手法によって雲形文を表出する。25は口唇部に肉彫的な沈線を持ち、26は沈線状になっている。28は変形工字文をもつもので平行沈線を多用する。第7図2の壺形土器はこの類と推測される。29~36は縄文のみで、31は口縁部に無文帯を持ち、29は無文帯の下端が段になっている。30は1条の沈線が巡る。口唇部は31が刻みをもって小波状をなし、30が刻みのはいった小突起をもつ。第7図1の壺形土器はこの類と推定される。縄文には鮮明に施されたものとそうでないもの、万遍なく施文されたものと施

文に強弱をもたせたもの等がある。色調は、装飾文をもつものは褐色が多く薄手で、内面が丁寧に仕上げられ、地文のみのものは暗褐色、青灰色が多く厚手で粗雑である。

二 石器、石製品（第11図 第12図 図版3）

今回の調査で発見された石器は石鏃、石匙、搔器、石錐、鋏形状石器等があり、石核、剝片断片等も多数発見された。

a 石鏃（第11図1～13）

石鏃は形体から1類：無柄で三角形をなすもの、2類：柄のないスベード型をなすもの、3類：柳葉形をなすもの、4類：有柄式のもの4類に分けられる。1類は側縁が直線的で二等辺三角形をなす。基部が直線的なものと彎入の明らかなものがある。前者が縦に長く截して大きい。2類は最大幅が基部近くにあり、側縁が曲線的でスベード型をなす。当初から柄が作られなかったもので、欠損したものでない。3類は柳葉形をなすもので基部は平である。棒状のものこの類に含めた。4類はいわゆる有柄式である。

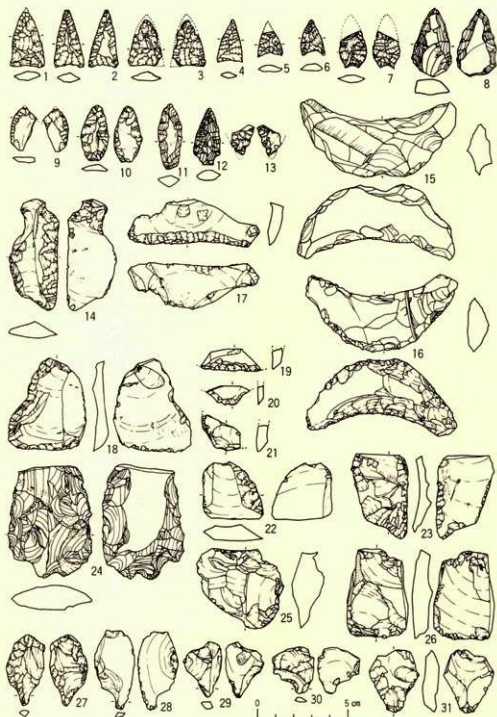
石鏃には一次剝離面をもつものと、もたないものがあり、1、4類はもたないものが多く2、3類はすべてもっている。一次剝離面は背腹両面に見られ、8は片面に自然面を残す。刃部は両面から押圧剝離によって仕上げられるが、中には粗雑なものもある。石材は凝灰質珪質泥岩が多く、黒曜石、珪質泥岩等が含まれる。

b 石匙及び搔器（第11図14～21）

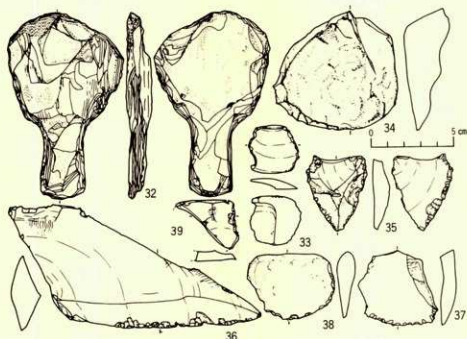
14はいわゆる縦形石匙で、背腹両面に一次剝離面を残し、打瘤部分をつまみとする。つまみは刃部の方向と若干異なり挟り込みが小さい。断面は三角形をなし、刃部は左右両側縁にある。左側縁は逆三日月形をなし短い剝離が施され、右側縁は直線的で稜線に向って長い押圧剝離が施される。前者には加撃によると思われる小さな破砕痕が観察され、後者では使用痕と思われる摩滅痕が観察される。二次加工は表面のみで背面には及ばない。珪質頁岩である。

15～21は明らかに刃部を形成したものであるが、片面加工でしかも比較的厚いものを搔器とした。形態から、1類：鋏先形をなすもの、2類：横形石匙に類似するもの、3類：縦形石匙に類似するもの3類に分類される。1類は逆三日月形をなすもので両端が尖り鋏先に類似する。内外両縁とも背腹両面から加撃剝離され、背面には一次剝離面をもつ。16は表面に自然面を残す。刃部は表面調整の後に形成されており摩滅している。特に両先端部が顕著である。外側中央には打ち欠き痕をもち摩滅していない。これは中央部に柄が装着されたためと考えられる。2類はつまみが付くといわゆる横形石匙と見られるもので、打瘤の反対側に刃部を形成する。17は打瘤部分に自然面を残す。3類はつまみが付くといわゆる縦形石匙とみられるもので、打瘤の反対側あるいは側縁に刃部を形成する。19～21は刃部のみの破片である。

1類は背腹両面から剝離されているが、2、3類は片面から押圧剝離され刃部としている。



第11圖 石器実測圖 (1/2)



第12図 石器実測図（約写）（32は約写）

背面から剝離されるものが多いようである。刃部は1類のように曲線を描くものと、2類、3類の18の如く直線的なものがある。石材は凝灰質珪質泥岩、珪質泥岩を多く用いる。1類は細粒石質凝灰岩と軟質のものを撰択している。

c 削器（第11図22・23）

搔器に類似するか刃部角度の小さいもの、両面加工のものを削器とした。22は彎曲側縁に鋭い刃部を形成し、23は両面加工的である。後者は背面に小さな剝離を施し、次に表面から細長い押圧剝離を施す。押圧剝離は打箱反対側にのみ認められ、右側縁は背腹両面から不規則な剝離が施され、左側縁は基部近くが背面から、下半は表面から剝離されている。形は一端の尖る方形をなす。石材は両者とも凝灰質珪質泥岩である。

d 石筥状石器及びピエス・エスキュー標石器（第11図24～26）

石筥あるいはこれに類するものを石筥状石器とした。大形の石材を利用し両側縁あるいは周縁に刃部を形成したものである。24は基部が欠損しているが方形に近い三角形をなし、断面は横に長い五角形を呈す。刃部は蛤刃状に曲線を描き背腹両面から加撃剝離される。剝離は表面の稜線に達する。25は両面加工的であるが、特に刃部を形成したようには見られない。26は両側縁を基部方向から加撃して単冊形に整えたものでピエス・エスキュー注1に類似する。背腹両面の一部に自然面を残し、背面は一次剝離面のまま用いる。刃部は背面からのみ剝離され片刃的

である。刃部には一部加撃による小さな打ち欠きが認められ、基部は大きく破損している。石質は細粒石質凝灰岩、珪質泥岩、フリントである。

e 石錐（第11図27～31）

いずれもハンドドリルに該当するもので柄を装着するものはない。大きなつまみをもち、錐部が小さい。厚手の剝片を利用し、打瘤の反対側に錐部を形成する。その断面は方形を基本としている。石材は凝灰質珪質泥岩が多い。

f 鍬形石器（第12図32）

22.4×14.0 cmの大形の打製石器で、不整形形の本体と単冊形の基部からなる。刃部は背腹両面から剝離されているが、摩滅が著しい。背面は刃部付近の極く限られた部分に、表面は中央部まで縦方向の擦痕が認められる。基部には敲打整形後の摩滅が観察され着柄が相定される。大山迫氏以来言われてきた「土掘具」と考えられる^{注2}。凝灰質砂質粘板岩である。

g 剝片利用の不定形石器及び使用痕を有する剝片（第12図33～39）

搔器、削器の形の整わないものはすべて剝片利用の不定形石器となるが、ここでは人為的に細かい剝離を施したものの、または両面加工したものに限定して用いた。33は両側縁に規則正しい小さな剝離をもつ。34、35は打瘤反対側に始刃状の刃部をもち、両面加工されている。

使用痕を有する剝片とは使用によって剝離現象の起ったものを指し、剝片利用の不定形石器とは規則性の有無によって区別した。一端の薄い剝片を利用したものが多く、大きさはまちまちである。中には自然石をそのまま利用したものもある(38)。石材は凝灰質珪質泥岩、珪質泥岩が多く、粘板岩、凝灰質硬砂岩等が含まれている。

三 土師器

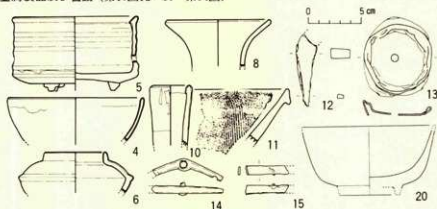
土師器はA-2・C・D区から僅かずつ発見された。いずれも小破片で器形の復原できるものはない。坏には黒色処理したものと台付坏が含まれ、赤褐色を呈する厚手の破片が多い。甕はロクロ成形されており巻き上げ痕、外面下半のケズリが観察される。内面はナデ付けられているようである。中には胴部の脹る小型甕の破片が含まれ、表面が丁寧に研磨されている。胎土には石英、黒雲母が多く含まれている。

四 陶磁器（第13図4～11 図版3）

陶磁器はほとんどA-2区の掘立柱建物跡周辺から発見されたものである。1は灰白釉半磁器茶碗で、腰が張って安定感がある。色調は淡い黄緑色で細かい貫入が見られ、胎土は白色で磁器化している。2、3は同類の平茶碗である。4は鉄釉茶碗で口縁部内外が白濁している。胎土は青白色で粗く軟らかい。5は鉄釉香炉^{注3}である。香鉢と呼ばれる類で円筒形をなす。外面は溝状の凹凸をなし、口唇部の幅が広く内側に傾く。底部には粘土をつまんで作った脚が3個貼付されている。白く荒い胎土に鉄釉が掛けられ黒褐色をなし、削られた溝に溜まって黒色を

増す。6は鉄軸油壺である。肩の張る小型の壺で胴部に明瞭な縁が付く。口縁部は直に立ち上がり短い。赤褐色の胎土に鉄軸が掛けられ黒褐色を呈す。肩部の釉薬が剥落し古色を示す。7は鉄軸小壺の破片である。口縁部から大きく脹らみ胴部へと続く。鼠色の粗い胎土に鉄軸が掛けられ黒色を呈す。地肌は二次加熱を受けたと見られ荒れている。8は仏花器で朝顔形に大きく開く口縁部破片である。鼠色の緻密な胎土に灰白釉が掛けられなまこ色をなす。9は鉢の底部破片で青灰色の緻密な胎土に灰釉が厚く掛けられ、蛇の目形に中央の軸を拭き取っている。底部は内反高台である。10は徳利あるいは瓶子口縁部破片で、赤っぽい荒い胎土に鉄軸を掛け、その上に白泥を厚く流す。口唇部は白泥のため丸味を帯びている。11は摺鉢である。口縁部は折り返し様を呈す。内面の条線は12条を1単位とし、間隔を広くとる。口縁近くで右方に抜くのが特徴である。胎土は赤褐色をなし粗く石英粒が目だつ。

五 金属製品及び古銭（第13図12～15 第14図）



第13図 陶磁器等実測図

12は断面方形の鉄製品で一端が尖る。鋸と思われる。13は厚さ約1mmの銅板からなり器状をなし、その中央に0.7cmの穴があいている。直径が6.6cmで高さが約1cmである。pit 4から出土したもので火熱を受けている。14は山形をなす棒状の銅製品で中央に鉾が打たれている。一方に挟り込みが認められ、他端は折損している。火縄銃の一部分と思われる。15は幅0.8cm厚さ0.25cmの板状の銅製品で強い加熱を受け変形している。16は7.7×2.0cmの鉄滓で重量は、76.4gである。分析結果は下表の通りで形状は舟底状をなし凹凸が著しく鍛冶滓と考えられる。

第5表 鉄滓分析結果一覧表（岩手県工業試験場）

	Fe	Mn	Si	P	S	Al	Cu	Zn	Pb	Bi	Sr	Mo	Ca	Mg	Na	K	Cl	その他
大 粒	92.00	0.08	0.06	0.01	0.01													Fe ₂ O ₃ , Fe ₃ O ₄
中 粒	90.00	0.05	0.05	0.01	0.01													Fe ₂ O ₃
細 粒	90.00	0.05	0.05	0.01	0.01													Fe ₂ O ₃
赤 粉	94.00	0.05	0.05	0.01	0.01													Fe ₂ O ₃ , Fe ₃ O ₄
塊 状	90.00	0.05	0.05	0.01	0.01													Fe ₂ O ₃
鋼 鉄 質	90.00	0.05	0.05	0.01	0.01													Fe ₂ O ₃
鋼 鉄 質	90.00	0.05	0.05	0.01	0.01													Fe ₂ O ₃
鋼 鉄 質	90.00	0.05	0.05	0.01	0.01													Fe ₂ O ₃

出土古銭は6枚で内5点は掘立柱建物跡から発見されたものである。すべて寛永通寶で1・2がいわゆる古寛永で、3～6が新寛永である。5は四文銭（波11）で唯一の鉄銭である。



第14図 古銭拓影図

六 石製品及び木製品（第13図21 図版3）

17は硯の左側縁裏側破片である。材質は粘板岩で線刻文字が見られるが判読できない。18は16.7×5.3×2.4 cmの砥石で4面が使用されている。一端に自然面を残す。19は23.0×7.8×5.5 cmの長大な砥石で一面のみ使用されている。使用面以外は自然面で加工痕は認められない。石材は石質凝灰岩である。21は木製の碗で汁器と思われる。腰の張るもので高台が付き肉厚である。内外両面に漆を塗布している。

IV 考察とまとめ

今回の調査で検出された遺構は竪穴住居跡と掘立柱建物跡である。竪穴住居跡は保存が悪く住居跡と推定するにとどまるもので、掘立柱建物跡は完全に1棟確認されたわけではないが、ほぼ復原することができる。そこで、ここでは建物跡の性格について考えることにする。

掘立柱建物跡の性格

まず、建物の復原を行ない形態を把握することにする。検出された建物跡はpitが10個で北東隅、南東隅、それに桁行北側柱が確認されていない。桁行はpit 1・4・7の延長とpit 10を通る垂線の交点（pit A）で求めると10.0 mで、梁間は西妻pit 1・3が6.0 mである。桁行の10.0 mはpit 1・4間、pit 7・A間が3.0 mと同値を示しており、ほぼ誤りなからう。東妻列の延長と北桁行延長の交点をpit B（北東隅柱）とする。すると掘立柱建物跡は桁行10.0 m（33尺）、梁間6.0 m（19.8尺）の東西棟となる。柱間寸法は西妻列で南から4.0 m・2.0 mで東妻列はこの逆になっている。pit 1・2間はpit 2・3間のちょうど2倍となる。南桁行柱列は西から3.0 m、4.0 m、3.0 mで左右対照をなす。pit 4・7間がpit 2・3間の2倍になっており、pit 1・4間及びpit 7・A間が1.5倍となっている。基本柱間は梁間が6.0 m（19.8尺）÷3=2.0 m（6.6尺）、桁行が10.0 m（33尺）÷5=2.0 m（6.6尺）を基本としている。すなわち当建物は基本間尺6.6尺の3間、5間の直家と勘言できる。

間取りはpit 4・5とpit 7・8・9によって大きく3間に分けられ、中央の間はさらにpit 5・6・8によって南北に2分されている。このことから、奥の間も2分されていたと考えられる。ただpit 5・6・7の延長で「田」の字型に区画したものか、pit 2の延長で喰違い4間取りにしたものかは断言できない。しかし、西妻柱のpit 2が東妻柱pit 10のように南に寄らず、北に寄っていることから後者が妥当と推測される。喰違い4間取りは岩手県南部から宮

城県にかけての民家に見られるものである。これを古民家と比較してみる。

『岩手の古民家』に収録されている103例のうち当遺構に類似するものは下表の7例である。

第6表 岩手県の古民家比較一覧表

所在地	軒行・奥間	奥の間	中の間	土間	軒行柱間	礎立柱間	備考
東和町 伊藤家	8×4	2間	2.5間	3.5間	6.20尺	6.34尺	18世紀中期
江刺市 藤野家	8×4	2	2.5	3.5	6.61	6.44	18世紀中期以前 平林屋敷
一関市 鈴木家	8.5×4.5	2	2.5	4	6.32		18世紀中期以前 茂谷屋敷
平泉町 鈴木家	8×4	2	2.5	3.5	6.45	6.44	18世紀中期以前
平泉町 坂本家	8×4	2	2	4			
東山町 千葉家	8.5×4.5	2.5	2.5	3.5			
東根村 小山家	6×4	1.5	2	2.5			
大沢	5×3	1.5	2	1.5	6.6	6.6	

規模は4間×6間が1例、4間×8間が4例、4.5間×8.5間が2例で、当遺跡ほど小さいものはない。この大きさの違いは土間にあり、3.5間が4例、4間が2例と2倍以上の大きさをもつ。座敷は奥の間が2間、中の間が2.5間と、それぞれ半間ずつ大きい。当建物に一番近い小山家と比較すると、梁間は南北半間ずつ縮小したもの、桁行は東から1間縮めたものとなる。同様に、寛政5年(1793)西口村西本屋敷居家作事届書と比較すると、ちょうど小山家を西に半間大きくしたものとなる。これらの例はいずれも喰違い4間取りである。喰違い部分は半間のものが3例で当地域(磐井郡)に限られている。

pit 9は北桁行柱列から約1.0m内側に入った所にあり、上屋柱と推測される。下屋を建物内部に取り込む場合は、間仕切柱列において上屋柱をもち、室内部とするものは下屋柱で受ける(平泉 鈴木家)。pit 9はこれに該当すると考えられ、構造上も類似していると言える。

柱間寸法の比較できるものは4例にすぎないが、6.3尺が2例、6.4～6.5尺が2例で6.6尺のものは見られない。ただ、藤野家の座敷部では6.4尺から6.6尺と不規則であり、近似している。以上のことをまとめると掘立柱建物跡は掘立と礎石立との違いがあるが、間取りは喰違い4間取りをなし『岩手の古民家』に収録された県南部の古民家に類似する。特に下屋を取り込んでいるなど構造上の類似点もあり、磐井郡の例に近いと見られる。

掘立柱建物跡の年代

千葉家では『出火手伝人足覚帳』が伝えられており、天保4年(1833)に被災したことがわかる。今回の調査では整地層の上から焼土が検証され、木灰、炭化物層が薄く存在することが認められた。また、礎石の中には火熱を受けたものがあり、火災は礎石立建物の時代であることも判明した。千葉家では『人足覚帳』を記した茂治作の先代(鳥松)までさかのぼることができ、火災を受けた建物は少なくとも天保4年から20数年前にさかのぼると推測される。

柱間は古代においては10尺等間を用い、中世においては8尺、7尺を用いている。現存建物は6.3尺あるいは6尺であり、年代が下るに従って短くなる傾向がある。弘田藩では正殿、東脇殿ともに新しくなるに従って狭くなっており、同時代においても短くなる傾向にあると言える。

今回検出された建物の間尺は梁間、桁行ともに6尺6寸と考えられ、中世から近世にかけてのものとして推測される。『岩手の古民家』では6.4尺より大きいものは18世紀中期から後期に位置付け、梁間、桁行とも6.4尺を越す佐藤家（花巻）、藤野家（江刺）、鈴木家（平泉）、鈴木家（遠野）の4例は中期以前としている。藤野家は前述の如く座敷部分の柱間が6.4尺から6.6尺と不規則で、より古式と見られ18世紀初期に位置付けられている。

さて、それでは古記録による百姓屋の実態はどうであろうか。『東磐井郡松川村風土古今見聞永代録』^{注6}によると、宝永7年（1710）頃には「（前略）凡廿間許の内板敷之家作五間有是候由承伝申候、其外掘立柱に而土座（中略）、且つ松川村家作石盤を以建候新宅と申者（中略）脇谷屋敷善左衛門先祖、五間の外無是事に申伝承及申候事」とあり、松川村では肝入検断等の分限者に限って石盤立となり、しかも、それは5軒のみで他は掘立柱建物であったことが知られる。『宮城県史26』では、この資料を用いて石盤立（礎石立建物）^{注7}になったのは宝永初年頃とし、富める家から始められたとしている。また『新庄藩文化二年令』には「（前略）前々より小百姓家掘立土間に限り候処近頃ハ猥リニ相聞候併致石場候方持方家持ハよろしく相聞候間以來石場に致し儀は不苦候（下略）」とあり、小百姓は元來掘立柱建物であったが、石場立にしても良いことになり、一室に限って板敷が許されている。すなわち、分限者は18世紀初頭から礎石建に変わり、小百姓でも19世紀には礎石建に変化したことが知られるのである。しかし『東磐井郡西口村居家作事届書』によると「（前略）右之通惣土掘立作事仕度奉願候、（後略）」とあり、東磐井郡地方では18世紀後半でも掘立柱建物が建られていたことが知られる。以上のことをまとめると、①検出遺構と千葉家の伝承、記録から下限が19世紀初頭以前と推定され、②古民家との比較によると18世紀初期に位置付けられる。また、③古記録によると18世紀代が相定される。

①、②、③から18世紀代が妥当ではないかと考えられる。千葉俊氏によると、屋敷地を購入して分家となったと伝えられているという。とすると、掘立柱建物は先住者の建物の可能性が大である。掘立柱建物跡と礎石立建物とは方向が異なることから、そこには何らの関係もなかったと見られ、屋敷地購入時には建物は存在しなかったと推測される。その期間を考慮して18世紀初頭あるいは前半の建物跡と推測される。

注1 『碁石遺跡』 社教シリーズ第17集 大船渡市教育委員会

注2 『日本考古学辞典』 東京堂出版

注3 『瀬戸の古陶磁』 光琳社出版

注4 『岩手県の古民家』 文化財調査報告第26集 岩手県教育委員会

注5 『弘田欄跡』 弘田欄跡調査事務所年報1977・1978 秋田県教育委員会 弘田欄跡調査事務所

注6 『宮城県史19・民俗』 財団法人宮城県史刊行会

注7 『水沢市史6 民俗』 水沢市史刊行会

第2月見山遺跡

I 位置と立地

本遺跡は、平泉泉毛越250に所在する。国鉄東北本線平泉駅の西南約1.2Kmに位置し、衣川丘陵の南東に緩斜する裾部に立地している。

周辺には、特別史跡である「毛越寺跡」があり、隣接して、礎石の残存する伝護摩堂跡や、経藏跡、鐘樓跡と伝えられる場所が点在している。また、東北自動車道路線敷地内には毛越A、B、C遺跡が南接して続いている。

II 調査に至る経過と結果

本遺跡より東側500mに、特別史跡毛越寺跡が所在するため、毛越A・B・C遺跡の発掘調査と併行して、路線内周辺の遺跡再確認調査をおこなった。その際に、当地区からの若干の土師器片が採取され、遺構等の存在が想定されたため、調査を実施した。

トレンチ方式による調査の結果は、想定された遺構・遺物等、一切検出されず、採取された遺物も、周辺からの流れ込みであることが判明した。



第1図 第2月見山遺跡

毛越A・B・C遺跡

I 位置と立地 (第1図)

本調査地区は、東北本線平泉駅の西方約1Kmにあり、特別史跡毛越寺跡の南1Kmに位置する。この付近は衣川丘陵が張り出し、北上川西岸の河岸低地との接点にあたり、東南約0.4Kmには北上川の支流太田川が東流する。調査地区は開析されたやや南北にのびる低位段丘面に立地する。現状は、A地区が宅地・畑地。B・C地区が水田である。標高は、A地区北東側が28～31m。南西側が24～26m。B地区が32～36m。C地区が32～39mである。尚、県道平泉―巖美溪線の東側にA地区。西側にB・C地区がそれぞれ隣接する。

基本層序は、3地区共に開田や宅地造成等による削平と盛土等による攪乱が多く、不明確な個所がある。

A地区北東側段丘面 I層、表土。II a層、黒褐色土。II b層、灰褐色土。III層、明黄褐色砂質土(地山)。I～II b層は厚さが10cm前後・遺構はIII層上面で検出され、遺物はII a・II b層に包含される。

B・C地区 I層、表土。II層、黄褐色粘土。III層、砂質粘土。IV層、黄色シルト質土。V層、粗砂質土。VI層、白灰色粘土。VII層、白灰色砂



第1図 地形・グリッド配置図

層。

II 毛越C遺跡

遺構・遺物共に発見されなかった。

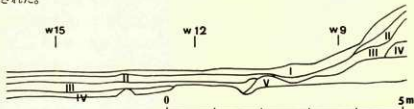
III 毛越B遺跡

遺構・遺物共に発見されなかった。

IV 毛越A遺跡

1 南西地区 (第3図)

概要 この地区は、昭和48年度に調査した段丘崖下の緩傾斜地で、県道平泉-巖美溪線の東側に接する低地で、北西側は畑地、南東側は水田である。畑地は南西に緩斜し、比高は約1m。標高は25~26m。水田の標高は約24mである。畑地からは遺構・遺物が、水田からは遺物のみが発見された。



第2図 Feグリット土層図

	畑地北東側地区	畑地南西地区	水田地区
I 層	黒色耕作土 6~10cm	黒色耕作土	褐色耕作土 5~12cm
II 層	褐色砂質土 6~20cm	明黄褐色砂質土	黒褐色~褐灰色土 6~10cm
III 層	褐色シルト質土 30~50cm	褐色砂質土	黄褐色粘土質土 26~34cm
IV 層	灰黄褐色シルト質土10~30cm	褐色シルト質土	緑灰色砂質土 10~16cm
V 層	褐色シルト質土 5~13cm	灰青色粘土質土	灰黄褐色土 12~16cm

(1) 検出遺構 (第3図)

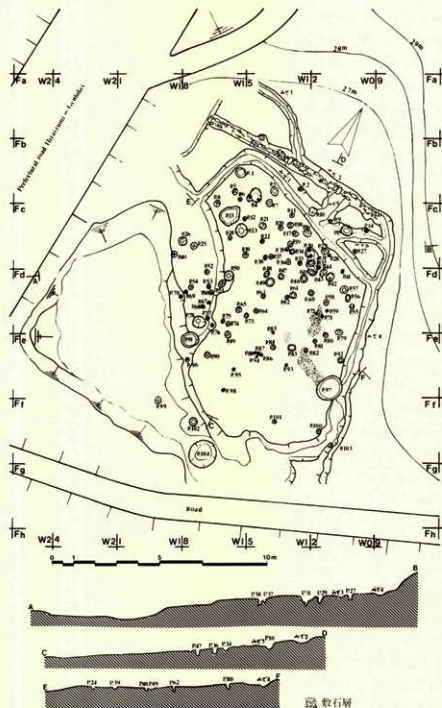
発見された遺構は、溝が6条。ピット104基。池跡が1である。ピットは、柱穴状を呈するもの98基。井戸跡と思われるもの1基。性格不明のもの5基である。

① 溝 (第3図)

○ 溝№1 (遺構の確認) F a 15~F b 15地区

(規模・方向・平面形) 長さ約4m。巾30~50cm。深さ約10cm。北西-南東方向で、中央が北東に張り出し、弧を画く。北西端の状態は明確ではない。

(傾斜) 南東に傾斜し、北西端との比高は下場で約15cmである。



第3図 毛越A南西地区遺構配置

(重複) 溝Ⅱの中央やや西寄りの北側に接続する。

○ 溝Ⅱ (遺構の確認) F a 18～F c 09地区

(規模・方向・平面形) 長さ約9.5 m。巾50～74 cm。深さ約10 cm。ほぼ東西方向を向く。ほぼ直線状で、埋土に直径8～35 cmの礫が、全面に敷かれている。

(傾斜) 西側に傾斜し、東端との比高は約30 cmである。

(重複) 溝Ⅰが、中央やや西寄りの北側に。溝Ⅴが、東寄りの南側に。溝Ⅳが東端に接続している。各溝の下場で最も高いのが、溝Ⅱの東端で、標高26.18 mである。

○ 溝Ⅲ (遺構の確認) F b 18～F d 12地区

(規模・方向・平面形) 長さ約11 m。巾40～80 cm。深さ10～15 cm。西側約3 mが北北東-南南西方向で、東側約8 mが西北西-東南東方向で、約90°屈曲する。

(傾斜) 南南西端に傾斜し、東南東端との比高は34 cmである。

(重複) 中央東寄り北側に、溝Ⅴ・Ⅵが、東端東側に溝Ⅳが接続する。ほぼ中央北側に、ビットⅡ。溝Ⅴとの接続点にビットⅩがある。溝とビットとの新旧関係は不明である。

○ 溝Ⅳ (遺構の確認) F c 09～F f 12地区

(規模・方向・平面形) 長さ約12.5 m。巾50～110 cm。深さ7～44 cm。北北西-南南東方向でほぼ直線状であるが、南南東端約2 mが南西方向に屈曲する。

(傾斜) 南南東側に傾斜し、北北西端との比高は85 cmである。

(重複) 北北西端で、溝Ⅱ・Ⅵに、北寄り西側で、溝Ⅲと接続する。南寄り西側にビットⅨ97、南寄り東側にビットⅩ103がある。溝とビットとの新旧関係は不明である。

○ 溝Ⅴ (遺構の確認) F b 12～F c 12地区

(規模・方向・平面形) 長さ約1.6 m。巾80～110 cm。深さ約10 cm。ほぼ南北方向で、直線状を呈する。

(傾斜) 南に傾斜し、北端との比高は、約15 cmである。

(重複) 北端は溝Ⅱの東寄り南側に、南端は溝Ⅲのほぼ中央北側にそれぞれ接する。又、東壁南端にビットⅨ9がある。溝とビットの新旧関係は不明である。

○ 溝Ⅵ (遺構の確認) F c 09～F c 12地区

(規模・方向・平面形) 長さ約2.5 m。巾30～60 cm。深さ約15 cm。東北東-西南西方向で、中央部が若干北北西に張り出す。

(傾斜) 西南西に傾斜し、東北東端との比高は約17 cmである。

(重複) 東北東端は、溝Ⅳの北北西端に。西南西端は、溝Ⅲの東寄り北側に接続する。北北西壁にビットⅩ14・15がある。溝とビットとの新旧関係は不明である。

第1表 柱穴状ビット一覧

径は東西×南北 単位cm

No	上場径	下場径	深さ	平面形	備 考	No	上場径	下場径	深さ	平面形	備 考
1	47×43	35×36	25	円 形		53	20×19	11×14	13	円 形	埋土に炭化物
2	23×16	17×11	12	楕 円 形		54	18×19	10× 9	15	円 形	埋土に炭化物
3	30×34	20×24	24	楕 円 形		55	20×20	18×20	43	円 形	下場西にずれる
4	63×55	54×34	30	不 整 形	下場に小ビット 2	56	38×42	26×27	50	楕 円 形	
5	24×26	14×18	23	円 形		57	37×25	20×16	41	楕 円 形	
6	16×14	10× 7	8	円 形		58	30×28	16×15	53	楕 円 形	
7	27×27	18×16	25	円 形	上場崩れる	59	12×12	12×12	13	円 形	
8	27×27	11×14	26	円 形	下場東にずれる	60	29×22	10×10	29	楕 円 形	
9	16×14	9× 8	17	円 形		61	27×24	23×23	30	楕 円 形	下場北にずれる
10	36×38	12×12	36	円 形	下場南にずれる	62	14×17	14×12	32	楕 円 形	下場北にずれる
11	17×18	9×10	22	円 形		63	17×18	16×17	16	円 形	下場東にずれる
12	14×16	10×12	8	円 形		64	24×22	21×18	43	円 形	下場北東にずれる
13	89×83	76×64	26	不整楕円		65	22×22	16×15	27	楕 円 形	下場北西にずれる
14	24×25	10×11	26	円 形		66	23×22	17×16	16	円 形	
15	50×46	17×23	40	楕 円 形	下場東にずれる。鎌含む	67	12×11	10×10	16	円 形	下場北にずれる
16	33×28	7×10	10	楕 円 形		68	14×15	14×15	5	円 形	
17	28×25	9×10	31	不整円形		69	15×14	9×12	11	円 形	
18	28×25	12×14	13	不整楕円		70	15×16	12×12	16	円 形	下場東にずれる
19	26×26	20×19	4	円 形		71	13×14	13×14	10	円 形	
20	25×26	14×13	30	円 形		72	13×13	14×14	22	円 形	
21	27×25	18×22	22	円 形	下場西にずれる	73	22×20	17×17	7	円 形	下場北にずれる
22	15×15	9×10	7	円 形		74	14×13	14×13	2	円 形	下場東にずれる
23	54×64	23×27	13	楕 円 形		75	16×15	12×11	10	円 形	
24	13×13	7× 7	17	円 形		76	15×18	13×14	36	円 形	
25	28×28	11×13	18	円 形	下場東にずれる	77	18×18	15×14	31	円 形	下場北西にずれる
26	37×40	12×18	23	円 形	下場北西にずれる	78	65×56	21×24	18	楕 円 形	
27	23×22	12×11	30	円 形		79	24×26	16×14	19	円 形	
28	14×14	8× 9	4	円 形		80	14×14	11×10	22	円 形	下場東にずれる
29	34×27	16×15	32	楕 円 形	下場西にずれる	81	16×18	14×10	12	円 形	下場北楕円形
30	14×13	10× 9	21	円 形	下場北にずれる	82	18×17	14×14	25	円 形	下場南西にずれる
31	16×14	13×12	34	円 形		83	34×20	34×25	64	楕 円 形	
32	35×33	31×22	38	円 形	埋土に柱根残存。鎌含む	84	18×18	14×17	42	円 形	下場東へずれる
33	16×16	8× 8	16	円 形		85	19×19	12×17	6	円 形	
34	26×24	15×14	14	円 形		86	14×15	8× 8	5	円 形	ビットNo.87に切られる
35	16×14	12×10	9	円 形		87	16×16	11×12	不明	円 形	残い
36	20×24	15×20	25	不整楕円	下場北西にずれる	88	17×14	14×12	不明	円 形	残い
37	20×18	12×12	10	円 形		89	26×24	12×16	12	楕 円 形	
38	12×14	7× 7	14	円 形		90	19×20	15×15	12	円 形	
39	18×18	14×12	6	円 形		91	71×66	62×58	15	楕 円 形	
40	20×23	11×12	18	円 形		92	22×20	18×18	20	円 形	下場東にずれる
41	13×16	9×11	6	円 形		93	16×16	14×14	33	円 形	下場東にずれる
42	37×35	13×12	14	円 形	埋土に機土・炭化物	94	11×10	11×10	11	円 形	
43	25×33	18×12	40	楕 円 形	下場北東にずれる	95	21×20	12×12	10	円 形	
44	15×16	11×13	20	円 形	ビットNo.45に切られる	96	15×18	15×18	33	円 形	柱根残存
45	30×27	17×20	26	円 形		97	119×100	111×115	176	楕 円 形	井戸跡
46	30×31	24×23	28	円 形		98	25×32	19×21	20	楕 円 形	
47	28×25	14×13	26	楕 円 形		99	22×23	11×11	31	円 形	柱根残存
48	19×22	8× 8	17	不整楕円		100	15×15	12×12	22	円 形	下場北にずれる
49	22×22	14×11	14	楕 円 形		101	17×16	不明×不明	不明	円 形	
50	40×41	20×22	46	円 形		102	32×29	27×23	11	円 形	柱根残存
51	35×39	11×13	27	楕 円 形	下場北東にずれる	103	20×15	15×19	10	楕 円 形	下場東にずれる
52	24×25	13×13	18	円 形		104	132×104	68×80	25	不整楕円	

② ビット群 (第3図 第1表)

ビット群は、溝と池の間に集中して存在し、Fc～Ff、12～18地区に位置する。合計104基で、第1表の如く、柱穴状を呈するビットは上場の径11～50cm。下場の径7～36cm、深さ2～64cm。溝と重複するのが厩2・9・10・14・15・103の6基。池と重複するのが厩99の1基。ビット間で切り合うのが厩44と45。厩86と87である。浅いビット内に厩30・31・32・45がある。ビット厩97は、調査担当者が井戸跡と称しており、他のビットより径が大きく、深い。ビット厩13・23・78・91・104は、径が大きく、浅いことから、柱穴状ビットと区別されるが、性格は不明である。柱穴状ビットの中で、厩1・3・10・15は、一直線上に並び、溝厩2と平行している。厩1と3、厩10と15の間は、共に1.8m。厩3と10は2.03mである。又、厩7・8・17・30・42・43・57も、一直線上に並び、溝厩3とは平行している。その間隔は一定ではない。他にも一直線上に並ぶビットも無いわけではないが、間隔は一定せず、掘立柱建物跡として輪郭を成さない。その他厩96・102には柱根が残存し、厩32・42・53・54には柱根の断片と思われる炭化物が埋土に残存していた。

③ 池跡 (第3図)

調査担当員が池と称した西側低地は、Fc～Ff、21～27地区にあり、三角形状を呈する。西側南北線、南側東西線、北東側北西-東南線は、やや直線的で、西側約9m。南側約9.5m。北東側約12m。面積約60㎡である。深さは約30～40cmで、南東端が深くなる。

(2) 出土遺物 (第4・5図 図版1～3)

調査地区からは、大量で多種類の遺物が発見された。ダンボール箱15箱になる。これらは、同種類の遺物でも第I層から第V層の各層に包含されている。その種類は、燈明皿と思われる種類を主とした土師質土器。須恵器の壺と坏。陶器。磁器。瓦。竈の羽口等の土製品。砥石。硯等の石製品。鎌。刀。刀子。釘等の鉄製品。古銭。枕。藁等である。

○ 土師質土器 (第2表 第4図1～31 図版1-1～31 図版3-72～79)

いずれも胎土・焼成が不良で、磨滅著しい小破片が多い。同一個体と思われるもの数片があっても、折断面が磨滅し接合不能のものが大部分で、部位の明確な破片数だけで一万七千片を越える。出土層位は第I層から第V層に及び、IV層が特に多い。大部分皿形で、手捏ね、丸底、口径10cm以上(I群1類)。ろくろ成形、平底、口径10cm以上(I群2類)。手捏ね、丸底、口径10cm以下(II群1類)。手捏ね、平底、口径10cm以下(II群2類)。ろくろ成形、平底、口径10cm以下(II群3類)。に大別した。II群1類の数が最も多く、I群1類がこれに次ぐ。I群2類とII群2類は非常に少ない。又磨滅して明確ではないが、内黒処理と思われるものも

第2表 土師質土器一覽

分類 記号	発掘回 図番	出土地点	別称	残存部位	口径cm	器高cm	底径cm	成形 口・体 底	技法	色	調	備	考
I-1類	1	Fb 12	4b	口・体・底	14.4	2.8	12.3	手捏丸	丸	灰 白 色	艶減著しい		
	2	Fg 12	3	口・体・底	15.3	2.9	12.9	手捏丸	丸	底 淡 橙 色	艶減著しい		
	3	Fe 12	-	口・体・底	15.2	3.1	13.8	手捏丸	丸	底 灰 白 色	底上面に煤		
	4	Fe 12 ピット97	-	口・体・底	15.2	2.9	13.2	手捏丸	丸	底 灰 白 色	艶減著しい		
	5	Fb 12	-	口・体・底	15.0	3.15	13.0	手捏丸	丸	底 灰 白 色	艶減著しい		
I-2類	6	Fe 12 ピット97	-	口・体・底	13.35	2.8	8.3	ろくろ	平底・回転糸切り	にふい黄褐色	底上下面に煤		
	7	Fe 21	4	口体 $\frac{1}{2}$ ・底 $\frac{1}{4}$	約11.6	4.0	約7.1	ろくろ	平底	底 浅 黄 橙 色	艶減著しい		
II-1類	8	Fg 12	2	口体 $\frac{1}{2}$ ・底 $\frac{1}{4}$	約14.0	4.0	約7.2	ろくろ	平底・回転糸切り	橙 色	艶減著しい		
	10	Fc 12	1	口・体・底	8.6	1.75	7.8	手捏丸	丸	底 浅 黄 橙 色	艶減著しい		
	11	Fc 15	4	口・体・底	8.6	1.9	7.5	手捏丸	丸	底 灰 白 色	艶減著しい		
	12	Fe→Fe 12 12のみぞ	1	口・体・底	8.2	1.3 ~1.3	6.9	手捏丸	丸	底 灰 白 色	艶減著しい		
	14	Fe→Ff 12のみぞ	3	口・体・底	9.2	2.0	8.1	手捏丸	丸	底 灰 白 色	艶減著しい		
	15	Fe 24	4	口・体・底	8.4	1.4	6.9	手捏丸	丸	底 灰 白 色	底下面に煤		
	16	Fa 12	1	口・体・底	8.2	1.8	6.6	手捏丸	丸	底 黄 灰 色	内面の艶減著しい		
	17	-	-	口・体・底	8.8 ~9.4	2.1	8.1	手捏丸	丸	底 灰 白 色	内面に煤、赤み著しい		
	18	Fe 21	4	口・体・底	8.8 ~9.0	1.95	約7.0	手捏丸	丸	底 灰 白 色	艶減著しい		
	19	Ff 15	4	口・体・底	9.1	2.2	7.9	手捏丸	丸	底 灰 白 色	艶減著しい		
	20	Ga 15	4	口・体・底	9.5	2.2	7.8	手捏丸	丸	底 灰 白 色	艶減著しい		
	21	Fe 15	4	口・体・底	9.8	1.7	8.4	手捏丸	丸	底 灰 白 色	内面に煤		
22	Fd 15	-	口・体・底	9.3	1.5	6.7	手捏丸	丸	底 灰 白 色	艶減著しい			
23	Fe 18	4	口・体・底	8.4	2.0	7.4	手捏丸	丸	底 灰 白 色	艶減著しい			
24	Fd→Fe 12	2-3	口・体・底	9.2	1.7	7.7	手捏丸	丸	底 灰 白 色	赤み著しい			
25	De 21	4	口・体・底	8.4	1.7	7.4	手捏丸	丸	底 灰 白 色	内面に煤			
II-2類	9	Fb→Fe 21-24	-	口・体・底	8.4	1.6	7.4	手捏丸	平	底 灰 白 色	艶減著しい		
	26	Ff 21	4	口・体・底	8.0	1.4	6.3	手捏丸	平	底 浅 黄 橙 色	艶減著しい、胎土に砂多		
II-3類	13	Fe 15	4	口・体・底	9.1	1.85	6.6	ろくろ	平底・回転糸切り	灰 白 色	艶減著しい		
	27	Ga→Gb 12	3	口・体・底	8.1	2.3 ~2.5	8.0	ろくろ	平底・回転糸切り	浅 黄 橙 色	艶減著しい		
	28	表 探	-	口・体・底	9.0	1.9	6.9	ろくろ	平底・回転糸切り	にふい橙 色	艶減著しい		
	29	-	-	口・体・底	7.8	1.4 ~1.6	6.0	ろくろ	平底・回転糸切り	灰 白 色	艶減著しい		
	30	表 探	-	口・体・底	8.4	1.5	6.0	ろくろ	平底・回転糸切り	にふい橙 色	外体面の一部に煤		
31	表 探	-	口・体・底	8.8	1.5	6.0	ろくろ	平底・回転糸切り	にふい橙 色	艶減著しい			

若干みられる。I群2類とII群3類は、ろくろなどで成形無調製、回転糸切りが大部分であるが、II群3類に回転篋切りが1点(第4図29)ある。I群1類、II群1類・2類の中には、内面に煤様の付着物がみられ、燈明皿として使用されたものもあると思われるが、II群3類等は容量が少なく、燈明皿には使用不可能と思われるものもある。ろくろ成形の皿は、色調が橙色系で、

焼成も手捏ねのものより良好と思われるものが多い。手捏ねのものは、色調が灰白色で、胎土焼成共にろくろ成形のものよりは不良と思われるものが多い。

○ 須恵器 (第4図32~35 図版1-32~35)

壺形。口縁部4片、体部27片が、第I層~第V層より出土している。体部27片の内8片が、外面に平行叩き目痕があり、8点中2点(第4図32・33)の内面に当て工具痕がある。他は、横なで成形である。口縁部破片の内1点は口縁部が上に挽き出され、1点は口端部が丸みを持ち、沈線が1本横に走る。1点は口端部が平らである。1点は口端部が上下に挽き出される。いずれも小破片で、全容は不明、計測不能である。

杯形 底部のみ $\frac{1}{5}$ 残存で、回転糸切りである。

○ 陶器 (第4図36~40 図版1-36~40 3-80~84)

中世陶器と思われるもの61片。近世以降と思われるもの11片である。中世陶器と思われるものは、口縁部5片、頸部1片、肩部4片、体部47片、体下・底部2片、底・高台部1片、高台部1片で、体部外面の一部に常滑に類似した押印のあるもの5点(第4図36~40)。緑色の自然釉が付着したもの20片。灰色の自然釉が付着したもの4点。青白色の自然釉が付着したもの(第4図39)1点等がある。器形は小破片で不明なものが多いが、壺形、鉢形、碗形と思われる。近世以降と思われる陶器は、小形の碗が大部分で、釉は透明である。

○ 磁器 (図版3-97・98)

青磁と思われるもの15片、白磁と思われるもの5片で、溝底1の北E j~Fa、12~15地区から4片。ピット群の西側と南側、及び池跡のI層~N層より11片が出土している。他の5片は出土地点と層位の注記が無い。いずれも細片で、計測不能である。

青磁と思われる破片は、口縁部4片、体部10片、底・高台部1片で、体部外面に花卉状の紋様のあるもの2片、内面に花卉状の紋様のあるもの3片、内面に沈線の入ったもの3片である。

白磁と思われる破片は、口縁部1片、体下部1片、体下・底部1点、高台部2点で、紋様等は認められない。

○ 布目瓦 (第4図41~43 図版1-41~43)

41は、側面と下面の大部分が剥離している。厚さ約1.6cmで、上面を縄目の叩き板で叩きしめている。下面は細かい布目と思われる残存面が若干ある。胎土は硬質で砂粒は含まれない。色調は灰白色。焼成は良好で、Fc21地区N層出土である。42は、側面全面と上面が剥離欠損している。下面はかなり湾曲し、細かい布目痕が残る。胎土は硬質で砂粒を含まない。色調は灰白色。焼成は良好で、Fc21地区N層出土である。43は、下面が剥離し、三方の側面が欠損する。上面は縄目の叩き板で叩きしめられ、残存した側面は、なで痕が認められる。胎土は硬質で、砂粒を含まない。色調は灰白色。焼成は良好で、Fg24地区N層出土である。重量は、

41が36.1g、42が14.6g、43が19.2gである。

○ 硯 (第4図44~47 図版1-44・45・47 2-46)

44は、中央部の上下両面と両側面が残存する。両端が欠損しているため線の長さが不明。横5.0cm。厚さは緑部で1.4cm。中央で0.8cmである。上下両面共磨滅し中央が凹む。石質は、砂質凝灰岩で、Ej15地区II層とFc21地区N層から1片ずつ出土し接合した。45は、中央部の底面と両側面、海の一部が残存し、他は剥離欠損する。横の長さは下面で7.7cm。上面はやや広がる。石質は、粘板岩で、Fi12地区N層出土である。46は、海の左側を粗削りし、緑の輪郭を線刻している。横8.1cm。縦10.0~10.5cm。厚さ2.0~2.7cmで、左手前と右前方が破損している。石質は泥質細粒凝灰岩で、Fc21地区N層出土である。47も、46同様未完成品で、上面の中央部と一方の側面が残存する。緑部の輪郭を線刻し、中央上面を若干削っただけで製作を中止している。石質は、粘板岩で、Fg15地区I層出土である。重量は、44が29.85g、45が96.1g、46が439.9g、47が33.65gである。

○ 砥石 (第5図63・64 図版2-63・64)

63は、半分欠損する。上下左右4面共研磨の痕跡がある。残存部長さ8.2cm。巾3.1cm。厚さ1.7cm。重量87.8g。石質は流紋岩質凝灰岩。Fc12地区N層出土である。64は両端が欠損する。上下左右4面共研磨の痕跡がある。残存部長さ9.1cm。巾4.9~5.4cm。厚さ1.3~1.9cm。重量145.0g。石質は、砂質凝灰岩で、Fc21地区N層出土である。

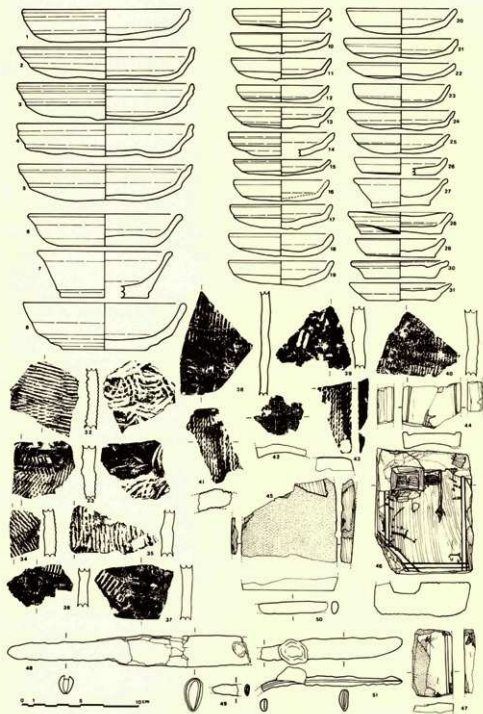
○ 石製品 (第5図65 図版2-65)

65は、上面が平坦に磨かれ、線刻がほぼ平行に3本と、それに直行する1本が彫られている。側面と下面は剥離欠損し、不整五角形である。長さは2.0~6.3cm。巾は3.9~5.1cm。厚さ0.4cmである。線刻は平行する3本中左側が、長さ2.5cm。巾0.3cm。深さ約0.1cm。断面V字形。中央は、長さ4.4cm。巾0.2~0.3cm。深さ0.05cm。断面半円形。右側は、長さ4.4cm。巾0.2~0.3cm。深さ0.05cm。断面V字形。3本に直行する線刻は、長さ3.8cm。巾0.1cm。深さ0.05cm。断面V字形である。石質は淡緑色細粒凝灰岩。重量16.7gである。Fc21地区N層出土で、名称・使用目的等は不明である。

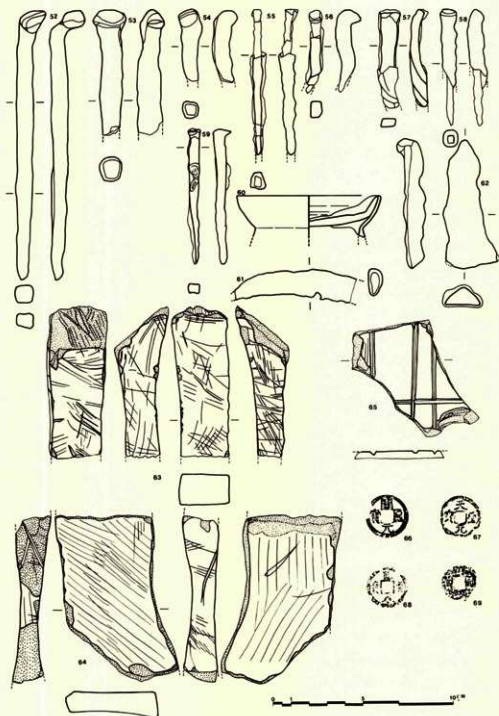
他に2個体の石製品がある。1つは、長さ7.1cm。巾3.8cm。厚さ0.4~1.0cmで、三方の側面に切断痕、上下両面に若干磨き痕がある。重量33.0g。石質は、細粒凝灰岩。Fc15地区出土である。1つは、両端欠損、上下面は自然剥離し、両側面のみ加工痕が残存する。残存する長さ8.3cm。巾4.4~4.6cm。厚さ1.1~1.4cmで、両側面に折断痕がある。重量121.8g。Fd15地区IV層出土。石質は、粘板岩である。

○ 鉄製容器 (第5図60 図版2-60)

口体底 $\frac{1}{3}$ 、高台部若干残存する。推定口径約8.0cm。底面からの器高1.8cm。底径約6.0cm。



第4圖 毛越A南西側出土遺物 I



第5図 毛越A南西側出土遺物Ⅱ

高台上端の径6.0cm、残存する高台の高さ0.5cm、重量51.8gである。体部底部は、三重になっているように思える。体壁は若干丸みもち外傾する。高台部は下半部が広がっている。全容が不明で断定出来ないが、口縁部と体部と思ったのが高台部で、高台と思ったのが、体壁下端とも思える。Fe21地区N層出土である。

○ 鎌 (第5図61 図版2-61)

先端と茎が欠損する。残存部の長さ約6.5cm、巾3.5cm、棟の厚さ0.75cm、刃先の方に反りがみられるので、鎌と思われる。重量110.7g。Fe21地区N層出土である。

○ 鉄刀 (第4図48 図版2-48)

刀身部は中程で折断し、先端が欠損する。刀身部の巾2.7cm、棟の厚さ1.4cm、茎の長さ約9.0cm、巾1.5~1.9cm、厚さ約1.2cm、重量110.7gである。刀身部に反りは認められず、長さは、茎の2~3倍と推定しても30cm以下で短刀と思われる。Fd24地区N層出土である。

○ 刀子 (第4図49~51 図版2-49~51)

49は両端が欠損した破片で、切先に近い部分と思われる。残存部長さ2.2cm、巾0.7~1.0cm、棟の巾0.3cm、重量1.2g。Fc12-15地区I・II層出土である。50は、刀身部中央で、何れか切先か刃区か不明である。残存部長さ5.9cm、巾1.1cm、棟の厚さ0.6cm、重量5.6g。Fd24地区N層出土である。51は、刀身部はほぼ完成。茎は棟区から2.3cmの所で切断されている。長さ9.8cm、厚さ1.8cm、棟の巾約0.5cm、重量35.35gである。平造り。角棟。甲伏鑑と思われる。Fb15地区III層出土である。尚第5図62(図版2-62)は、鉄製不明品。

○ 釘 (第5図52~59 図版2-52~59)

鉄製品の大部分はかなりの錆で覆われ、更に錆に粘土質土が浸透している。本体もかなり変質し、錆を落とすと破損しやすい。出土した釘状鉄製品は、断面が丸のもの17点以上。断面方形のもの22点以上。不明のもの111点以上である。比較的保存良好で、断面方形のもの8点を図示した。52は、ほぼ完成で、長さ14.8cm、巾0.6~0.9cm、厚さ0.6~0.9cm、重量34.75gで、頭が屈曲する。54は、先端欠損で、残存部長さ4.0cm、巾0.7~1.2cm、厚さ0.8~1.0cm、重量7.35g。頭部屈曲。55は、先端欠損で、残存部長さ8.1cm、巾0.5~0.8cm、厚さ0.5~0.9cm、重量8.3g。頭部屈曲。56は、先端欠損で、残存部長さ4.5cm、巾0.5~0.6cm、厚さ0.6~0.9cm、重量5.05g。頭部屈曲。57は、先端欠損で、かなり捩れ螺旋状になっている。残存部長さ5.4cm、巾0.8~1.0cm、厚さ0.5cm、重量11.8g。頭部屈曲。58は、先端欠損で、残存部長さ6.4cm、巾0.2~0.6cm、厚さ0.9cm、重量6.85g。頭部屈曲。59は、ほぼ完成で、長さ7.4cm、巾0.2~0.6cm、厚さ0.5cm、重量9.2g。頭部屈曲。52はFc15地区II層出土。53~59はFd24地区N層出土で、60本余の内7点である。

○ 鉄滓(図版3-89~96)

89は、 $3.0 \times 1.7 \times 1.5$ cm, 10.4g。F b 18地区Ⅲ層出土。90は、 $1.5 \times 1.0 \times 0.75$ cm, 0.8g。F b 18地区Ⅲ層出土。91は、 $3.5 \times 5.2 \times 2.2$ cm, 41.85g。F e f 24地区Ⅲ層出土。92は、 $1.4 \times 1.0 \times 1.0$ cm, 1.8g。F e f 24地区Ⅲ層出土。93は、 $3.2 \times 2.5 \times 1.3$ cm, 9.4g。F b c d 15地区Ⅲ・N層出土。94は、 $4.9 \times 3.2 \times 1.5$ cm, 26.35g。F b c d 15地区Ⅲ・N層出土。95は、 $3.0 \times 3.0 \times 1.1 \sim 2.0$ cm, 14.4g。出土地点不明V層出土。96は、 $3.5 \times 1.9 \times 1.9$ cm, 9.2g。出土地点不明V層出土である。

○ 古銭 (第5図66~69 図版2-66~69)

66は「開元通宝」。輪外径2.3cm, 輪内径1.9cm, 内郭の縦0.75cm, 横0.8cm, 孔の縦0.7cm, 横0.7cm, 重量1.62g。67は、「天聖元宝」。輪外径約2.3cm, 輪内径1.9cm, 内郭の縦0.8cm, 横0.7cm, 孔の縦0.6cm, 横0.6cm, 重量1.65g。66・67共にF c 24地区Ⅲ層出土。68は、「寛永通宝」。新寛永銭で、輪外径2.2cm, 輪内径1.9cm, 内郭の縦0.8cm, 横0.8cm, 孔の縦0.6cm, 横0.6cm, 重量1.28g。F d 21地区N層出土。68と同一地区からもう1点出土しているが、破片で「通」のみ認められる。69は、「寛永通宝」。新寛永銭で、破損・磨滅が著しい。輪外径不明, 輪内径1.9cm, 内郭の縦0.8cm, 横0.8cm, 孔の縦0.6cm, 横0.6cm, 重量1.4g。F d 21地区N層出土である。69と同地区からもう3点出土しているが、互に密着し、破損著しく全容・種類は不明、計測不能である。いずれも背文は無い。

○ 鞆羽口 (図版3-85~88)

85は、 $2.0 \times 1.6 \times 1.6$ cm, 重量4.25g。F g 21地区出土である。86は、 $4.4 \times 4.5 \times 2.8$ cm, 重量49.4gで、先端に鉾津が付着する。F b 12地区Ⅱ層出土である。87は、 $3.4 \times 3.9 \times 1.8$ cm, 重量22.1g。F d 21地区N層出土である。88は、 $3.7 \times 2.7 \times 2.4$ cm, 重量20.9g。F g 18地区N層出土である。

○ その他の出土品

杭1本、桃の種2個、薬が、土師質土器約20片と共にビットA697(井戸跡)から出土している。又、遺物ではないが、貝化石(図版2-71)1個と、珪化木片12個が出土している。貝化石は、横5.7cm, 縦3.5cm, 厚さ2.3cm, 重量25.2gで、F d 21地区N層から出土した。

遺構に伴う遺物は、溝A3の埋土から出土した土師質土器口縁部22片、体部3片、体底部14片、口体底部9片、底部48片。溝A4の埋土から出土した土師質土器口縁部49片、体部8片、体底部47片、口体底部46片、底部176片。須恵器壺体部1片。釘2本。F e 12ビットA697の埋土から出土した杭、桃の種2個、薬2塊、土師質土器口縁部5片、口体底部10片、底部9片。炭化物片である。他の遺物は各地区各層から出土し、しかも現代の物品と共存しているため、層位による年代決定資料にはならない。北東側段丘面から流れ落ちた物や、直接この地区に廃棄され、後に攪乱等のため散乱したものと等があると思われる。

2 北東地区

(1) 検出遺構

検出された遺構は、溝及び溝状遺構9条、ピット群、土壇2、包含層、塚3基である。包含層と塚3基を除いては第Ⅲ層の地山面で検出されたものである。

① 溝及び溝状遺構(第6図 第3表 図版4-3、5-1、2、6-2)

G b 9溝及びG b 9溝状遺構は共に北端が擾乱によって不明であり、南端は農道によって失なわれている。更に畑地耕作によって削平され、僅かに凹地状に残存する。底部には多量の炭化物・焼土粒や拳大の礫に混じて多量の陶器片と若干の土師質土器片が含まれ、その一部は火熱をうけて変質した破片が認められる。

G b 6溝は南北に直線状に延び、G b 9溝状遺構に平行する。南端はG b 9溝に切られて明らかではないが、底部には炭化物、焼土粒が含まれ、G b 9溝と同様の覆土である。遺物は伴出してない。

G f 9・12溝の2条は、ほぼ同一方向にのびる浅い溝で、北端より南へ僅かに傾斜している。覆土は一様の暗褐色土で、土師器片が混入する。重複するピットは溝を切るが、不整形でP 38を除いて柱穴との新旧関係は判別できない。

G g 15溝は南北端で共に東に屈曲している。北端の屈曲部分から南1 m付近を境に両端へ若干傾斜している。炭化物・焼土粒の混入する褐色土の覆土には内面黒色処理の土師器片と須恵器片を伴う。

G j 12溝では南北両端で東へ湾曲しているが、北端は擾乱をうけて不明である。北西隅より南へやや傾斜する。重複するP 29・32は溝に先行するが、P 1は同質の暗褐色土をなして判然としない。

G j 12溝はH a 12溝と湾曲部分で重複し、暗褐色土の覆土を切ってH a 12溝の黒色土となる。共に覆土には土師質土器片が混入している。

溝遺構はいずれも削平によって僅かに底部が残存しているものとみられる。G b 9～G b 6溝については擾乱にあつて明確ではないが、G f 9溝以南のそれでは共に南北は6 m前後を計り、それぞれ屈曲して東へ延びているものとみられる。覆土には炭化物・焼土粒が混入するが、溝遺構に伴う関連遺構は認められず、その性格



第6図 G c 9～G b 6溝遺構

は明確でない。G i 12溝以東に検出されるビット群によってみるならば、掘立柱建物跡に伴う雨落溝、あるいは削平地形成に伴う排水路等の可能性もあげられる。また、近接するG b 9、G b 6、G f 9、G f 12溝の4条はほぼ類似する南北方向にあり、G g 15、G i 12溝においてもやや西偏して近似する方向にあって、それぞれ短期間における意図的な開削が推定される。

第3表 溝及び溝状遺構

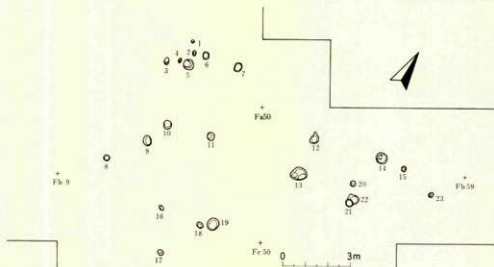
溝名	東西	南北	最大幅	深さ	南北方向	覆土中の遺物	備考
G b 9	m	5.30m	0.60m	0.13m	≒ 30.0°W	土師質土器・陶器	北端不明
G b 9溝状		1.70	0.80	0.25	10.0	" "	南北端不明
G b 6		2.65	0.40	0.07	10.0		南端不明
G f 9		6.80	0.30	0.08	10.5		
G f 12	2.40	5.10	0.45	0.07	10.5		北端より傾斜
G g 15	1.70	6.00	0.55	0.16	24.0	土師器・須恵器	北屈曲部より傾斜
G i 12	2.10	5.55	0.70	0.19	22.0	土師器	北西隅より傾斜
G j 12	2.80	4.20	0.50	0.11	17.5	" "	G j 12溝に先行
H a 12	3.50	1.80	0.40	0.06	0.5	" "	東端より傾斜

② ビット群 (第6・7図 第4表 図版4-2、5-1・2)

E j ~ E dには23、G a ~ G iに41、G j ~ H aに52、合せて116の柱穴状ビットを検出する。共に削平や擾乱をうけて柱穴と識別困難なビットを含んでいる。

E j ~ E dにかかるビット群は小範囲に認められるが、規則的な配置はみい出し得ない。径0.20~0.30 mの円形をなし、検出面下の深さ0.20~0.30 mのものが多く、覆土は黒褐色土で土師質土器の細片を伴い、焼土・炭化物の粒子が大部分に混入している。

G a ~ G iでは円筒状をなすビットが多く、径0.25 m前後でP30・40には柱痕が残存し、掘

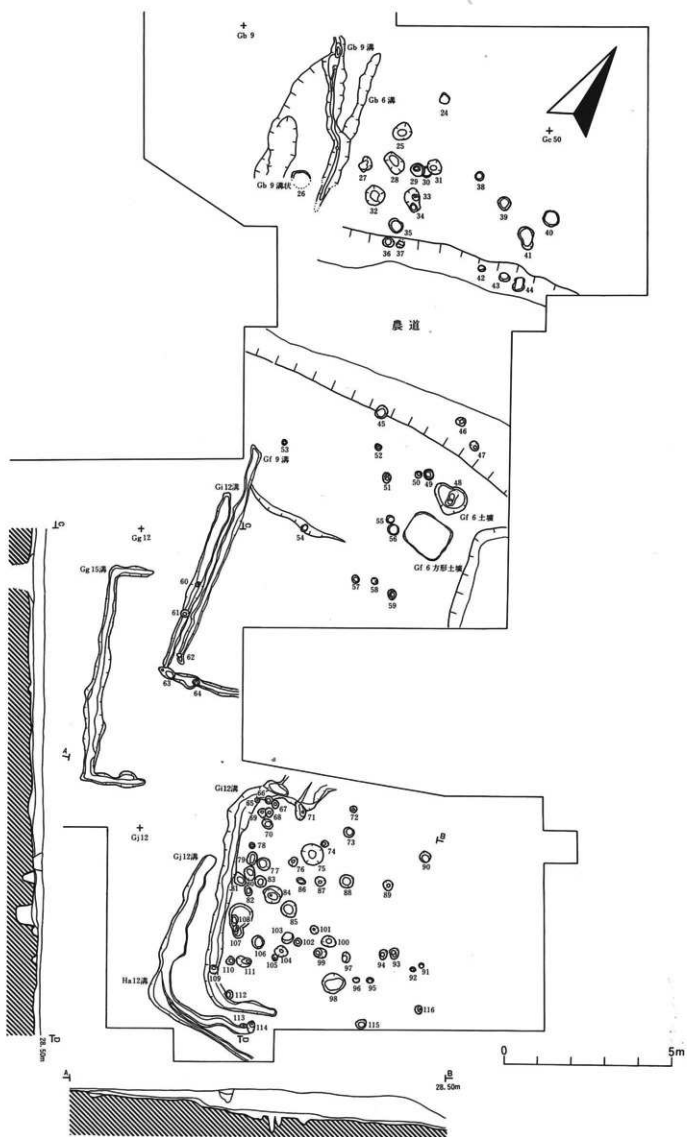


第7図 柱穴状ビット群 (E j ~ F d) 配置図

第4表 柱穴状ピット計測表

No.	検出面径	底面径	深さ	概形	備	考	No.	検出面径	底面径	深さ	概形	備	考
1	14×13cm	14×15cm	15cm	円			59	27×24cm	7×9cm	55cm	楕円		
2	16×21	12×14	53	楕円	枕残存		60	15×15	6×5	9	円		須器
3	33×20	21×19	58	-	-		61	25×24	13×14	40	円		
4	12×14	5×12	25	-	-		62	13×11	7×5	12	楕円		
5	48×47	32×30	29	円	土師質土器		63	51×27	24×16	39	楕円		
6	28×32	21×28	29	楕円			64	39×17	9×11	15	楕円		
7	34×27	28×31	16	-	-		65	15×16	6×7	15	楕円		
8	28×26	22×21	24	円			66	22×23	12×14	42	-		炭化物粒混入
9	36×46	13×11	37	楕円			67	22×25	9×10	41	-		
10	36×40	29×30	29	円			68	24×30	11×9	41	円		炭化物粒
11	32×37	19×24	36	-	-	土師質土器	69	23×32	9×11	36	-		
12	38×52	23×31	39	不整円			70	32×28	19×18	47	楕円		土師質土器
13	77×57	26×21	42	-	-	土師質土器	71	32×55	8×10	36	-		炭化物粒混入
14	51×52	15×13	26	円			72	22×18	8×8	17	-		
15	20×28	15×15	30	-	-		73	30×30	10×12	45	円		土師質土器
16	20×20	12×10	30	楕円			74	23×20	12×14	38	楕円		
17	27×26	11×12	15	円			75	62×64	24×23	32	円		炭化物多量
18	27×27	15×18	33	楕円			76	26×28	9×8	15	-		炭化物粒混入
19	54×55	39×39	40	円			77	39×39	24×24	14	-		炭化物多量
20	23×29	11×18	39	-	-	枕残存	78	17×17	10×10	7	楕円		
21	33×36	27×27	49	-	-	P22に重複	79	29×50	16×28	10	-		炭化物含む
22	53×43	34×33	14	-	-	P21より古い	80	52×43	21×18	43	-		
23	22×23	11×12	21	円			81	33×48	24×18	48	-		土師質土器
24	37×33	26×28	33	楕円			82	21×29	7×10	34	-		
25	56×53	26×21	13	不整楕円		底部に炭化物・焼土粒	83	34×35	17×21	14	円		
26	54×-	35×-	62	円			84	55×52	7×7	47	-		炭化物・焼土粒含む
27	43×40	25×25	12	楕円			85	46×45	30×29	8	-		炭化物多量
28	66×43	36×20	19	-	-	炭化物・焼土粒含む	86	27×20	19×10	13	不整円		炭化物粒含む
29	40×36	14×8	72	円		P30より新しい	87	29×30	10×11	50	-		土師質土器炭化物粒含む
30	-×30	×26	5	-	-	柱眼	88	42×40	23×24	15	-		
31	49×45	21×19	32	-	-	土師質土器	89	33×28	11×12	37	-		
32	58×58	27×32	21	不整円		炭化物混入	90	32×33	22×21	23	不整円		
33	23×20	14×7	43	-	-		91	16×16	14×14	7	円		
34	38×27	22×19	19	楕円		陶器・炭化物混入	92	16×14	10×9	25	楕円		
35	42×35	33×29	34	-	-	小礫底部に多い	93	27×34	11×7	30	-		
36	35×30	19×19	67	-	-		94	23×30	13×14	28	円		
37	26×20	22×15	23	-	-		95	19×17	14×14	34	楕円		
38	24×23	19×20	28	円			96	20×16	15×13	39	-		
39	30×41	25×30	25	-	-	炭化物混入	97	28×33	8×8	46	円		土師質土器 炭化物含む
40	46×48	44×42	36	-	-	柱眼径22×20cm	98	72×60	55×38	11	-		
41	45×56	38×54	23	楕円		重複?	99	39×29	15×13	9	楕円		炭化物多量
42	20×17	18×14	23	円			100	43×34	21×15	17	不整円		炭化物粒含む
43	31×26	39×30	30	楕円			101	23×24	9×9	14	円		炭化物多量
44	23×21	35×22	39	不整楕円			102	24×25	15×10	60	-		炭化物粒含む
45	36×38	27×25	16	楕円			103	34×33	31×22	17	-		炭化物・焼土含む
46	28×27	13×14	16	円			104	38×34	13×10	9	楕円		炭化物多量
47	24×25	13×12	25	-	-		105	16×20	7×6	29	-		炭化物粒含む
48	15×47	16×14	32	不整円		本眼?	106	35×40	25×30	8	円		
49	29×30	11×20	51	楕円			107	31×-	18×6	54	楕円		
50	21×20	11×11	40	円			108	72×75	14×12	71	-		須器
51	24×29	4×5	34	楕円		土師質土器・炭化物混入	109	24×24	13×12	50	円		土師質土器
52	22×20	8×10	35	楕円			110	27×27	13×12	56	-		炭化物粒含む
53	14×16	10×11	13	楕円			111	46×27	14×11	50	楕円		
54	19×21	8×9	35	円			112	23×25	14×17	70	円		
55	24×25	9×10	50	-	-		113	22×12	7×6	27	楕円		
56	34×32	26×27	54	-	-		114	21×34	9×9	27	-		
57	21×22	15×13	12	-	-		115	30×28	22×18	13	円		炭化物粒含む
58	18×19	7×8	21	-	-		116	23×25	7×11	21	楕円		

(遺物はすべて破片)



第8回 遺構 (G-H) 配置図

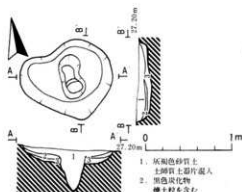
立建物柱穴とみられるピットが含まれる。しかし、同様に建物配置は特定できない。覆土は一様の暗褐色土で、炭化物を含み、覆土上層には北辺のピット群と類似して土師質土器片を伴うものが多い。

G j ~ H a に及ぶ南端のピット群はG i 12溝以東のやや平坦な区域に偏在する。P 75・80・81・84・87・89・107・108では径0.30m以上の円形をなし、建物柱穴とみられるが、柱痕は判然としない。また、確定できる建物配置も明らかでない。柱穴の掘り方以外に若干の皿状を呈する浅いピットがあり、P 98・104には多量の木灰、炭化物、焼土粒が底部を覆い、直接火熱をうけている形跡が認められる。覆土は前者と同様であり、土師質土器片を混入するものが多い。共に同一検出面にあり、新旧関係は明らかでない。

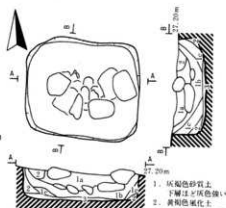
③ 土壌 (第9・10図 図版5-3)

G f 6土壌は東西1.07m、南北0.95mの不整形をなす浅い皿状の土壌である。中央部分はP 31によって破壊されている。覆土は暗褐色土に焼土粒の混入する炭化物が流入する状態で堆積し、上層では土師質土器の細片を含む灰褐色砂質土が被っている。皿状のP 37・43に類似する点も多い。

G f 6方形土壌は東西1.30m、南北0.60mの長方形をなす。検出面下の深さ0.30mで壁は直線的に立ち上がり、底部は平坦である。中央部には0.30m前後の安山岩質の礫が乱雑に入り、これに混じて陶器片、平瓦片、鉄釘各1点、土師質土器の細片が少数出土している。底部には多量の炭化物・焼土粒の広がりが認められる。土壌内での燃焼の可能性があるが、平瓦が黒色化しているほか、底部や壁面における変化は認められない。



第9図 Gf6土壌図



第10図 Gf6方形土壌図

④ 包含層 (図版6-1)

北半南西の僅かに凹地状をなす南斜面に形成され、F b 21~27にかかる約54㎡の小範囲に認められる。上部は既に後世の削平をうけて失なわれ、南西端では前年度調査区域 (南西地区)

に続いているとみられるが、調査上の不備によって判明していない。

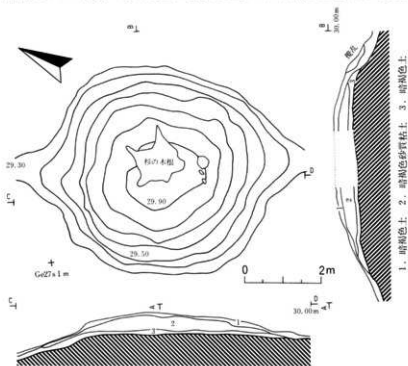
包含層は主としてⅡa、Ⅱb層である。斜面に沿って必ずしも明瞭な相違は認められないが現地形よりやや高位となる北東方向より流入堆積、あるいは削平等に伴う二次堆積によるものとみられる。遺物はすべて大小の土師質土器であり、後述する遺物の大半を占め、陶磁器、その他の遺物の混入は認められない。また、これらに関連する遺構はやや南東にビット群が若干検出されるものの明らかでない。

⑤ 塚 (第11~13図 図版7-1~3)

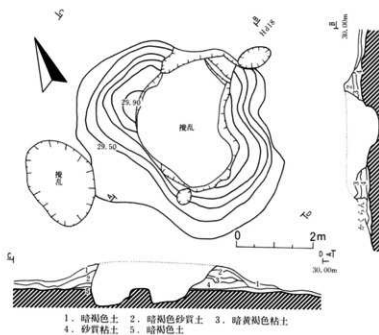
Gh27塚は東西5.80m、南北6.40mのはゞ円形をなし、比高は1.60mである。東裾部分は既に宅地造成時に失なわれ、部分的な土盛りも行なわれている。頂部はやや平坦で、これより裾部へ東西13~15°、南北20~23.5°の傾斜をなして下降する。中央部は杉の木根によって損壊をうけ、これに伴う遺構は認められない。

築成は旧表土上に直接暗灰褐色土を0.39~0.10mの厚さで盛土しており、築き固めた形跡は認められない。遺物は盛土中に若干の土師質土器の細片が混入している。

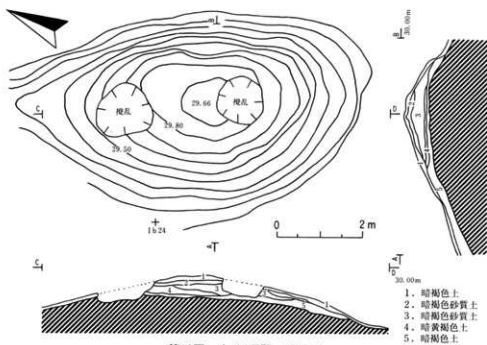
Hc24塚では周辺の削平、中央部の破壊をうけて旧状を留めていないが、東西3.70m、南北5.50mの不整形をなして残存する。築成土は暗灰褐色土、又は暗黄褐色土を0.30m前後盛土し、



第11図 Gh27塚平・断面図



第12図 Hc 24塚平・断面図



第13図 Ia 24塚平・断面図

G h 27塚と同様である。遺物は上層に土師質土器の小片が若干検出される。

I a 24 塚は東西3.80 m、南北7.20 mの馬の背状をなし、東裾では崖上に位置して崩壊が著しい。比高は東裾へ1.80 mを計り、18°前後の斜面を形成する。築成は前2基と同様旧表土上に0.30～0.40 mの暗灰褐色土の盛土によっており、土師質土器の細片が少量認められる。

塚3基はいずれも損壊をうけているが、一様の盛土によって築成される6～7 mの円形に近い塚と推定される。築成土は主として土師質土器皿片を含む第II b層であり、土師質土器廃棄後の一定時期にもっとも簡便な方法によって築成されたものとみられる。また、これに伴う遺構の痕跡は認められず、丘陵縁辺に限られる配置をなしている点で塚頂部を利用する築成とみなされる。

(2) 出土遺物

① 土師質土器 (第14・15図 第5・6表 図版8)

第I層より第II b層にかけては、全域に渡って出土するが、F a b 21～27にかかる包含層にその大部分が含まれる。遺構ではD b 9溝及び溝状遺構に30点、G f 6方形土壇の7点があり、その他の溝、柱穴の覆土から若干出土している。すべて皿形であり、小破片が多く復元可能な土器は1%に満たない。計測可能な資料は356点であり、口径の大小により大別され、更に底部の形状によって次のように分類される。

I-1類 (第15図1～4 図版8-1)

口径17.0～10.5cm、丸底様の底部を有する。底部より口縁部にかけて丸味をもち、緩やかに立ちあがる。体部より底部にかけては外面に明瞭な底部界が認められる。また、底部内外面に指圧痕を残すものが含まれ、底部内面は口縁部内外面と同様指ナデによって整形される。

I-2類

口径15.5～12.5cm、底部は糸切りによる平底である。外面に明瞭な底部界を有しないほかはI-1類と同様である。

II-1類 (第15図5～20 図版8-2)

口径9.5cm～6.6cm、丸底様の底部でI-1類を小形化するものである。

II-2類 (第15図21 図版8-2)

口径9.8～6.0cm、平底を有して立ちあがり強く、やや薄手である。口縁部に指ナデの痕跡を残すものはない。

II-3類 (第15図22・23 図版8-3)

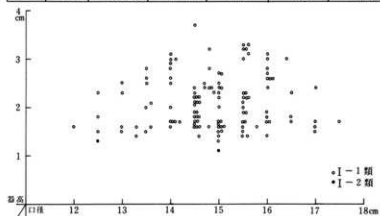
口径8.5cm前後で糸切りによる平底である。底部の器厚が厚く、体部より口縁部にかけて外傾する。底径は5.6～5.3cmである。

I-1、II-1・2類はいずれも手捏ねとみられ、内面及び口縁部を指ナデしている。胎土

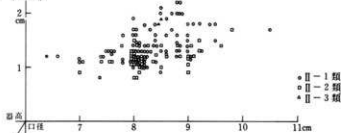
は雲母、石英、若干の砂粒を混入する細粒土で滑らかな面を有するものが多く、砂粒の多い粗雑なものが若干含まれる。色調は浅黄橙色、又はにぶい黄橙色を呈し、前者はやや焼成が良好である。I-2類はロクロ成形された粗い右回転の糸切底を有しているほかはI-1類に近似し、焼成も良好で浅橙色である。II-3類は底部に密な右回転糸切痕を残し、胎土に石英、雲

第5表 土師質土器分類表

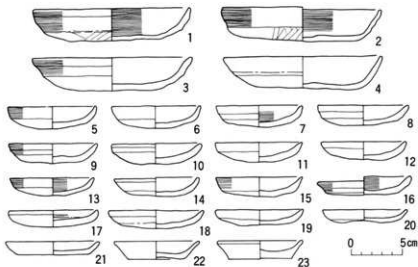
分類	地区	F(包含額)	Fa~Fb	Ga~Gd	Ge~Gh	Gj~Hb	平均・計	出土比率
I-1	口径	14.90cm	15.50	14.78	15.26	14.43	14.89	68.57
	器高	2.23cm		2.10	1.67	1.83	1.87	
	点数	257	10	43	32	18	360	
I-2	口径		12.50	15.50	15.00		14.33	0.76
	器高			1.40	1.10		1.25	
	点数		1	1	1	1	4	
II-1	口径	8.26cm	8.60	8.46	8.70	8.12	8.47	19.24
	器高	1.44cm		1.36	1.35	1.42	1.38	
	点数	79	1	14	2	5	101	
II-2	口径	8.13cm	7.8	8.34	8.26	8.43	8.22	10.48
	器高	1.15cm		1.26	1.05	1.33	1.21	
	点数	27	1	15	7	5	55	
II-3	口径	8.00cm					8.00	0.95
	器高	1.40cm					1.40	
	点数	2		1	2		5	
計		365	13	74	44	29	525	100
	出土比	69.52%	2.48	14.10	8.38	5.52		



第14図 土師質土器分類図 (I類)



第14図の2 土師質土器分類図 (II類)



第15図 土師質土器実測図

第6表 土師質土器計測表

分類	実測図図版	出土地点	層位	口径	底径	器高	成形	色調	備考
I-1	1	F b 27	II b	15.5 cm	8.3 cm	3.2 cm	手捏ね・丸底	浅黄橙	底部にケズリ
	2	"	"	15.5	10.3	3.3	"	"	"
	3	"	"	15.6	6.9	3.3	"	にふい橙	"
	4	"	"	15.6	9.7	3.1	"	浅黄橙	"
II-1	5	"	"	8.7	5.2	2.2	"	"	煤の付着?
	6	"	"	8.8	7.8	2.2	"	にふい黄橙	"
	7	"	"	8.9	6.5	2.0	"	"	"
	8	"	"	8.8	5.9	2.0	"	浅黄橙	"
	9	"	"	8.8	5.1	2.1	"	にふい黄橙	煤の付着?
	10	"	"	8.8	5.2	2.1	"	"	"
	11	"	"	8.5	7.8	2.0	"	"	"
	12	"	"	8.4	7.3	1.8	"	"	煤の付着?
	13	G a 24	II	8.3	7.9	1.8	"	"	"
	14	F b 27	II b	8.3	6.0	1.9	"	浅黄橙	煤の付着?
	15	"	"	8.6	7.4	1.9	"	"	"
16	"	"	9.2	7.2	1.6	"	"	底部にカメ板痕	
17	"	"	9.6	8.0	1.6	"	にふい黄橙	"	
18	"	"	9.4	7.6	1.9	"	浅黄橙	"	
19	"	"	8.6	7.0	1.6	"	にふい黄橙	"	
20	F b 21	"	8.3	7.1	1.3	"	浅黄橙	"	
II-2	21	G a 24	II	9.2	7.2	1.3	手捏ね・平底	にふい黄橙	"
II-3	22	F b 21	II b	8.4	5.6	1.8	ロクロ・平底	橙	"
	23	"	"	8.5	6.0	1.9	"	"	"

母を目立たず、内外共に橙色を呈する点で上記4類とは趣を異にしている。

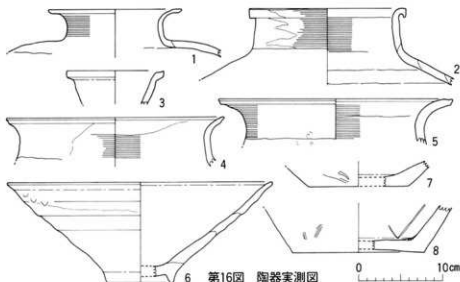
総じて厚手の手捏ねによっているが、上表によっては定形化されているとみられるものである。小形の皿は口径8～9cm、器高1.5cm前後を最多とし、大形では15cm、器高1.5cm前後

に集中する。底部は形状に相違があるが、Ⅱ-3類を除いて著しい変化は認められない。従来「燈明皿」と称されるものであるが、明らかに油痕の付着する例は確認できず、大形の皿を含めて、日常的な使用に供される可能性もあげられる。

② 陶器（第16・17図第7表図版9）

確認できる個体数は25点であり、壺、または甕形とみられる破片が多く、鉢は3点である。G a～c 12～6に最も多く、特にG c 9溝及び溝状遺構に集中し、同一個体の破片は2条に及んでいる。G c 9溝状遺構には火熱をうけた礫と共に散乱し、その一部は二次的な火熱による変質が認められる。また、これより以東のP 10・18の覆土に含まれ、南辺では第Ⅱ a層より三筋壺の口縁部片が出土している。

灰釉の壺は推定口径18～34cmを計り口縁部は朝顔状に外反する。口縁部より頸部にかけてはや

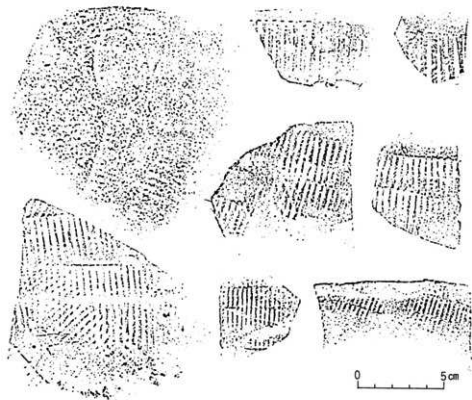


第16図 陶器実測図

第7表 陶器計測表

実測図	図版	出土地点	層位	器種	口径	底径	色調(外・内)	胎土	備考
1	1	G b 9	溝状	壺	16.0 cm		暗緑・暗赤灰	灰	
2	2	G c 9	"	"	18.8		"・明褐	灰白	
5	3-1	"	"	"	28.0		灰白・灰白	灰白	無釉
4	3-2	"	"	"	26.0		黄緑・褐	"	
	3-3	"	"	"	34.0		暗緑・暗緑	"	
3	3-4	G i 9	Ⅱ	壺	11.6		暗黄緑・赤褐	灰褐	三筋
	3-5	"	溝状	壺			暗緑・灰白	灰白	刻印あり
6	4	G c 9	"	鉢	31.6		暗黄緑・灰褐	灰	
	3-6	G i 5.3	Ⅱ	"	40.0		赤灰・明褐	"	
	3-7	G b 9	溝状	"		7.0	灰・	灰	無釉・歪みが大きい
7	3-9	G c 9	"	壺		12.0	黒灰・	"	砂底
8	3-8	G f 9	土壇	"		15.8	赤褐・暗緑	灰	砂底

や狭まり、緩やかな丸味をもって胴部に続く。底部は径14～15cm前後と推計され、粗い粒砂が付着する砂底で赤褐色を呈する。肩部より胴部にかけて横列の押印が残る。格子状の押印は溝幅0.2～0.4cm、0.1～0.4cmの間隔をもつ14条以上の刻文を有する長方形が多く、隅丸状の木型は1点のみ認められる。施軸は口縁部より、肩・胴部にかけて広がり、一部は底部内面に及ぶ。いずれも暗緑色、または黄緑色を呈し、無軸部分は暗赤褐色である。また、肩部には著しい降り砂が付着している。胎土は灰白色、あるいは灰色でその多くは粗粒が斑点状をなし、平行する縞状の断面が認められる。無軸の陶器においてもこれと同様である。

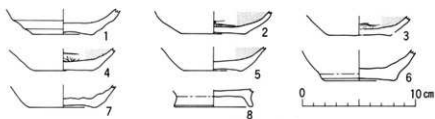


第17図 出土陶器刻・押印拓影 (Gc 9溝状遺構出土)

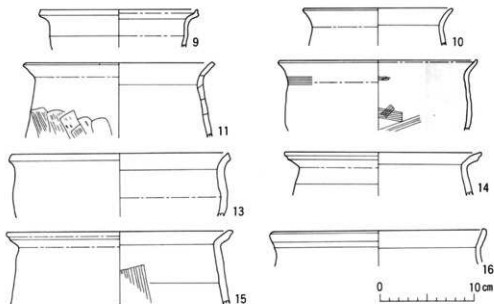
③ 土師器 (第18図 第8表 図版10)

Gf～Ha にかかる第Ⅰ・第Ⅱ層に集中し、計測可能な資料は甕7、杯8点である。このうちGf 12溝覆土に杯1点、Gg 15溝覆土に甕、杯2点が検出される。共にロクロ成形とみられるが磨減が著しく細部は明瞭ではない。

杯は、いずれもロクロ成形で内面を黒色処理し、篋みがきが施されている。底部は5.8cmで



第18図 土師器実測図(1)



第18図の2 土師器実測図(2)

第8表 土師器計測表

実測図	図	版	出土地点	柄位	器種	口径	底径	外面調整	内面調整	底部切離	色調	備考
1	2-7	G h 15	I	杯	cm	5.4 cm	ロクロ腹		回転糸切	浅黄橙		
2	1	G h 12	溝	II		5.8		ミガキ				内面黒色処理
3	2	G i 15	溝	II		5.4						
4	4	"	溝	II		5.2						
5	5	G i 15	溝	II		5.2						
6	6	G i 53	溝	II		6.0						
7	3	G j 53	I			6.2		ロクロ腹	回転糸切	浅黄橙		
8	8	G i 53	II	台付杯		7.0						内面黒色処理
9	1-6	G h 15	溝	壺	17.0		ロクロ腹	ロクロ腹				二次的加熱
10	5	G i 15	I		16.0							
11	2	G ii 5-29	II		20.4							
12	7	"	II		21.3		ナデケズリ	ミガキナデ				内面黒色処理
13	3	G i 15	溝	II	23.6		ロクロ腹	ロクロ腹				
14	8	G i 53	溝	II	24.1		ナ	ナ				
15	1	"	溝	II	22.0							
16	4	H a 12	I		23.0							

回転糸切痕を有する。東端低地の表土出土の台付坯は高台径7.0cmを計る。

甕は口径16~24cmを計り、頸部より口縁部にかけて緩やかに外反するものと、くの字状に屈曲して更に口唇部の直立するものが含まれる。底径は5.4~6.0cmで回転糸切痕を有す。外面は頸部の横ナデ、体部にナデ、篋削りの調整が認められるもの、内面には篋ナデ、篋ミガキを施し黒色処理するものが含まれる。胎土は砂粒の混入するものが多く、色調は浅黄橙色を呈する。

④ 瓦

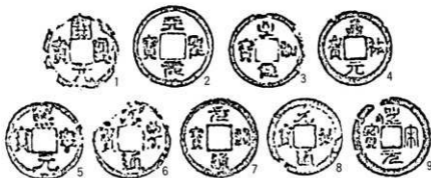
Gf6方形土壇第1層出土の平瓦1点である。上面に縄目印文、下面に布目を有する断片である。灰白色の胎土は二次的火熱により黒色化しているが、観自在王院出土瓦に類似する。

⑤ 鉄釘 (図版10)

Gf6方形土壇の拳大の礫と共に第1層に出土するほか、周辺の第II層に断片6点がある。前者は頸部のやや屈曲する折形をなし、現在長5.4cmを計り、断面は方形をなす。

⑥ 古銭 (第19図 第9表 図版10)

銭貨9枚中5点は農道北接部分のピット群検出段階に出土し、他はGi12溝北偏の黒褐色土中に検出する。聖宋元宝を除いて各4枚重ねで出土し、共に外縁の腐蝕が進行している。天聖元宝以外は、二次的火熱をうけているとみられる。



第19図 出土古銭拓片

第9表 古銭計測表

拓影図	出土地点	額位	銭 銘	初 鑄	外縁外径	外縁内径	内郭外径	内郭内径	外縁厚	重 量	備 考
1	Gc 3	II	開元通宝	621年	23.40mm	8.05mm	20.05mm	6.90mm	1.20mm	1.680mg	外縁欠損
2	"	"	天聖元宝	1023	25.05	8.25	21.05	7.80	1.23	3.500	"
3	"	"	至和元宝	1054	23.00	7.28	19.15	6.30	1.15	2.520	外縁欠損
4	Gi 12	"	嘉祐元宝	1056	23.05	7.35	18.60	6.10	1.20	3.280	"
5	"	"	熙寧元宝	1068	24.00	7.80	20.25	7.05	1.10	2.480	"
6	"	"	元豊通宝	1073	23.90	8.35	21.30	7.15	1.25	2.490	加工・欠損
7	Gc 3	"	元祐通宝	1093	23.60	7.20	18.30	6.40	1.10	2.030	"
8	Gi 12	"	元祐通宝	1093	24.50	8.45	20.45	7.15	1.18	3.010	外縁欠損
9	Gc 3	"	聖宋元宝	1101	25.05	6.90	19.50	5.80	1.00	1.920	"

⑦ その他の遺物 (第20図)

須臾器7点があり、Gcd9~6、Gi12~9にかけて出土する。内外面に叩き目を有し、黒色を呈す。Ha9盛土層には真岩製の石匙1点があり、長さ5.2cm、幅3.8cmを計る。

(3) まとめ

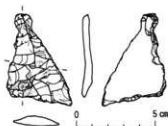
丘陵一帯は既に水田・畑地・宅地として利用されているため、削平や攪乱をうけて破壊され、伝えられている神社、或は寺院址として把握できる遺構は検出されていない。

南北に突き出す丘陵先端部にあたる調査区域の旧状は、全体的に現状に比してやや高位にあり、中央部は鞍部をなしているものと見られる。農道以北の比高差は1m前後で地山切土面が段状に認められるが、ほぼ南東の緩斜面をなして南へ連なり、やや低位となる中央部の農道付近では同一平坦面をなす。これに南接しては僅かに高位となるが、共に切土によって形成される削平地とみられる。平坦面の東端は明瞭な盛土層を確認できないもののいずれも南北も約18mに及んでいる。溝遺構の大部分とピット群はこの切土面に集中し、数回の地業を経て宅地造成時に更に広汎な切・盛土が行なわれているものとみられる。中央部以南にかかる盛土層下の黒褐色土層は宅地造成以前の旧表土面と把握される。

溝遺構のうち南北方向より東へ湾曲する2例では柱穴状ピット群の偏在する西端溝となり、建物施設に伴う遺構の可能性があげられる。Gf9溝以南についても一定の方向性が認められ、長軸方向はN10.0~10.5°W、N17.5~24.0°Wに大別される。それぞれ近接、或は重複する配置は相前後して開削される溝と扱えられるが、覆土中の遺物による相違は明確ではない。また、建物施設については特定できる配置は見出し得ず、柱穴の分布や溝遺構によってみるならば比較的小規模な建物の存在が推定される。

遺物の大部分は、毛越寺、観自在王院、無量光院跡、中尊寺、白山神社、鈴沢遺跡等の周辺遺跡にみられ、殊にも土師質土器、陶器はこれに酷似するものである。土師質土器では最も近接する毛越寺出土土師器のうち糸切り痕を残す高台付の第3類、有段丸底の第6類とする「土師器」を除いて同類と見做すことができる。陶器は県内に広く流入分布する常滑及び履美産^(注6)であり、平安時代末期より鎌倉時代初期にかかるものとみられる。流入陶器は量的に平泉に最も多く出土しており、毛越寺、伝国術館の真南に位置している点では、同時期に関連する施設^(注7)の存在した可能性が強いといえる。

現状で確認された塚3基は宅地造成時における削平をうけず、土塁状に残存する丘陵南西縁に構築されたものである。共に築成は最も簡便な方法によっており、ほぼ同一期に同一の目的によって形成されたものと解される。その時期等については明確ではないが、伝えられる五輪



第20図 石器実測図

塔の存置に関連する築成であろうか。五輪塔は住宅移転に伴って搬出され、3基中1基は地輪注8を残すのみであるが、2基は偽作の梵字によって江戸時代後半の所産とみられる。

尚、北東地区のグリットは南西地区南北中軸線より東20mをもって中軸線とし、これに基づいて記述するものである。注9

注1 「平泉」毛越寺と観自在王院の研究 藤島玄治郎編 東京大学出版会(1961)

「観自在王院跡発掘調査報告書」平泉町教育委員会(1977)

「観自在王院跡整備報告書」平泉町(1979)

注2 「無量光院跡」埋蔵文化財発掘調査報告書第3 文化財保護委員会(1961)

注3 「発掘調査略報告」平泉遺跡調査会(1963他)

注4 岩手県教育委員会による発掘調査(1974) 未報告

注5 岩手県教育委員会による発掘調査(1974～75) 未報告

注6 盛岡以南の北上川流域の遺跡に出土する例が多い

注7 前掲「平泉」、名古屋大学教授 橋崎彰一氏の鑑定による

注8 一関市山目 宮川啓吾氏所有

注9 岩手県文化財審議委員 司東貞雄氏の鑑定による

片 岡 遺 跡

1 位置と立地

本遺跡は西磐井郡平泉町字片岡にあり、平泉駅の南南西約2.2kmに位置する。平泉町の西方には、奥羽脊梁山脈東縁に連なる衣川丘陵が東西に走り、丘陵の北縁には東流する衣川、南縁には東流する磐井川がある。東縁は北上川西岸の河岸低地に連なる。丘陵東縁が河岸低地に続く傾斜地の中腹の畑地に当遺跡は立地し、標高42～50mである。遺跡の北隣には丘陵中央を開折して東流する太田川下流域の扇状地が広がる。

2 調査の経過と内容 (第1図・第2図)

片岡遺跡は、昭和47年の遺跡分布調査の際に見えられた遺跡で、字名により片岡遺跡と名づけられた。東緩傾斜の畑地内より器面が磨滅した縄文土器の小破片が数点表採されたものである。この畑地が東北自動車道の路線敷地にかかり、発掘調査を実施することになった。

路線中心杭STA96+80と96+60を結ぶ線を基準とし、それに直交する線を設けて3mグリットを組んだ。中心杭96+60の地点をCa50とし、東西南北に夫々延長してグリット名を付した。遺構の検出、分布状態等検討のため第2図の如く30グリットについて表土除去、更に地山迄掘り下げた。層序は第I層暗褐色土(表土)第II層暗褐色土、第III層黒色土、第IV層凝灰岩の風化土(地山)である。第I図の層の堆積状況等から、西方急傾斜地からの流入による堆積層と思われる。

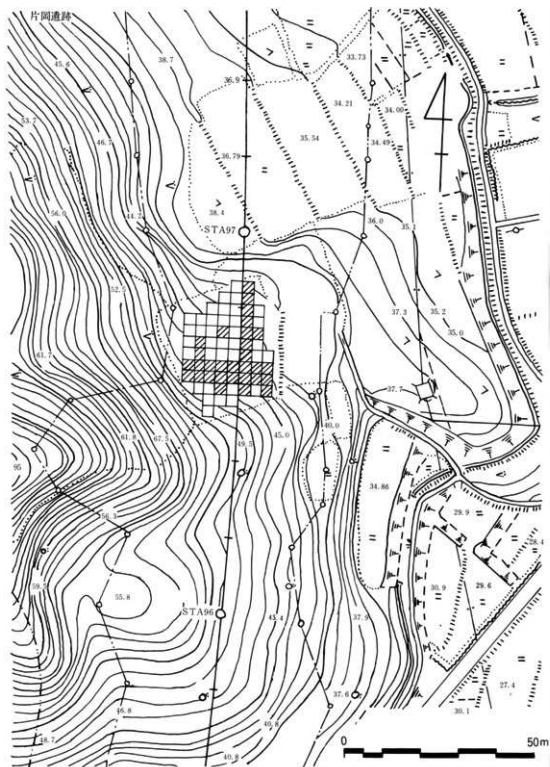
出土遺物は第I層より縄文土器の胴部細片2点、石器剥片2点、第III a層より石器剥片1点である。遺構は全く検出されなかった。

3 まとめ

地形、層序等から考えて遺構の存在する可能性がなかったため、全面発掘は行なわなかった。出土遺物は縄文土器片2点、石器剥片3点である。遺構は検出されない。出土遺物は路線敷外の西方丘陵よりの流れ込みのものと思われる。



第1図 東西層位図



第5図 地形図と調査区域

白 幡 神 社 遺 跡

I 位置と立地

本遺跡は、平泉町の南端、字片岡 167 に所在する。国鉄東北本線平泉駅の南方約 2.5 km に位置し衣川丘陵の東傾斜地中腹（標高 47.5 ～ 53cm）に立地している。南面の侵蝕谷には、一関市笹谷に通ずる道路が東西に走っており、当遺跡北裾部には片岡遺跡が接している。

II 検出遺構と出土遺物

現地形の踏査により、現存祠の周辺に存する塚状マウンド 8 基と、一段下がった東側中腹部の平場を対象として、発掘調査を実施した。

調査の結果は、

- (1) 塚状のマウンドは、いずれも地山の凝灰岩からなる自然地形によるものであることが判明した。そのうちの 3 基から、古銭（寛永通宝）・素焼き土人形片・陶器小皿等が出土した。特に、仮 8 号マウンドと呼称したマウンド頂上部には、約 2 m 四方に平場が造成され中心部に、ほぼ方形（1 × 1.5 m）に敷きしめた配石遺構が検出された。遺物も、ここを中心に出土し、その内容は、素焼き土製品の稲荷（完形 1、頭部破片 4）・古銭（寛永通宝 8）・鉄製品（角釘 8 ・矛 2）である。（第 2・3 図、図版 2）
- (2) 現存する祠への参道は、丘陵東端部麓より、東側平場の南側を通り、西に向かって登るものであるが、この参道に祠前で南接する仮 7 号マウンド南側裾部から、素焼きの土製品である大黒天・恵比須の神像に、女人舞姿像・母子像等が集中して検出された。（第 2・3 図、図版 2）
- (3) 東側平場は、東傾斜面に現地形を削り出し地業によって約 5 × 5 m の平場を造成しており、礎石状の石 6 個が露出していた。しかし、これらには根石や掘え方等が検出されず、大方動かされており、その平面形や、相関を把握できなかった。この平場からは、素焼き土人形の外古銭（寛永通宝②、文久永宝①、仙台通宝①、明治 32 年の 5 銭①）、鉄製品としては角釘②、茅根根ふき鎌①があり、かんざし①、きせる雁首①等も検出された。（第 2・3 図、図版 2）

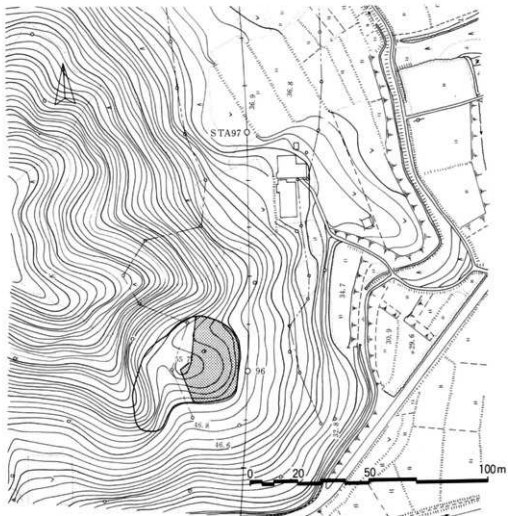
III まとめ

以上の調査結果より、

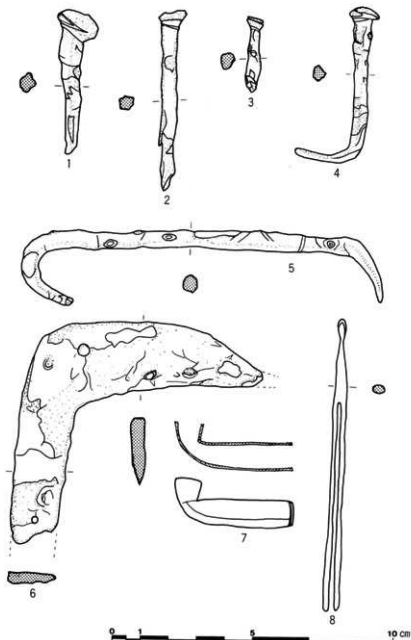
- (1) 仮 8 号マウンド頂上部には、配石遺構・伴出遺物よりみて「祠」が築営されていた。
- (2) 仮 7 号マウンドは、出土遺物よりみて、祭祀信仰の対象として、または、祭祀信仰の施設があった。

(3) 東側平地には、礎石状の石・伴出遺物からみて、明らかに「神社」ないし「祠」が築営されていた。

以上のことから推定される。すなわち、供膳用の陶器小皿、神前奉納用の素焼き土人形（いずれも製作工程は、粘土を合わせ型で抜き出して乾燥し、素焼きにしたものである。）鉄製矛・建築用の角釘・かすかい・それに、古銭（寛永通宝・文久永宝・仙台通宝・明治32年の5銭）等の伴出遺物等からみて、近世より現在にかけての、現存の白幡神社につながる神社建築ないし、祠が、建立・祭られてきたことが判明した。

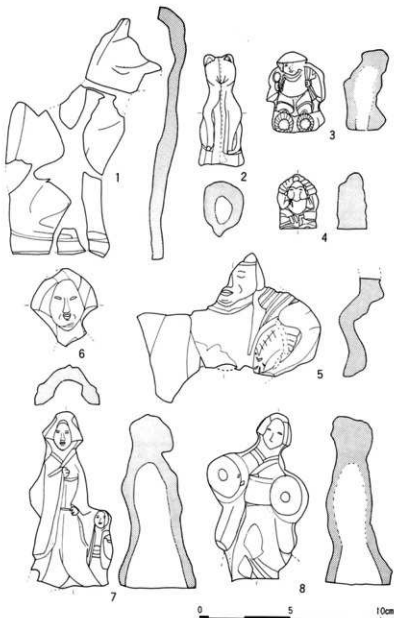


第1図 調査地の地形と範囲図



- | | |
|------------------|-------------------|
| 1. 鉄製釘 (仮8号マウンド) | 5. 鉄製かすがい (東側平場) |
| 2. 同上 (仮8号マウンド) | 6. 萱屋敷ふき用鎌 (東側平場) |
| 3. 同上 (仮8号マウンド) | 7. きせる雁首 (東側平場) |
| 4. 同上 (東側平場) | 8. かんざし (東側平場) |

第2図



- | | |
|------------------------|------------------------|
| 1. 素焼き土製品・稲荷 (仮8号マウンド) | 5. 素焼き人形・恵比須 (仮7号マウンド) |
| 2. 同 上 (仮8号マウンド) | 6. 素焼き人形女人頭部 (仮7号マウンド) |
| 3. 素焼き人形・大黒天 (仮7号マウンド) | 7. 同 上母子像 (仮7号マウンド) |
| 4. 素焼き人形・恵比須 (仮7号マウンド) | 8. 同 上女人舞姿像 (仮7号マウンド) |

第3図 出土遺物 (素焼き人形)

宮田・月町遺跡

Ⅰ 位置と立地

宮田遺跡は一関市宮田18-1、月町遺跡は同市萩荘字月町65-1に所在している。

両遺跡は、道路ひとつをへだてて南北に隣接しており、国鉄東北本線一関駅から西北約3.5kmに位置し、入り組んだ磐井丘陵の肢節のひとつ、磐井川ぞいに形成された中位砂礫段丘の南斜面に立地している。

Ⅱ 調査に至るまでの経過と結果

両遺跡は、県教育委員会が49年3月に刊行した「埋蔵文化財分布地図」の中に、近世の窯跡として収録しているもので、現地踏査の際に、更に、館跡が近隣していること、東北自動車道路線敷地内に、マウンドが2基観察されたため、これらを合わせて調査を実施した。

調査の結果は、両遺跡について

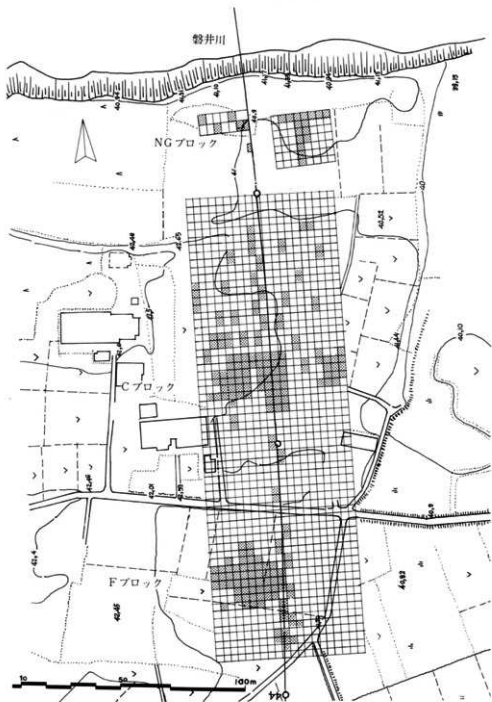
- (1) 窯跡ないし、これに関連する遺構・遺物は検出されなかった。
- (2) 館跡は、本遺跡の西側であり、その範囲も路線外であることが確認された。
- (3) マウンドは、ごく最近の盛土と判明した。

以上のことを確認して調査を終了した。



第1図 宮田・月町遺跡地形及び調査対象区図

下も下釜遺跡



第1図 グリッド配置図

I 調査地の位置と立地（地区概観第1・2図、図版1・2の1）

調査地は一関市萩荘下も下釜^{いばしやう しつせ}に所在する。小野寺信吾氏による鶴丸段丘相当面上にのり、段丘岸近くの平坦部の、現状での微高地に位置する。磐井川現河床との比高は約13m、標高は41m前後である。調査地やや西方の谷起島において大久保川と磐井川が合する。調査地西・南方には丘陵が発達し、緩斜面をなすその周縁部や、周縁部に形成された小規模な扇状地形上には、中・近世の墳墓・城館、古代の「集落」、その他の時代の各種遺構群が存在する。以上に平坦部・河岸をも含めた本地域におけるもっとも著名な「遺跡」は谷起島^{やどしま}・下黒沢館^{しもくろさわ}、鈴ヶ沢^{すずみ}などである。

II 調査地の層序と土質

調査地は宅地・畑地・苗圃・杉林等として利用されてきており、人工の手がかなり加えられている可能性が大きい。層序と土質を模式的に示すと以下ようになる。

- I a 層 表土・耕作土、クロボク様のシルト質土) 各種の遺物が混在する。
- I b 層 表土、黒褐色シルト質土
- I c 層 黒褐色シルト質土と黄褐色シルト質土粒子の混土。遺構検出面である。
- II a 層 地山、黄褐色シルト質土、かなり粘性がある。
- II b 層 地山、礫層、人頭大のものを混ざる。II a と不整合。

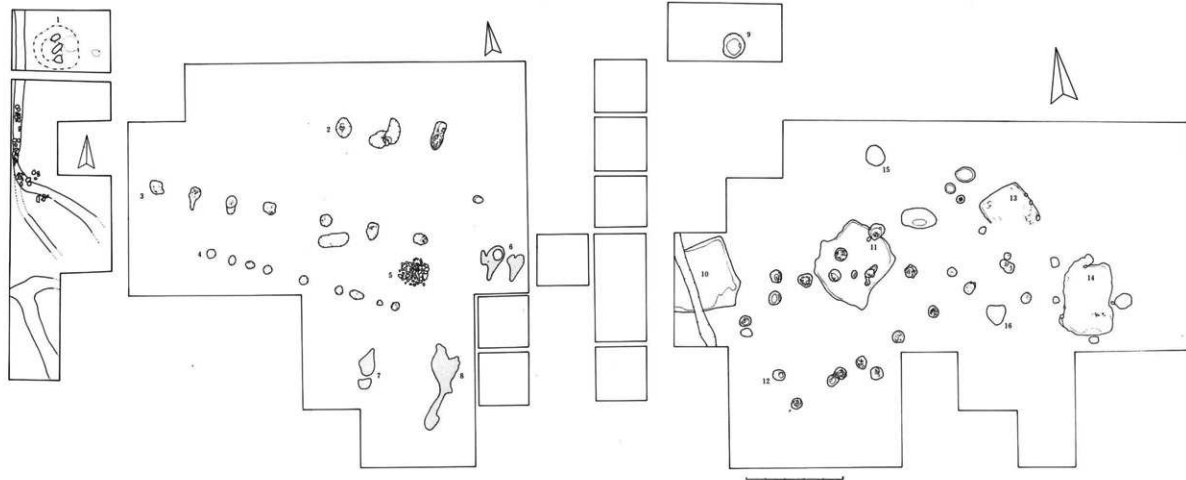
III 検出した遺構と遺物（第2・3・4図）

調査の結果、縄文時代の遺物若干量、古代の竅穴住居跡2・焼土集積部1、時代不明の掘立柱建物1・竅穴住居様遺構2・焼土集積部若干・礫集積部1・ビット列3と若干の遺物、近世の墳墓1などを検出した。以下時代順に説明する。

縄文時代の遺物（第5図・図版7の2～10）

遺構は検出できず、調査地ほぼ全域にわたり、I a・I b 層中に若干の遺物の出土をみたのみである。土器と石器からなる。

(1) 土 器 二種ある。①早期末と思われるもの（第5図1～6・図版7の2）。胎土に多量の纖維を含み、器表面に斜縄文・羽状縄文・条痕文等を付すものが多い。裏面には調整痕以外の顕著の施文は見られない。若干厚手で焼成不良・脆弱なものが多い。以上の特徴から、東北地方早期後半の「縄文条痕土器」群中に含まれるものと思われる、とりわけ羽状縄文の存在や、底部表面にも縄文を付すものが存在することからすると、早稲田V類（梨木畑式）相当か、それより若干降るものと思われる。



NGブロック

1. NG62焼土集積部

Fブロック

2. Fd18ピット列
 3. Fe30ピット列
 4. Fi27ピット列
 5. Fi18燻集積部
 6. Fi12焼土集積部
 7. Fi18焼土集積部
 8. Fi15焼土・粘土集積部

Cブロック

9. Bj18墓塚
 10. Cd12竪穴住居跡
 11. Cd09竪穴住居跡
 12. Ce18竪立柱建物跡
 13. Ce06竪穴住居跡遺構
 14. Cd03竪穴住居跡遺構
 15. Cb12焼土集積部
 16. Ce09焼土集積部

第2・3・4図 遺構配置図

②晩期と思われるもの(第5図7・図版7の3)。いわゆる精製壺形土器の口頸部破片である。口縁端部直下に浮線による π 字形工字文を有すること、表裏面ともに入念に研磨していることなどから、大洞式に近いものと思われる。

(2)石 器 三種ある。①石鏃(第5図の9・10、図版7の4～6)。いわゆる無茎式のものである。⑨はやや細身で直線的な基部をもつ。⑩は若干太目で、基部は内彎する。両者ともに押圧剥離による両面加工が施こされる。剥離は左半部から右半部へと進行し、基部が最終段階で加工される。形態・技法の特徴などから、前述の土器①に対応する時期のものとしておく。

②両刃石器ないしショッピングツール様のもの(第5図8、図版7の7)。扁平な鎌の周縁の二カ所を両面からの加撃で剥離し刃部様のものを形成する。刃部様の部分が二カ所あることから石鏃である可能性もあるが、一応ここでは刃器としておく。もっとも機能的・実的な石器であり、所属年代の特定は今のところできない。

③磨 石(図版7の8～10)。三例を得たが、いずれも球状をなす。一部に凹みをもつものがあるので、いわゆる「凹み石」に含めるべきものもあろうが、ここに一括しておく。

要 約

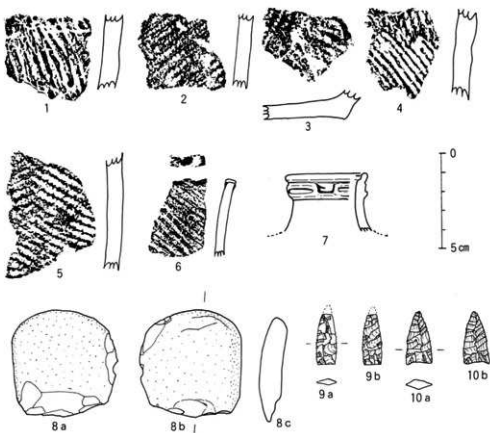
遺物のみが検出された本調査地の性格には「キャンプサイト」的な短期間の労働の場などをまず想定しうるのであろう。しかし谷起島に代表されるいくつかの「遺跡」が周囲に存在すること、磨石から想定しうる労働の性格などを考慮すると、本調査地に近接してより永続的な居住域いわゆる集落が存在する可能性をもまた想定しうる。二つの時期について以上の二つの想定をしておく。

なお確実に早期に属する「遺跡」あるいは出土状況の明らかな早期の遺物は一関市内には未だ数少ない現状からすると、本調査地は立地論的観点から記憶されてよい。丘陵上に位置する鈴ヶ沢の表土からも同種の遺物が得られている。

古代の遺構と遺物

竪穴住居跡2、焼土集積部1と、それぞれに伴う土器類若干を得た。

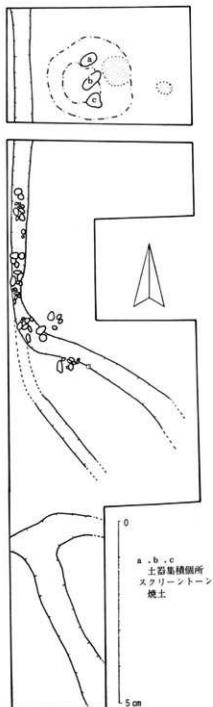
(1)NG 62焼土集積部(第6・7図、図版2の2)。調査地北端で、段丘崖を眼前にひかえた地点に検出した。Ic層上に土器片・焼土・白橙色粘土質土等が集中し、それは径2.5mの範囲内に限定されていた。したがって調査によっては明らかにすることはできなかったが、竪穴住居跡もしくはそれに類した遺構(例えば白橙色粘土の存在についてよくとられる解釈を援用



第5図 縄文式土器拓影圖・石器実測圖

実測図番号	出土地点	出土層位	部位	外面		内面		焼成	胎土			
				色調	調整技法	色調	調整技法		色調	織物	土性	
1	Be71	上	体	暗茶褐色	左側り無紋? 煤	暗灰褐色	ナダ?	不良	灰色	有	石英粗粒で粗	早期(?) 類との連続型式か?
2	Cbc50	+	+	淡茶褐色	LR< 煤	灰乳色	ナダかミダキ	+	暗灰色	+	石英雲母にて粗	
3	+	+	指げ匠風平底	淡茶褐色	LR< ?	淡褐色	多孔質	+	+	+	石英粗粒で粗	
4	Ea03	+	体	茶褐色	RL< 異層体	暗灰褐色	ナダかクラック	+	梅暗褐色	+	+	
5	Cc50	+	+	灰褐色 異層体	LR< の異方向回転	淡黄色	ナダかミダキ	+	梅暗褐色	+	+	
6	Cbc50	+	外口縁	暗灰褐色	右下がり条痕文?	淡茶褐色	+	良好	暗灰褐色	+	石英粗粒で粗	
7	Bb06	+	口縁	明赤褐色	ミダキと瓦彩文	明赤褐色	ミダキ	+	明赤褐色	無	雲母粗片のみで精良 大浜A式相当	

実測図番号	出土地点	出土層位	種別	概況	最大長 (cm)			重量 (g)	材質	その他
					たて	よこ	あつき			
8	Cd71	エ	両刀?	完	5.7	5.4	1.1	58.3	硬砂岩	
9	Bb06	+	石鏃	破	2.6	1.0	0.3	1.2	真岩	
10	Cd53	+	+	完	2.8	1.3	0.6	1.3	+	



第6図 NG62焼土集積部他実測図

すると、何らかの工房的なものなどであった可能性がある。また周囲に同時期と思われる溝状の遺構も若干検出したが、その性格・両者の関係等は明らかにできなかった。

遺物：土師器壺形の破片を2個体分得た。いずれも焼土上・中から得た。個体により口縁部形状に異同がある。

(a)口縁部が一度外方に大きく張り出し、その後直上する屈曲の激しいもの(第7図1・図版8の1)。口縁部・体部上半は表裏面ともにロクロナデ調整が、体部上半表面にはヘラ削り調整が加えられる。

(b)口縁が緩く外反するもの(第7図2)。口縁部表裏両面にヨコナデ調整が、体部表面に全面ヘラ削り調整が加えられ、体部下端は面取りが施されたようになっている。底部表面に木炭痕が残る。ロクロ成形ではないと思われる。

(a)・(b)とも焼成・胎土が精良で硬質である。

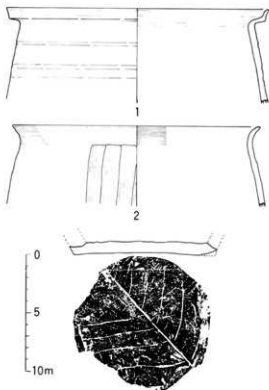
(2)Cd21堅穴住居跡(第8図・図版2の3)。後世の覆乱のため不明な点が多い。

(検出地点・面) 調査地中央の西端部の1b層直下に検出した。

(規模) 前述の理由で不明であるが、少なくとも短辺が3.3m・深さ0.2m前後で、NE-SW方向に長くのびるものではあったろう。

(床面) はほぼ平坦であったと思われるが、不明な部分が多い。

(カマドその他) カマド及びその附属施設・周溝・貯蔵穴等のものは、少なくとも調査範囲内には検出できなかった。ただし東南隅に遺物が比較的集中し、また若干量の焼土も見られたことからす



第7図 N G62出土土器実測図

系図番号	1	2		
地 点	北部	北部		
層 位	I	I		
種 別	カメ	カメ		
部 位	口縁	口縁	体	皿
外 色	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色
	調整			
面	クロロナデ	口縁ナデ?	体部ヘラ 削り	木葉削
	調整 技法			
内 色	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色
	調整			
面	クロロナデ	口縁ナデ	体部ヘラ ナデ	ナデナデ?
	調整 技法			
焼 成	良好	良好	良好	良好
粗 色	茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色	淡茶褐色
	調整			
土 質	石膏粒子 ありて粗	石膏細粒 あるも精 良	=	=
	質			
その他		口部無段	クロロ不 使用?	

ると、東南コーナー、東壁南端、南壁東端のいずれかにカマド類が存在した可能性もある。

(年代決定の資料) 上述の土器器類である。

(遺物)(第9図・図版8の2～6)。明らかに須恵器とみなしうるものは一点も存在せず、すべて土器器類からなる。杯形と壺形の二器種である。a)杯形 内湾ぎみに推移した体部が、端部近くで若干反するもののみであり、また回転糸切・無調整のもののみである。内面調整はヘラミガキのみのもの(第9図2・3)と、それに黒色処理を加えるもの(同1)の二種がある。なお覆土中からであるが、表裏両面にクロロナデ調整を施こされた『くすべ色を呈しない』口縁破片1(同9)を得たが、これは本課で『B類土器』と仮称しているものの一部に該当しよう。

(b)壺形 大形のもの 二個体分の破片を得た。同図6は体部表面下半から底面にかけて雄大なヘラ削り調整が、裏面には縦位の刷毛目調整風のヘラナデ調整が加えられる。5は少なくとも体部下端近くに叩き調整が加えられ、裏面にはナデかミガキが加えられている。



第8図 C d 21 竪穴住居跡

お床面の大半(東南半)はIc層中に宮なまれているが、西北壁直下の床面はIIa層面や礫層面となっている。これは低位段丘の基盤礫層の表面が凹凸に富む現象の現われとみなし、人為的な措置とは考えないでおく。

〔年代決定の資料〕 前述の貯蔵穴様の掘り込み出土の土師器類である

〔遺物〕 須恵器および仮称B類土器是一片もなく、すべて土師器である。(第11図・図版9) 杯形と甕形の二種である。(a)杯形 復元可能土器ないし完全土器7とかなり多い。3個体が重なった状態で出土したものもあり、一括とみなす。内湾ぎみの体部が端部で軽く外反する形態をなす。回転糸切・無調整で、内面にヘラミガキ・黒色処理を施す。黒色処理は一部表面にまで及ぶ。ヘラミガキは体部で横位、底部で放射状の方向である。表面はクロコナデ調整のみである。なお底部表面に「×」印を付したものが3個がある。全般的に細かいクラックの入ったものが多い。

(b)甕形 大・小の二種がある。小形甕(第11図8)は口縁を欠くが器高は9cm前後と思われる表裏両面にクロコナデ調整が行なわれる。大形のものにはクロコ成形ではないと思われる、(9)は比較的明瞭に外反する口縁をもち、表裏ともにヨココナデ調整が行なわれる。体部表面には雄大なヘラ削り、裏面には横位の刷毛目調整が行なわれる。(10)の口縁はかすかに外反し、体部裏面にヘラコナデ調整が行なわれる。

以上の(a)・(b)がその土器組成を正確に反映しているとは考えられない。とりわけ他の類例に比し須恵器の欠如は不自然である。

(3) Cd 09 竪穴住居跡(第10図・図版3の1・2)。Ce 18 掘立柱建物と重複しているが、残存状況は比較的良好である。
〔検出地点・面〕 調査地ほぼ中央で、Ib層下に検出した。
〔規模〕 長辺4m×短辺3m、深さ0.2m前後で、NE-SWの方向にのびる。

〔床面〕 重複しているため凹凸に富む。西南壁の東半にIIa層土を用いての貼床が施こされている。

〔カマド他の施設〕 明らかなカマドは検出できなかったが、東南壁の南半部に焼土類・IIa層土が比較的多く存在したことからして、カマド類が東南壁の一部に設けられていた可能性が大きい。東南隅に貯蔵穴様の掘り込み(長径0.8m×短径0.5m)があり、そこに遺物類が多く見られた。周溝は検出できない。他には柱穴とは考えられないピット3、床面上に礫数個などが存在した。な



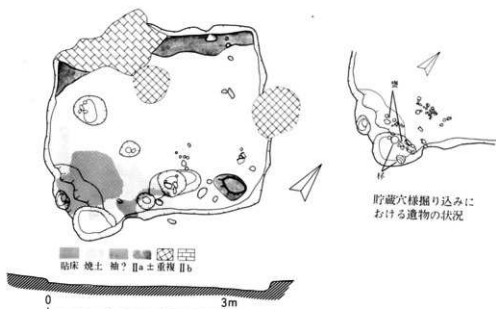
第9図 C d21竪穴住居跡出土土器拓影図

実測図 番号	出土 層位	種別	部位	外 面		内 面		焼成	胎 土		そ の 他
				色 調	調整・施文	色 調	調整・施文		色 調	土 性	
1	床面	杯	口縁	淡茶褐色	ロクロナデ	黒色地埋	ヘラミダキ	良好	茶褐色	石灰凝粒のみで精良	
2	"	"	"	明赤褐色	"	明赤褐色	"	"	明赤褐色	"	黒色地埋無し
3	"	"	底	明赤褐色	ロクロナデ・回 転糸切・無調整	明赤褐色	"	"	明赤褐色	"	"
4	"	甕	"	灰 乳 色	不明。回転糸切 無調整	淡茶褐色	ロクロナデ	不良	灰 乳 色	石英・小石多く粗	
5 a	"	"	"	灰 乳 色	体下端平き目	淡茶褐色	ナデカミダキ	"	"	"	印き目あるも、 土師器的
b	"	"	"	"	底面ヘラ削り?	"	"	"	"	"	"
6	"	"	"	茶 褐 色	ヘラ削り	淡茶褐色	縦位刷毛目風 ヘラナデ?	"	外-茶褐色 内-灰褐色	"	
7	埋土	杯	"	灰 褐 色	ロクロナデ・回 転糸切・無調整	黒色地埋	ヘラミダキ?	"	灰 褐 色	小石あるも精良	
8	"	"	"	"	ロクロナデ 底面にX印	"	ヘラミダキ	良好	灰 色	"	以上はすべて、土 師器と思われる
9	"	"	口縁	淡茶褐色	ロクロナデ 凹凸顕著	灰 乳 色	ロクロナデ 凹凸あり	"	淡茶褐色	細砂のみで精良	より道意匠的な 感あり

要 約

(1) 遺構・遺物の性格・年代等について

上述の三遺構はその共伴遺物からして大略同期のものとみなしうる。即ち本調査地は古代の集落の一部であった可能性が大きい。次におもに杯形の土器器類を資料としてその年代を考



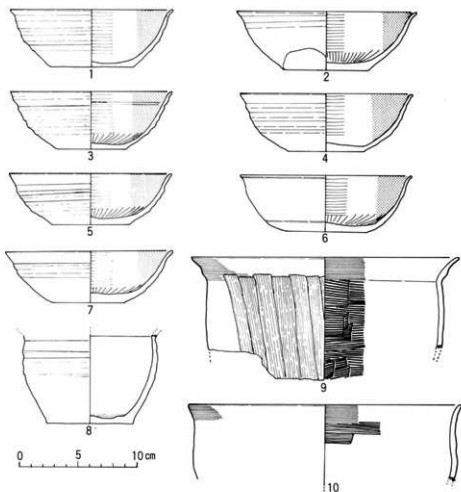
第10図 C d09雙穴住居跡

える。

本県古代ことにも9世紀～11世紀までの土器群の変遷については諸先学の見通しが最近公にされつつある。まず10世紀初頭までについては佐久間豊氏の業績がある。猫谷地遺跡出土資料ねこやち（註2）による氏は、その第2様式の土器群に802年以降の9世紀代、第3様式に10世紀初頭を想定している。その変遷過程は、須恵器が普遍化し土師器の器種が減少する第2様式から、それぞれの器種の齊一化が進み粗雑な調整のものが多くなり、土師器に場も出現する第3様式へ、というものになる。杯形の技法のそれについてのべると、土師器については回転糸切・調整のあるもの、から、それに加えて無調整のものも加わっていく過程と、須恵器についてはヘラ削り調整（回転・手持の両者、またヘラ切りを含む）あるものと回転糸切・無調整のものが混在するものから、回転糸切・無調整のもの、への過程ということになる。なお、両者ともに若干量の『赤焼け土器』を伴うし、第2様式には外面に叩き技法をもつ長胴甕が伴う。

10世紀代以降については高橋信雄氏・沼山源喜治氏などによりその見通しがのべられている。北上市相去遺跡あいさりなどの類例が著名である。その大筋は、杯形の組み合わせに代表させると、土師器（内面黒色処理）・須恵器・佐久間氏の『赤焼け土器』（本課の仮称B類土器の一部）の組み合わせが、それぞれに変化を示しながら推移していく過程となろう。

11世紀になるといわゆる須恵系土器（赤焼け土器・仮称B類土器の一部）が主体的に生産・使用され、内面黒色処理の土師器は若干量が見られる程度になる。組成も杯・台付杯・皿・台



第11図 C d09竪穴住居跡出土土器実測図

実測回 番号	出土 層位	種類	部位	外 面		内 面		焼成	胎 土		その他
				色 調	調整・飾文	色 調	調整・飾文		色 調	土 性	
1	床	杯	腹・口	灰乳色	コワコワで 同配糸状無調整	灰色地埋	ヘラミナキ、網 かコワコワ	不良	灰乳色	石英粒多く粗	反転復元
2	"	"	底 全	淡乳色	"	"	"	"	淡乳色	石英粒・雲母片あり、普通	"
3	"	"	腹・口	"	"	"	"	"	"	"	底面に×印
4	"	"	"	淡茶褐色	"	"	"	"	淡茶褐色	石英粒ありて粗	"
5	"	"	"	赤褐色	"	"	"	"	茶褐色	"	"
6	"	"	"	淡灰乳色	"	"	"	"	灰褐色	石英粒あるも良好	"
7	"	"	底 全	赤褐色	"	"	"	"	不明	石英粒ありて粗	底面に×印
8	"	壺小 口欠	"	"	"	淡褐色	ヘラミナキ	"	茶褐色	石英粒ありて粗	反転復元
9	"	壺大	腹・口	茶褐色	コワコワで 体部へラ削り	茶褐色	コワコワで 体部刷毛目	"	淡褐色	石英粒ありて粗	反転復元
10	"	"	"	淡灰褐色	同上	淡灰褐色	同上	良好	黄褐色	"	反転復元

付皿・長胴甕・小形甕・盤・耳皿などになる。

以上の見通しに立つと、本調査資料は大略10世紀代におさまると考えられよう。須恵器の欠如という点に不安が残るが、一応このように見ておく。なお『須恵器の取り扱われ方』はそれ自体として検討に値する課題ではある。

Ca 21 竪穴住居跡出土の表面に叩き技法をもつ土師器甕に関連して、この種技法の存続期間の検討も必要であろう。佐久間氏の第2様式では長胴甕形にのみ限定されていたが、器種の枠をはずすとこの種技法の類例は比較的豊富である。県内では紫波町上平沢新田・矢巾町宮田・都南村稲荷・北上市西野・江刺市宮地・谷地・鶴羽衣・水沢市石田などがある。これらは第2様式に相当するものも当然あるが、第3様式あるいはそれ以降のものも存在するらしい。

いずれにせよ本調査地は10世紀代の集落の一部とみなされてよいであろう。

(2) 遺構の特徴について

既述のとおり本調査例に明確なカマドは指摘できず、その可能性のみを提示しえたにすぎない。しかし、その位置は県内の該期の遺構に比較してあまり大きな矛盾は無いといえる。本県においては奈良時代～平安時代にかけて、その原因は未詳であるが、大略北壁→東・南壁へと移る傾向があることは周知の事実である。

柱穴が不明な点などあるいは該期の特徴に合致する点かもしれない。

周辺における古代の集落の類例には鈴ヶ沢がある。丘陵周縁の斜面に最低3棟が検出されている。城館（鈴ヶ沢館）と重複しているので、丘陵頂部の平坦面にも遺構が存在したかどうかは不明である。斜面に検出された3棟の竪穴住居跡のカマドは北壁につくものと北東隅につくものの二種があるが、いずれも斜面上方にむかって煙道・煙出しが構築されている。これは前記の傾向に矛盾するが、これは地形に影響されたためとも考えられよう。なお竪穴「住居」が比較的高位かつ斜面上に営まれた理由は、それ自体が検討に値しよう。生業論的観点なども加えて検討されるべきであろう。

出土遺物は主体をなす土師器と若干量の須恵器からなる。杯形を見ると前者は回転糸切・無調整のものへとへら削り調整のあるものからなり、後者は回転糸切・無調整のものである。したがって本調査例より若干古い位置づけられるかもしれないが、同様に10世紀代にはおさまるものであろう。

時代不明の遺構と遺物

(1) Ce18 掘立柱建物跡 (第12図・図版3の3)

〔検出地点・面〕 調査地はほぼ中央で、Ib層下に検出した。

〔方向〕 NE-SWの方向に長くのびる。

〔規模〕 2つの可能性がある。

④間口4間 (総長8.4m・27.8尺) × 奥行2間 (5m・16.4尺) のものである。それぞれの総長にはきわめて強い斉一性が認められるが、個々の柱間隔はまちまちである。⑦-⑩、⑨-⑭が7.5尺の等間になるのが目立つ程度である。

⑥①の規模のおも屋の東方に間口・奥行ともに2間を付したものである。この場合その部分は廂に類したものと考えられよう。ただし⑥の想定においては②-③の状況が他と異なる点が不審である。間口の総長は12.8m・42.24尺となる。

〔柱穴の状況〕 平面は径0.6×0.7mの円形で、深さ0.5～0.6m前後のものが多い。底面は基盤礫層に達しているものが多い。時に意図的に礫を置いたかの如きものもある。覆土はIbとIIa層土の混土と礫とで構成され、しまりはない。壁面は垂直に立つものが大部分で、稀に⑩・⑪のように傾斜するものもある。柱あたりは確認しえなかった。なお、⑤・⑥は重複しており、つくりかえと考えられる。

〔性格・年代等〕 柱穴覆土出土の土器は古代に属すると思われ、それは本遺構の上限を示すものではあろう。しかし古代の掘立柱建物とみなすには以下の疑問が伴う。④柱間隔が非常に不揃いである点。⑥柱穴の平面形が円形である点などである。昆野 靖氏の教示によれば、近世の建物の柱間隔は非常に不規則であるが、総長には斉一性があるとのことである。したがって二つの可能性を指摘できるが、本遺構の年代は一応不明としておく。性格は倉庫に類したものであろう。

(2) Cc06 竪穴住居様遺構 (第13図・図版4の3)。

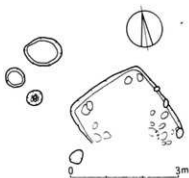
保存が悪く北半のみを検出したにすぎない。

〔検出地点・面〕 調査地のほぼ中央、若干東寄りのIb層下位に検出した。

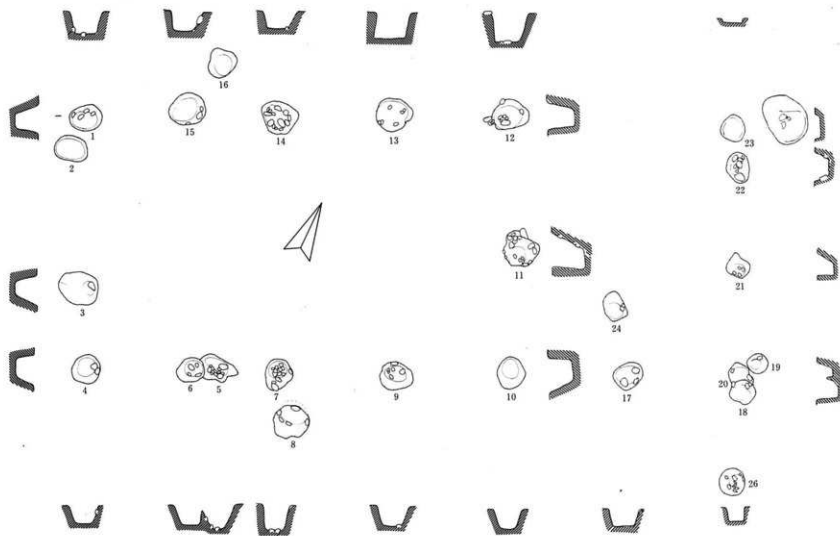
〔規模・方向〕 NW-SEの方向にのび、短辺2.3m×長辺2.5m以上、深さ0.1mである。本来は長方形をなしたものであろう。

〔床面の状況他〕 床面はほぼ平坦で、礫が散在した。その他の施設は一切検出できなかった。

〔性格・年代等〕 遺物も出土せず、遺構の特徴に

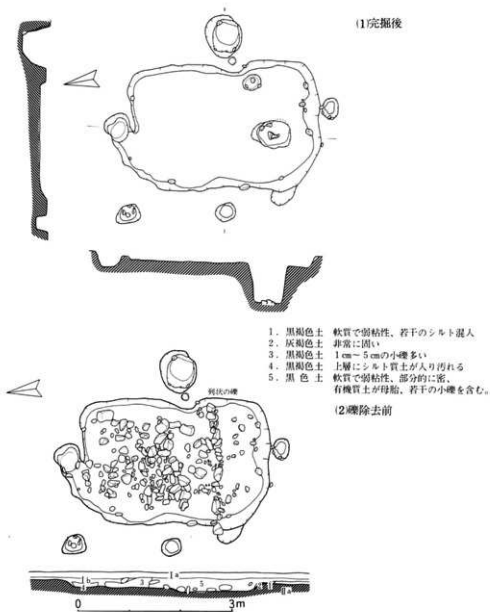


第13図 Cc06竪穴住居様遺構



測量 距離	開口																													
	北 辺						南 辺						西 辺						東 辺											
	1-10	10-14	14-18	18-22	22-25	1-12	1-12	1-13	1-6	6-7	7-9	9-10	10-17	17-20	20-28	4-10	4-20	1-1	1-4	1-4	12-11	11-10	10-12	12-11	21-22	22-21	21-20	20-21		
柱通り	cm	394	395	395	391	400	399	420		393	397	399	399	399	393	400	399	425		393	393	393	399	399	399	399	399	399		
心	尺	6.307	6.16	7.49	7.99	16.65	27.72	42.16		7.02	5.51	7.59	7.59	6.99	24.32	27.72	42.11		11.22	5.32	16.65	6.99	7.45	16.65	2.99	6.46	6.46	6.46		
心	cm	394	394	395	395	403	394	425		394	395	399	399	399	393	400	399	426		393	393	393	399	399	399	399	399	399		
+	尺	6.603	6.12	7.49	7.52	16.75	27.83	42.11		7.12	5.49	7.59	7.52	7.59	7.12	24.85	27.8	42.37		10.99	5.06	16.65	9.22	7.59	16.66	2.53	6.49	5.22	6.46	15.91
推定尺	尺	6.7	6.1	7.5	7.5	15.9	27.8			7.1	5.5	7.5	7.5	7.6	7.3	14.9	27.8	42		11.0	5.9	16.4	9.2	7.2	16.4	2.5	6.7	6.2	6.7	16.0

第12図 Cc18掘立柱建物跡



第14図 Cd 3壁穴住居様遺構

も古代に特定させる何ものもない。したがって年代は不明である。性格も不明である。

(3) Cd03 堅穴住居様遺構(第14図・図版4の4)。保存は比較的良好である。

〔検出地点・面〕調査地中央、若干東寄りの、1b層下位に検出した。

〔規模・方向〕南北方向にのびる長方形で、長辺3.5m×短辺2.5m、深さ0.1～0.15mである。

〔床面の状況〕ほぼ平坦である。ただし大量の礫が存在し、意図的に投入されたとみなされる。南半部に列状をなす礫の配置が見られ、何らかの区画の意図を読みとれる。またその下位に床面を掘り込んだ径0.8m、深さ0.8mのピットを検出した。調査の不備からこのピットの時間的位置を特定できず遺憾である。その他の施設はない。

〔柱穴〕床面中央に寄るものではなく、壁外部に検出された。4ヶ存在するが、明らかな対応関係を想定できるのは南北壁に接する2ヶであろう。深さ0.3m、径0.4m前後と共通性がある。その位置からすると棟持柱的のものが考えられる。東西の2ヶは疑問がある。

〔年代・性格等〕遺物が出土しないので、年代不明である。性格も不明である。ただし最近類例が増加してきている「中世の堅穴状遺構」に類似するとはいえる。

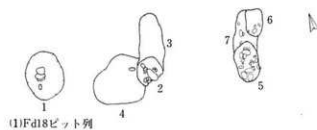
(4) Cb12 焼土集積部・Ce09 焼土集積部

両者とも1b層下位に検出したが、遺物の共伴もなく、その他の遺構も伴わないので、年代・性格ともに不明である。

Fブロックの遺構(第15図)。調査地南半のFブロックにピット列3、礫集積部1、焼土・粘土集積部等4をいずれも1b層下位に検出した。またすべて年代不明である。

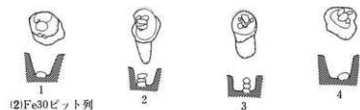
(5) Fd18 ピット列(第15図1)。重複しているものも含めて、のべ4ヶからなる。いずれも不整形で、底面は明確な底部を形成せずU字状をなす。覆土は1b層土からなり若干の礫が混入する。底部に礫の存在するものもある。柱あたりは確認できず、性格は不明である。

(6) Fe30 ピット列(第15図2・図版5の1～3)。Fブロックのピット列中でもっとも整ったものである。径0.6m、深さ0.45mのものが大部分で、相互の間隔は2m・2.5m・3mなどである。壁面は垂直で、床面は基盤礫層に達する。覆土は1b層土と礫とからなり、礫には数個が重なったものもある。これは意図的投入の結果の所産であろう。遺物の共伴はない。性格については、柱あたりは確認できなかったが、覆土特に礫の状況から、何らかの柱脚的なもの存

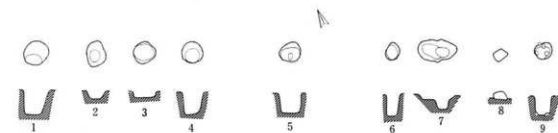


(1)Fd18ビット列

0 5m



(2)Fe30ビット列



(3)Ft27ビット列

Fa18ビット列

径	1	2	3	4	5	6	7
径	1.0	0.6	不明	不明	0.8	0.55	不明
m 厚	0.75	0.5	0.48	0.97	0.48	0.33	0.48
深さm	0.44	0.49	0.32	0.13	0.12	0.08	0.09

心々距離m

1-2	1-4	2-5	4-5	1-5
2.1	1.5	1.91	2.5	4.0

Fc30ビット列

径	1	2	3	4	5	6	7
径	0.8	0.7	0.62	0.7	0.6	0.9	0.64
m 厚	0.63	0.55	0.48	0.56	0.55	0.53	0.54
深さm	0.43	0.35	0.30	0.42	0.49	0.37	0.40

心々距離m

1-2	2-3	3-4	4-5	5-6	6-7	1-7
2.0	1.94	1.96	3.2	2.66	2.52	13.95

Ft27ビット列

径	1	2	3	4	5	6	7	8	9
径	0.5	0.52	0.45	0.42	0.43	0.35	0.8	0.36	壁
m 厚	0.5	0.38	0.45	0.42	0.4	0.28	0.4	0.32	
深さm	0.48	0.15	0.11	0.44	0.28	0.42	0.27	0.37	

心々距離m

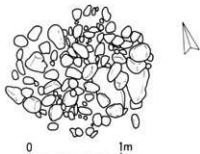
1-2	2-3	3-4	4-5	5-6	6-7	7-9	9-8	7-8	1-8
1.2	0.98	0.96	1.94	2.0	1.2	1.12	0.86	2.0	10.06

第15図 Fブロックビット列

在を前提とした掘り込み、即ち広義の柱穴とみなしてよいと思われる。しかしそれは建物を想定させる配置ではなく、列状の柱穴であり、強いてあげれば「柵」等の柱穴とみなすことはできよう。ここではそれに従っておく。

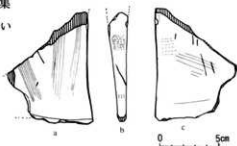
(7) Ff 27 ビット列 (第15図3・図版5の1)。(6)の南側にそれに平行してのびる。径0.3～0.7 mの円形ないし楕円形のビットからなり、深さは0.1～0.5 mと変化に富む。全般的に不揃いである。0.5 mを越えるものについては底面が礫層に達しているが、それより浅いものはIIa層中にとどまっている。其伴遺物はない。深いものについては柱穴の一種とみなせるが、浅いものは考えにくい。しかし全体的には一本の列をなしているとしかみなしえない。周囲のビット他との対応関係も明らかにはなしえない。したがって性格不明としておく。

(8) Ff 18 礫集積部(第16図1・図版5の4)。(6)・(7)の東端に、両者に挟まれて検出された。径約1.5 mの円形に配置されている。「石組み」ほど整然とは作られておらず、深さ0.08～0.1 mの掘り込みをつくり、そこに礫を2～3段積み重ねただけのものである。共伴遺物その他もなく、性格不明としておく。



第16図 Ff 18礫集積部

(9) その他の焼土集積部、焼土・粘土集積部(図版7の1)。以上の他に焼土集積部3、焼土と白橙色粘土質土の集積部1を検出した。前者は焼きしまりもなく、浮いている。後者はNG62焼土集積部に類似する可能性はあるが、共伴遺物がないので特定できない。



第17図 磁石実測図

下モ下釜遺跡

Ⅲ時代不明の遺物（第17図・図版8の7・8）。砥石様のものを2を得た。古代を上限とする各時代のものである可能性があろう。

近世の遺構 Bj18 墓 拡（第18図・図版6）1基を検出した。

〔検出地点・面〕調査地中央、若干西寄りの1b層下に検出した。

〔規模〕南北1.25m×東西1.1mの楕円形をなし、深さは墓拡中央で0.45mである。

〔埋葬の方法その他〕棺の有無は確認できなかったが、その痕跡も看取できなかったことから直葬であった可能性が大きい。人骨は一個体分検出した。頭骨がその他の骨の上位にあったことから座位の埋葬であったと思われる。人骨の詳細は別掲の鑑定書を参照されたい。

副葬品として銭貨4のみを得た（第19図・図版6の6）。うち一枚は「治平元寶」であり、他は判読できない。

〔年代等〕副葬品の「治平元寶」は万治二年（1659）貿易用として長崎で初鋳されたものそのものと思われる。したがって上限は万治二年となろう。人骨の鑑定結果照合しても矛盾はないと思われる。

IV その他

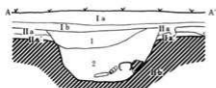
本調査地は安倍氏の諸柵の一つの「小松柵」の擬定地に近接するらしい。板橋 源氏（註8）による小松柵擬定地には①一関市萩荘大字上黒沢地方、②同大字下黒沢谷起島、③同一関釣山、④同大字上黒沢片平館などがあるが、①・②との地理的近縁性が大きいといえる。ただし本調査の結果の、とりわけ年代の推定が可能なものについては、それらの説について何らかの直接的寄与をなし得るものが無いことは既に述べてきたことから明らかである。南方の鈴ヶ沢例とも合わせて、律令体制にかわり、安倍氏に代表されるいわゆる「辺境在地勢力」が確立されつつある段階の生活の具体相の一部を示す資料にはなし得るであろう。

年代不明とした遺構の中に11世紀半頃にかかわり合うものが存在する可能性は皆無ではないが、該期の「柵」の具体相が必ずしも十分に明らかではない現状では、いたずらな特定は避けるべきであろう。

なお江戸時代の調査地周辺は下黒沢村にあたる。

V 人骨鑑定結果

Bj18墓拡出土人骨について、岩手医科大学桂秀策氏に鑑定を依頼した。以下にその結果を示す。



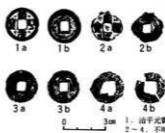
Ia > 表土
Ib > 覆土
IIa > 地山
IIb > 礎

覆土 1. 黒色シルト質土
2. 棕色粘土質シルトのブロックと
黒色シルト質土(1)の混土、
IIbの小礎を含む

覆土上面における礎



第18図 B j 18墓墳実測図



第19図 墓墳出土古銭拓影図

Ce18堀出柱建物跡柱穴群一覧

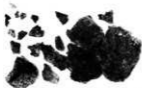
ピット番号	縦形	横形	最大径	最小径	深さ	柱穴の径	柱土の状況	底面の状況	出土遺物	柱番号	その他
1	縦円形	0.65	0.45	0.343	不明	礎	自然溝	無	無	18	
2	横円形	0.65	0.48	0.325	-	礎	不明	無	無	18	
3	-	0.60	0.65	0.409	-	礎	溝17、底面は東方に偏する。	無	無	18	
4	円形	0.55	0.55	0.348	-	礎少量	不明、溝2	無	無	18	
5	長横円形	0.8+0.4	0.5	0.458	-	礎	不明、溝少量、北側に偏す	無	無	18	北に切られる
6	横円形	0.55	0.45	0.38	-	礎	溝、北に偏す	無	無	18	北に切られる
7	-	0.65	0.55	0.408	-	礎	溝、北に明ろかに偏し偏す。	無	無	18	
8	-	0.72	0.62	0.504	-	礎	溝、やや北に偏す。	土障子 溝破片	無	18	
9	-	0.65	0.55	0.391	-	礎	溝、やや北に偏す	土障子	無	18	
10	-	0.7	0.52	0.38	-	礎	溝、やや北に偏す	土障子	無	18	
11	-	0.72	0.56	0.541	-	礎	溝、やや西に偏す	土障子	銅貨幣	18	
12	-	0.72	0.58	0.534	-	礎	溝	内瓦	無	18	
13	円形	0.72	0.68	0.454	-	礎	溝	土障子	銅貨幣	18	
14	不整形円形	0.7	0.65	0.514	-	礎	溝	土障子	銅貨幣	18	
15	円形	0.68	0.65	0.442	-	礎	溝、やや西南に偏す	内瓦	無	18	
16	横円形	0.6	0.55	0.508	-	礎	溝、平田	無	無	18	
17	-	0.58	0.48	0.328	-	礎	溝、平田	銅貨幣	銅貨幣	18	
18	円形	0.5	0.48	0.541	-	礎	溝、平田	銅貨幣	銅貨幣	18	北に切られる
19	-	0.4	0.4	0.203	-	礎	溝、平田	銅貨幣	銅貨幣	18	
20	横円形?	0.55+0.4	0.4+0.4	0.286	-	礎	溝、北に偏す	無	無	18	北に切られる
21	長方形?	0.45	0.36	0.315	-	礎	溝、北に偏す	無	無	18	
22	横円形	0.6	0.42	0.294	-	礎	溝、平田	銅貨幣	銅貨幣	18	
23	円形	0.55	0.5	0.488	無し	礎	溝、平田	銅貨幣	銅貨幣	18	
24	横円形	0.58	0.42	0.545	不明	礎	溝、平田	銅貨幣	銅貨幣	18	
25											
26	円形	0.5	0.5	0.377	-	礎	溝、東に偏す	土障子	銅貨幣	18	
27	横円形	1.0	0.75	0.148	-	礎	溝、東に偏す	銅貨幣	銅貨幣	18	

下モ下釜遺跡

1. 第 1 箱

人骨様のものが容れられており、これをA、B、Cの三分に分けて検査した。

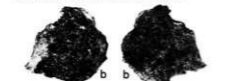
A区分には16×8×7mm大の骨片から、101×81mm大の扁平な骨に至るもの20個がある。このうち小さい1-2個の骨片を除き、他はいずれも人頭蓋骨の一部とみられる。これらにa-cの符号を付けて所見を記載する。



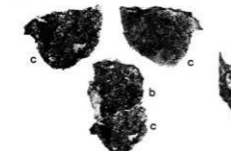
a. 最も大きい骨片は101×81mm大で、前頭骨の一部と左頭頂骨の一部で、冠状縫合は外板では骨化していないが、内板では殆んど骨化している。外板の縫合線は半分が直線的経過をとる。



b. 大きき86×72mm、主として左頭頂骨の内側部で、その他大豆大の右頭頂骨と後頭骨がそれぞれ存在する。矢状縫合は外板・内板ともに骨化しており、人字縫合は骨化していない。

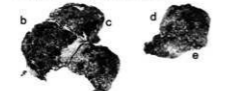


c. 大きき75×53mm、右頭頂骨と左頭頂骨で右が大きく、矢状縫合は外板で骨化し、内板で骨化していない。cはbの右側に完全に接合する。



d. 大きき40×52mm、右頭頂骨の後部で人字縫合部がみられ、bの右縁と接合する。

e. 大きき45×30mm、後頭骨の一部で、人字縫合をもってdと接合する。以下頭蓋骨の小片とみられるものが省略する。



B区分には胸椎骨体の一部と棘突起の一部とみられるものがある。その他、海綿状を呈する骨片および扁平な胸蓋骨の一部等がみられるが、細片のため骨片の名称は不明である。さらにB区分には右手骨の有頭骨および同骨状骨とみられるものがある。また、手根骨の一部と思われるものが1個ある。



C区分には長さ50mmと40mmの右中手骨2個と部位不明の右肋骨の胸椎に近い部分が1個ある。その他C区分には中手骨あるいは肋骨に類した骨片があるが、小片のため詳細は不明である。



2. 第 2 箱

これには下顎骨の一部、脛体の大部分を残す脛骨5個、脛骨の一部分が1個、橈骨の一部が2個、橈蓋骨の一部と思われるものが1個などが容れられている。以下その所見を記す。

a. 下顎は左は第2大臼歯のすぐ後の部分から欠損し、右は下顎角部で欠けている。下顎角の巾は約90mmと推定する。オトガイ部、左下顎部が一部欠損し、性別の判定は困難である。下顎角は測定し得なかった。

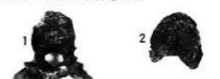


歯牙は左は第1から第7まで存在し、右は第1から第6までみられ、第7の歯槽は存在せず、死亡の相当以前に脱落したものと推定される。左第2大臼歯外側から右第1大臼歯外側までの距離は94mm、左大臼歯後面から内側前面までの垂直距離は11mmある。左右内外の切歯は巾0.8-1.6mmに象牙質が露出している。左右の大歯は半米粒大の象牙質が露出し、左小臼歯は粟粒大に、右は約2×3.5mm大にそれぞれ象牙質が露出している。大臼歯は一部欠損しているが、半米粒大ないし米粒大に象牙質が露出しており、



歯牙の根は高度である。左右の切歯および左右の大歯には歯石が高度に付着している。

b. 脛体の大部を残す脛骨に1-6の番号を付けて検査する。No.1、脛骨体の大きき(前後×左右×高さ)は31×32×21mm、肋骨高がみられ胸椎である。しかし部位を明かにし得なかった。No.2、殆ど脛体のみで、その大ききは45×40×20mmである。肋骨高を明かに認識し得ず、種類と推定される。



No.3. 標体の大きき32×40×23mm. 一部欠損しているが標体である。

No.4. 標体の大きき33×39×17mm (標体前部) または27mm (標体後部). 標体前部が扁平され、側面は楕圓形の輪郭を示す。標体である。



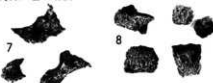
No.5. 標体大きき19×35×23mm. 標体である。

No.6. 大きき20×21×17mm (後部) または124mm (後部). 第12胸椎の右半分と推定する。標体前部が扁平されている。

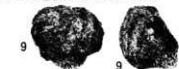


c. 第2層に存在する他の骨に7-12の番号を付し、検査する。
No.7. 胸椎の棘突起、脊椎の棘突起および腰椎の棘突起と右横突起の一部である。

No.8. 部位不明の標骨の一部と推定されるもの6個がある。(写真は5個のみ撮影)



No.9. 大腸骨頭高が認められ、大腸骨頭の一部と推定されるが、小片のため左右を識別し得ない。残存する関節面の大きき37×30mmで、推定関節面の大ききは径40mmである。



No.10. 月状面の一部および耳状面の一部がみられ、左腕骨の一部である。耳状面と月状面の距離は42mmあり、測定し得る月状面の大ききは32×27mmである。



No.11. 大きき69×19×10mmと52×24×11mmの長骨骨の一部で、緻密質の厚さは0.5mmある。骨片からは骨名を推定するに足る所見を得ないが、No.9およびNo.12と同一の種で推定する場所から出土したものであるならば、大腸骨の一部と思われる。

No.12. 大きき約17×16×16mm. 椎体棘突起構造をもつ骨片で緻密質は密である。骨名は不明である。



3. 第3箱

長骨骨から小骨片に至る多数の骨があり、a-uの番号をつけて検査する。

- a. 長さ112mm. 肋骨であり、左側のものと推定する。部位は不明である。
b. 長さ125mm. 肋骨であるが左側のものと推定する。部位不明である。



- c. 長さ111mm. 肋骨であり、左側のものと推定する。部位は不明である。
d. 長さ74mm. 肋骨であるが左右の別と部位は不明である。



- e. 長さ82mm. 肋骨の内面の一部と推定する。左右の別と部位は不明である。
f. 長さ59mmの骨片と小骨片、左肋骨の一部と推定する。部位は不明である。



- g. 長さ36mmのものもう1つの小骨片、右肋骨と推定する。
h. 手根骨の一部とみられるが小片のため、骨名は不明である。



- i. 肋骨の一部と推定する。
j. 手根骨の一部と推定されるが、小片のため骨名は不明である。
k. 右上腕骨で、実測長は278mm. 推定全長は282mmである。上腕骨頭部のX線写真では柱構造が著明である。



- l. 手根骨の一部と推定するが、小片のため骨名は不明である。
m. 手根骨の化量型骨とみられる。(nは省略)
o. 小骨片のため骨名は不明である。
p. 右鎖骨. 実測長103mm. 推定全長110mmである。



- q. 右尺骨の肘頭部で長さ378mmである。
r. 腰椎棘突起の一部と推定する。



下モ下釜遺跡

- s. 62×34 mmの骨片は胸骨体の一部で、 32×26 mm大のものは胸骨柄と推定されるが、一部は胸骨体である。
 t. 大きき 31×19 mm、胸標（部位不明）の左端突起である。
 u. 大きき 39×33 mm、胸標または腰標の標弓の一部である。



- v. 手根骨の右月状骨である。
 w. 右第3中手骨の近位端部である。
 x. 標弓の一部と推定する。



4. 第4箱

これには長管骨等が容れられており、第3箱と同様に各骨にa-mの符号をつけ検査する。

- a. 大きき 102×85 mm、右胸骨の一部である。
 b. $30 \times 20 \times 16$ mm、坐骨の一部と推定する。



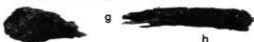
- c. 大きき $100 \times 47 \times 38$ mm、左脛骨近位端部である。下端から45mmのところは長さ27mm、巾2mmの褐色縞状のものがある。鏡検するに縞物類と推定される。
 d. 大きき 82×18 mm、長管骨の一部であるが、骨名を特定し得ない。



- e. 長さ52-67mmの肋骨の一部が3個あったものである。
 f. 長さ37mmで管状を呈し、中手骨あるいは中足骨の一部と推定されるが、破損が強く詳細は不明である。



- g. 大きき $46 \times 21 \times 13$ mm、腓骨近位端部であるが左右を識別し得ない。
 h. 大きき 92×14 mm、左腓骨近位端部と推定する。



- i. 大きき 48×24 mm、脛骨近位端部の一部と思われるが詳細は不明である。
 j. 大きき $59 \times 39 \times 30$ mm、左距骨である。



- k. 大きき $68 \times 40 \times 34$ mm、左脛骨である。
 l. 実測長316mm、推定全長325mm、右脛骨である。



- m. 実測長350mm、推定全長370-375mm、右大腿骨である。大腿骨頭部から70mmのところまで骨接し、その断面は新鮮である。



総括

- a 一関市萩荘所在の墳墓出土人骨は明らかに人骨であり、人骨以外の獣骨等を積極的に証明することはできなかった。骨名が判明したもので同一の部位のものは存在せず、また肋骨、椎骨等の数も1体の数以上に存在せず、本人骨は1体であると推定できる。
- b 冠状、矢状および人字の縫合の骨化の程度（第1箱1-a、1-b、1-c）、歯牙の咬耗が高度であること（第2箱a）、および上腕骨頭部のX線で構構造が著名なこと（第3箱K）などから、本人骨は高年者で、その年齢は50才以上60才代の前半位の間であると推定する。
- c 本人骨には性別を判定するに足る資料が存在せず、性別は不詳である。
- d 本人骨の性別は不詳であるが、ほぼ完全に存在した右上腕骨（282mm）と右大腿骨（370-375mm）の推定全長に身長係数を乗じて推定身長を求めると、本人骨が身長係数を求めた人達と同様の長管骨の比率をもっていたとすると、本人骨の身長は145cm前後ないし155cm前

後と推定された。

- e 本人骨は非常に脆弱であり、また毛髪等もみられず、骨表面および骨断面に対する紫外線照射では、いずれも褐色ないし灰褐色の蛍光を発し、死後の経過年数は相当古いものと推定される。しかし、死後経過年数を具体的に示すことは本人骨が存在した土壌の性質などにも関係するので困難である。
- f 本人骨の胸椎または腰椎の一部には、椎体の前後が圧平されており（第2箱b-No2、No4）、強度の脊柱後彎があったものと推定する。

岩手医科大学教授 桂 秀 策

- 註1. 小野寺 信吾 第一章 一関の自然史 一関市史 第一巻通史 一関市 昭和53年8月
- 註2. 佐久間 豊 奈良・平安期土器の型式学的分析 考古学研究 第25巻第2号 考古学研究会 1978年9月
- 註3. 沼山 壽壽治 灰引遺跡調査報告書 北上市教育委員会 昭和52年3月 他の諸論文による
- 高橋 信雄 岩手県のロクロ使用土器について 考古風土器第2号 1977年4月
- なお、両氏の見通しは、考古学研究会岩手支部例会における各種の討議の中でも明らかにされている。
- 註4. 岩手県教育委員会調査 吉田 努氏の指示による。
- 註5. 岩手県文化財調査報告書第32集 東北縦貫自動車道関係遺跡発掘調査報告書Ⅱ 岩手県教育委員会 昭和54年 所収
- 註6. 岩手県教育委員会調査 佐々木 勝・鈴木隆英両氏の指示による。
- 註7. 石田遺跡発掘調査現地説明会資料 岩手県教育委員会・水沢市教育委員会・日本道路公団 1976年
- 註8. 板橋 源 第二節 安倍氏在地勢力の地域支配形態 岩手県史第1巻 上古篇・上代篇
上代篇 第四章 所収

鈴ヶ沢遺跡

I 立地とその周辺遺跡

1 立地と基本層序（第1図）

本遺跡は、東北本線一関駅の南西3.7kmの有壁丘陵北縁の東に張り出した舌状部にある。北方約1.3kmには東流する磐井川と市野々川の合流点がある。当調査地は標高約67～55mの丘陵に五小平場により構成されている。南側の低地は丘陵に入り込んだ沢に続いている。西側は尾根伝いに高度を増し南側に連なっていく。平場と急斜面よりなる当調査地の土はかなり動いている。表土及び風化堆積層は極めて薄く、基盤の凝灰質砂岩がそれらに続く。



I層：黒色土（旧表土）：腐植土

II層：暗褐色土：粘土質土

II'層：暗褐色土：砂質土

V層：凝灰質砂岩：基盤岩

基本層序は右図に示す。

第1図 基本層序模式図

2 周辺遺跡（第1表及び巻頭一関地区概観第1図） 萩村史の記載事項「鈴ヶ沢館」との一関連での周辺の館については丘陵沿いに五館がある。西側の上黒沢城（別名・片平館）と東の甘藷館は距離的にも強い関連を有していたと考えられる。当調査地の館以外については平安期以降の住居跡、弥生時代の遺物、縄文時代の遺物、更には近世の墓塚が検出されている。縄文時代等関連しては、本調査関連の下も下釜遺跡が北東方向にある。弥生時代については北方の谷起島遺跡、古代より中世にかけては著名な泥田廃寺址、伝承地ではあるが前九年の役や後三年の役に関するものが本調査地の北側に展開している。過去より現在まで生活の場としての集落の存在については興味深いものがある。同時性をもつ集落等の分布を明確にする事は大変難しいが、個々の調査について十分に検討を行い相互の関係を明確にしなければならない。

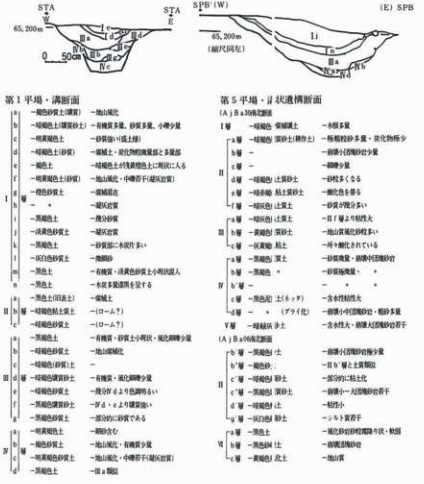
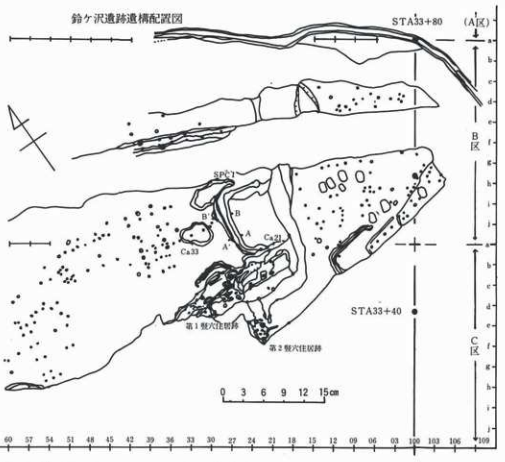
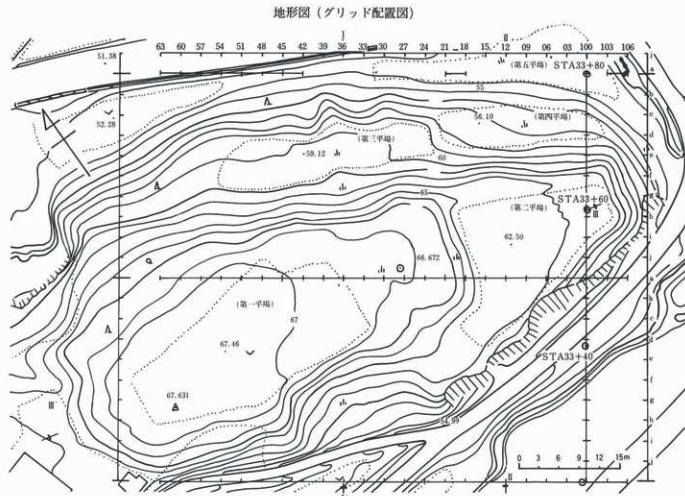
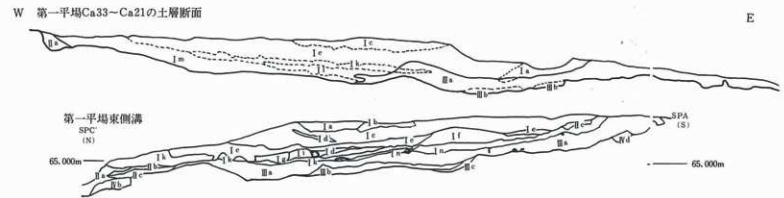
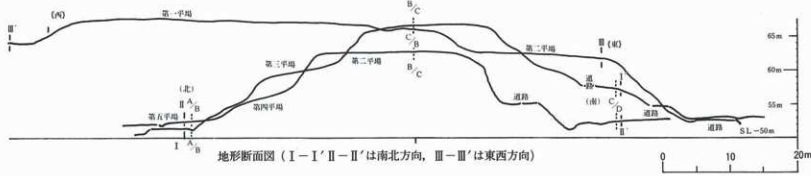
第1表	本		丸		二ノ丸		城	主	備考
	東	西	南	北	東	西			
上黒沢城山	(120m)・20間		(200m)・34間		・・60間		・・34間	小岩越中没西暦1567年	(雄郭式山城高さ80m)
下黒沢城山	(300m)・105間		(200m)・86間		・・40間		・86間	黒沢豊前卒西暦1591年	(雄郭式山城高さ80m)
第1'表	壑		橋		城		主	備考	
小姓館	30間		25間		不		明	在鹿込 天正年中 (18年～西暦1590年) 在江川秋葉	
甘藷館	20間		15間		千		田入道宗念		
秋葉(江川)	-		-		不		明		
鈴ヶ沢館	30間		22間		不		明		

※第1表は1673～1680の仙台領古城書上より、()は紫核正隆による。第1'表は萩村史による。

II 鈴ヶ沢遺跡に於ける館に関連した遺構群（第2図遺構配置図・地形及び地形断面図）

(1) 本調査地は調査時点において五つの平場が想定され、そして確認された。そのそれぞれの広さ及び遺構概要は次の通りである。第一平場、東西約55×西北15m（現尺にて30間×8.3間、但し南北巾は東側の遺存長で、西側の遺存長では19m約10間強となる）掘立柱建物跡3棟分と思われる柱穴群、溝1条等である。第二平場東西約20m×南北約12m（現尺にて11間×6間）掘立柱建物跡3棟分と柱穴列、溝1条である。第三平場東西約20m×南北1.5m（現尺にて11間×0.8間）掘立柱建物1棟である。第四平場約30m×6.6m（現尺にて16.7間×6.1間）柱穴群、第五平場東西約80m×南北3m（現尺にて44間×1.6間）大溝1条。第一平場の調査前の状況では東端に幾分高まりを感じたが、調査結果として溝に囲まれた平場の確認にとどまった。柱穴及び古銭、鉄滓等も検出されたが、建物やその他遺構として成立するものがなかった。第一平場溝(写真第9図)の埋土については第2図の断面図にて示したが、特徴として多量の炭の堆積がある。この事は鉄滓や鉄滓の付着しているフィゴ口の検出と考え合せてこの平場上に鍛冶場の存在した事も考えられる。鉄滓の出土したのはCa30付近のIh層である。Ih層はIeと同じく遺物を出土している。溝の南東及び東部は不明確な形で確認されており、これらの部分の壊変の証拠ともなり得ようが元の形については推定が難しい。検出形において溝の両端は中央部より標高は低い、高台であるので水掘等の形で維持は難しいが、逆に高台であるからこそ無理をしてでも維持した可能性もある。再び溝の状況を見直すと、溝の最下端は北側の63.21m、最上端は南側の65.11m、上場の最下端は65.63m、北東端の最上端はBj21地点付近の65.73mである。平場の東側の最高点は64.9mである。炭の広がりにはCa27地点の北側の点からBi29までとBh28地点付近の2ヶ所で平均標高は65.40mと64.80mである。以上において溝と平場の最大高低差は90cm弱、巾は1.5~2.5m程になる。第一平場への道は南東部の斜面にある。この道が過去においても使用された可能性は大きい。第二平場は第一平場の東側にあり前述の登り道で第一平場とのつながりが考えられるが、他の平場とのそれは不明である。

(調査時まで平坦地からの登り道が第一平場への登り道に続いていた) 検出遺構の9基の土壌墓のうち2基において掘立柱建物関連の柱穴を切っていると考えられる。この平場においても検出形と使用形は異なるものと思われる。特に南側の雨裂痕は大きく口を開いていた。その下側に道が通っていた。第三平場の場合は第一平場に続く斜面上にも柱穴が確認されているがそれらと合せ建物が考えられる。第四平場の細長い部分にある柱穴配列よりは建物は推定出来ない。これは平場造成部の崩落による事も考えられるが連絡路ゆえとも考えられる。第五平場の掘状の溝は西より中央部まではほぼ直線的に走るが一度中央部で北側に曲り、東に進みながら南下する。埋土の状況は第16図にて示してある。以上第一から第五平場まで館施設と考え概観を述べたがこれら平場は或時点には同時存在同時使用された可能性も有るが詳細については明確に出来ない。

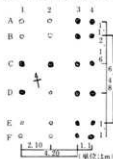


- | | |
|---------------|---------------|
| 第1平場・遺断面 | 第5平場・遺断面 |
| 一 褐色砂土 (厚層) | 一 褐色砂土 (厚層) |
| 二 褐色砂土 (厚層) | 二 褐色砂土 (厚層) |
| 三 褐色砂土 (厚層) | 三 褐色砂土 (厚層) |
| 四 褐色砂土 (厚層) | 四 褐色砂土 (厚層) |
| 五 褐色砂土 (厚層) | 五 褐色砂土 (厚層) |
| 六 褐色砂土 (厚層) | 六 褐色砂土 (厚層) |
| 七 褐色砂土 (厚層) | 七 褐色砂土 (厚層) |
| 八 褐色砂土 (厚層) | 八 褐色砂土 (厚層) |
| 九 褐色砂土 (厚層) | 九 褐色砂土 (厚層) |
| 十 褐色砂土 (厚層) | 十 褐色砂土 (厚層) |
| 十一 褐色砂土 (厚層) | 十一 褐色砂土 (厚層) |
| 十二 褐色砂土 (厚層) | 十二 褐色砂土 (厚層) |
| 十三 褐色砂土 (厚層) | 十三 褐色砂土 (厚層) |
| 十四 褐色砂土 (厚層) | 十四 褐色砂土 (厚層) |
| 十五 褐色砂土 (厚層) | 十五 褐色砂土 (厚層) |
| 十六 褐色砂土 (厚層) | 十六 褐色砂土 (厚層) |
| 十七 褐色砂土 (厚層) | 十七 褐色砂土 (厚層) |
| 十八 褐色砂土 (厚層) | 十八 褐色砂土 (厚層) |
| 十九 褐色砂土 (厚層) | 十九 褐色砂土 (厚層) |
| 二十 褐色砂土 (厚層) | 二十 褐色砂土 (厚層) |
| 二十一 褐色砂土 (厚層) | 二十一 褐色砂土 (厚層) |
| 二十二 褐色砂土 (厚層) | 二十二 褐色砂土 (厚層) |
| 二十三 褐色砂土 (厚層) | 二十三 褐色砂土 (厚層) |
| 二十四 褐色砂土 (厚層) | 二十四 褐色砂土 (厚層) |
| 二十五 褐色砂土 (厚層) | 二十五 褐色砂土 (厚層) |
| 二十六 褐色砂土 (厚層) | 二十六 褐色砂土 (厚層) |
| 二十七 褐色砂土 (厚層) | 二十七 褐色砂土 (厚層) |
| 二十八 褐色砂土 (厚層) | 二十八 褐色砂土 (厚層) |
| 二十九 褐色砂土 (厚層) | 二十九 褐色砂土 (厚層) |
| 三十 褐色砂土 (厚層) | 三十 褐色砂土 (厚層) |
| 三十一 褐色砂土 (厚層) | 三十一 褐色砂土 (厚層) |
| 三十二 褐色砂土 (厚層) | 三十二 褐色砂土 (厚層) |
| 三十三 褐色砂土 (厚層) | 三十三 褐色砂土 (厚層) |
| 三十四 褐色砂土 (厚層) | 三十四 褐色砂土 (厚層) |
| 三十五 褐色砂土 (厚層) | 三十五 褐色砂土 (厚層) |
| 三十六 褐色砂土 (厚層) | 三十六 褐色砂土 (厚層) |
| 三十七 褐色砂土 (厚層) | 三十七 褐色砂土 (厚層) |
| 三十八 褐色砂土 (厚層) | 三十八 褐色砂土 (厚層) |
| 三十九 褐色砂土 (厚層) | 三十九 褐色砂土 (厚層) |
| 四十 褐色砂土 (厚層) | 四十 褐色砂土 (厚層) |
| 四十一 褐色砂土 (厚層) | 四十一 褐色砂土 (厚層) |
| 四十二 褐色砂土 (厚層) | 四十二 褐色砂土 (厚層) |
| 四十三 褐色砂土 (厚層) | 四十三 褐色砂土 (厚層) |
| 四十四 褐色砂土 (厚層) | 四十四 褐色砂土 (厚層) |
| 四十五 褐色砂土 (厚層) | 四十五 褐色砂土 (厚層) |
| 四十六 褐色砂土 (厚層) | 四十六 褐色砂土 (厚層) |
| 四十七 褐色砂土 (厚層) | 四十七 褐色砂土 (厚層) |
| 四十八 褐色砂土 (厚層) | 四十八 褐色砂土 (厚層) |
| 四十九 褐色砂土 (厚層) | 四十九 褐色砂土 (厚層) |
| 五十 褐色砂土 (厚層) | 五十 褐色砂土 (厚層) |

第2図 地形・遺構配置・地形断面・第一平場関連断面図

(2) 第一平場掘立柱建物跡(遺構配置図・第8図・写真第2図)

第1掘立柱建物跡(Ce60)(3図・2表)梁列方位は北より 10° だけ東に偏っている。南北棟で $5.3 \times 8.7\text{m}$ (2.9間 \times 4.8間)の広さを持つ。間数は東西2間南北3間で梁行は 2.1m (7尺)と桁行は 2.16m (7尺)とはほぼ等間隔になる。身舎部は $4.2 \times 6.48\text{m}$ (14×21.6 尺)となる。三面の廂の桁行は身舎のそれに従い角の部分で 1.1m (3.6尺)の正方形を形作る。梁

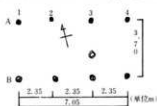


第3図 1-1建物

行1・2列間は2・3列間より幾分広い。柱穴平面形は角形が多く廂部分は丸形が多い。中央部 $C_3 D_3$ は柱あたりを有す。柱穴の検出面からの深さは表に示す通りである。F₁ F₂は平場の状況より宙に浮く形であるが、崩落によるものと考えた。建物を構成する柱穴数の $\frac{2}{5}$ を推定しているので問題も生ずるが検出した柱穴の配列を重視して建物を想定した。伴出遺物及び柱根の残存もなく、切合の関係を示すような柱穴や建替えを示すような柱穴を識別出来なかった。

第2表	A ₃	A ₄	B ₃	B ₄	C ₁	C ₂	C ₃	C ₄	D ₁	D ₃	D ₄	E ₃	E ₄	F ₃	F ₄	平均
深さ	0.48	0.61	0.30	0.49	0.41	0.40	0.22	0.44	0.24	0.22	0.20	0.15	0.16	0.12	0.33	0.31
標高(底)	67.26	66.69	66.99	66.83	66.80	66.79	67.08	66.86	66.95	67.02	67.00	66.93	66.95	66.92	66.76	66.90

第2掘立柱建物跡(Ca54)(4図・3表)桁列方位は北より 13° だけ東に偏っている。東西棟で $7.05 \times 3.70\text{m}$ (3.9間 \times 2.0間)の広さを持ち廂はない。梁行は図化された柱穴に於いて北側の間隔が長く 2.30m と 1.50m (7.6尺と5尺)であるがほぼ等しい間隔をもつものがあるとなれば梁行 1.85m (6.2尺)のものが考えられる。その場合は桁行3間($7.05\text{m} = 23.5$ 尺)桁行間($2.35\text{m} = 7.8$ 尺)、梁行2間($3.70\text{m} = 12.3$ 尺)梁行間($1.85\text{m} = 6.2$ 尺)となるが図示したものは梁行2間($3.70\text{m} = 12.3$ 尺)梁行間($1.50\text{m} = 5$ 尺・ $2.20\text{m} = 7.6$ 尺)となる。梁行1間($3.70\text{m} = 12.3$ 尺)となる場合、梁渡しが長過ぎる感じがする。梁列は北はほとんど凹凸があ

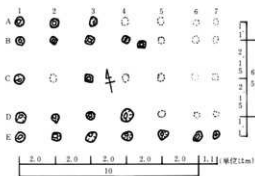


第4図 1-2建物

り又南列に比して柱穴は小さい。周囲柱穴の柱間寸法 1.1m で廂柱穴とし得るものがあるが、検出柱穴数が少く含めなかった。北桁列の凹凸は桁間を補強する柱のように見えるが断定出来ない。第1建物と同様に伴出遺物はない。切合の関係を建替関係を示すような柱穴を識別出来なかった。柱穴は全般的に小さい。

第3表	A ₁	A ₂	A ₃	A ₄	B ₃	C ₁	C ₂	C ₃	C ₄	平均
深さ	0.43	0.43	0.36	0.25	0.06	0.64	0.49	0.41	0.11	0.35
標高(底)	66.54	66.50	66.46	66.50	66.70	66.75	66.52	66.43	66.42	66.53

第3掘立柱建物跡(Bi45)(5図・4表)桁列方位は北より10°だけ東に偏っている。東西棟で11m×6.5m(6.1間×3.6間)の広さを持つ。間数は東西5間、南北2間で梁行2.15m(7.2尺)で桁行は2.0m(6.7尺)であり、身舎部は4.3m×10m(14尺×33尺)となる。東南北の三間の柱間は身舎の柱間に一致するが角において1.1m(3.6尺)の方形となる。図示の通り推定柱穴



第5図 1-3建物

数は15となる。方形の平面形を示す物は北側に比較的多い。A₄~A₇推定の物は盛土部分で剥土した部分であるが記録に残る標高は柱穴底平均標高より高い。柱穴内に遺物は検出出来なかった。重複切合を示すと思われる柱穴は次に述べる建物に関するものであるが、それ以外は不明確である。建替については関連柱穴を識別出来なかった。

第4表	A ₁	A ₂	A ₃	B ₁	B ₂	B ₃	B ₄	C ₁	C ₂	D ₁	D ₂	D ₃	D ₄	E ₁	E ₂	E ₃	E ₄	E ₅	E ₆	E ₇	平均
深さ	0.46	0.53	0.41	0.75	0.66	0.44	0.35	0.93	0.73	0.87	0.71	0.76	0.59	1.02	1.06	0.96	0.98	0.46	0.29	0.21	0.66
標高(底)	65.24	65.18	65.13	65.34	65.18	65.34	65.34	65.57	65.34	65.35	65.37	65.37	65.40	65.21	65.16	65.13	65.12	65.23	65.67	65.64	65.32

第4掘立柱建物跡(Ca42)(6図・5表)「第5掘立柱建物跡(Ca42'・7図・6表)」南北棟で5.7×3.4m(3.1×1.8間)の広さを持つ。図中の太い点線で示したものは第3建物のC₁C₃D₂D₃E₁E₂E₃でありC₁は本建物の西側に、D₁は本建物のB₁になっている。このB₁は平面形でも広がりを持ち切り合いを推定した。これら柱穴の桁行は1.9m(6.3尺)となるが、A桁とB桁の間隔が一番広く、B桁とC桁の間が一番狭い。梁行は3.4m(11.3尺)であるが、南側程狭くなっている。C₁とD₁の間隔は2.1m(7尺)と長く少しゆかむが本来の間隔で、C₂D₂間1.9m



第6図 1-4建物

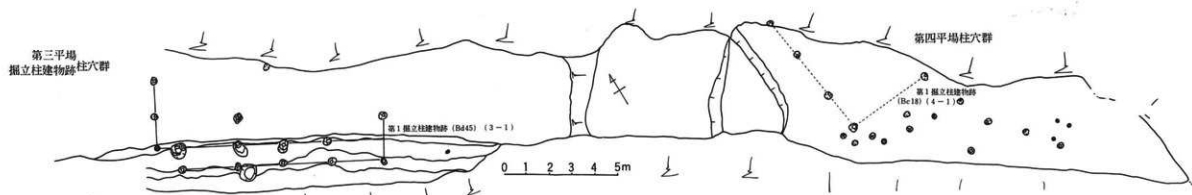


第7図 1-5建物

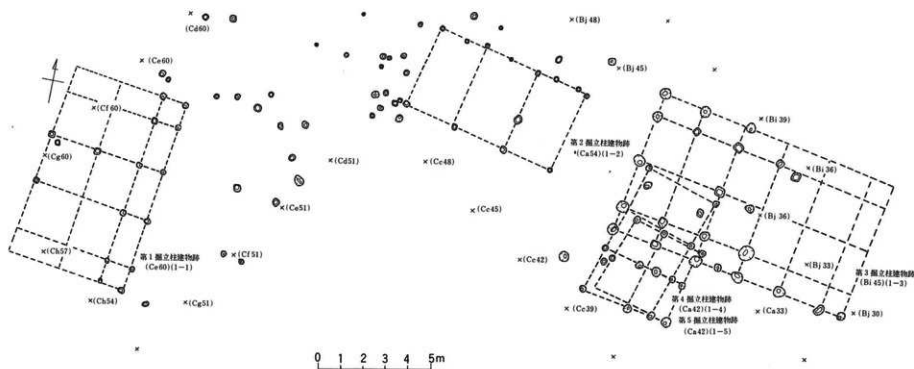
(6.3尺)の方が規格にはずれたものかもしれない。以上の柱穴を含めた形で別の柱の配列が考えられ第5掘立柱建物跡と仮称される。重複して考えられる柱穴は第4建物のB₂C₂D₂で第5建物のA₃B₃C₃になる。他の建物に比し柱穴数等特異であり今後の検討課題となる。

第5表	A ₁	A ₂	B ₁	B ₂	C ₁	C ₂	D ₁	D ₂	平均
深さ	0.93	0.73	0.87	0.42	0.39	0.46	0.76	0.33	0.61
標高(底)	65.57	65.34	65.35	65.69	65.85	65.70	65.37	65.82	65.58

第6表	A ₁	A ₂	A ₃	A ₄	B ₂	B ₂ '	B ₃	B ₄	C ₂	C ₃	C ₄	平均
深さ	0.18	0.52	0.42	0.33	0.24	0.26	0.46	0.29	0.34	0.33	0.43	0.34
標高(底)	65.93	65.56	65.69	65.76	65.94	65.91	65.70	65.86	65.81	65.82	65.73	65.79



第一平場獨立柱建物跡柱穴群



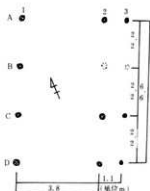
第8圖 第一・三・四平場獨立柱建物跡柱穴群

(3) 第二平場掘立柱建物跡 (第13図・写真第2図・航空写真全景)

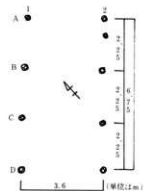
第二平場と西の第一平場の高低差は5mである。北・東・南側の夫々は崖状で平面形は台形である。標高は約61.5mで平坦部との差は約10mである。遺構で示される時代の形状については不明である。第一平場への登り道は確認されたが第三・四・五平場との関係は不明である。館に関連すると思われる掘立柱建物跡3棟と南端部柱穴列と方形溝1条がある。

第1掘立柱建物跡(Bg 18) (9図・7表) 梁列方位は北より東に24°だけ角度が偏っている。この建物は4.9×6.6m (2.72×3.6間)の広さである。身舎の桁行は2.2m (7.2尺) 梁行3.8m (12.5尺)である。廂は東面にあり桁行は身舎のそれと同じであり梁行は1.1m (3.6尺)である。東梁B₂B₃は第1土墳墓に切られているが伴出遺物はなく時期等の特定は出来ない。

第2掘立柱建物跡(Bi 15) (10図・8表) 梁列方位は北より47°だけ角度が偏っている。大きさは3.6×6.75m (1.7×3.75間)である。身舎の桁行は2.25m (約7.4尺)で梁行は3.6m (約11.9尺)である。廂は検出出来なかった。柱穴の平面形は方形が大半である。この建物においては上記第1掘立柱建物跡と同様に梁行が大きく、間取り等不明である。仮りに梁行間の中間の1.8m (約6尺)の所に梁列を考えれば、時期的特徴を指す事になるのだろうか。上記の第1建物とは梁列方位は異なりかつ建物の切り合い関係があるが、この2者だけでは前後関係を判断出来ない。又建物南端の柱穴のC₂D₂は方形の小溝(Ca 15)を設いだ形になっているが、この関係においても同様に前後関係を云々出来ない。



第9図 2-1建物



第10図 2-2建物

第7表	A ₁	A ₂	A ₃	B ₁	C ₁	C ₂	C ₃	D ₁	D ₂	D ₃	平均
深さ	0.52	0.34	0.21	0.50	0.34	0.58	0.04	0.52	0.51	0.15	0.37
標高(底)	62.08	62.06	62.16	62.20	62.21	61.97	62.32	61.89	61.92	62.30	62.11

第8表	A ₁	A ₂	B ₁	B ₂	C ₁	C ₂	D ₁	D ₂	平均
深さ	0.43	0.30	0.42	0.36	0.29	0.34	0.32	0.09	0.32
標高(底)	62.02	62.05	62.06	62.01	62.08	61.91	61.95	62.07	62.02

第3掘立柱建物 (Bf 09) (11図・9表) 梁列の方位は北より43°だけ角度が東に偏る。この建物は遺構図にては点線で示したが、建物として成立するかどうか不確実な内容をもつ柱穴配列であるが、建物として一応その規模を考えて見たい。前述の梁列方位よりは第2建物 (Bi 15)に類似であるといえる。大きさは2.4m (1.3間) × 5.75m (3.2間)である。身捨の桁行は南側のBC間CD間は2.0m (6.7尺)で等しいが北側のAB間は1.75m (約5.8尺)と短かい。梁行は1列と2列の間は1.5m (約5尺)で2列と3列は1.9m (約6.4尺)と後者が長い。これらの平均として桁行は約1.9m (約6.4尺) 梁行は約5.7尺 (1.7m)である。

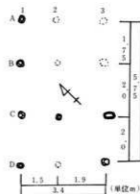
第9表	A ₁	B ₁	C ₁	C ₂	C ₃	D ₁	D ₃	平均
深さ	0.34	0.25	0.65	0.51	0.38	0.53	0.09	0.41
標高(底)	61.44	61.77	61.44	61.46	61.47	61.60	61.70	61.55

目隠堀と門跡と言われたもの (12図・10表)

各柱穴間の寸法は下図に示す通りである。配列の方位は1~5までは北より84°だけ東に偏っている。5~9までは北より75°だけ東に偏っている。9~11は北より61°だけ東に偏っている。6'は5~9にはほぼ平行で柱穴間隔に於いても方形を形づくる。6~11は第二平場でも一段低い場所に設けられている。

8はBh 100 第7土壌墓と近接位置にあり切り合い関係にある。この切り合いにおいて前述の建物同様墓塚が柱穴より新しいが、古い柱穴の年代については特定が難しく墓塚以前としか言いようがない。6~11と同一平面にある他の柱穴は5穴である。す

ぐ北側の一段高まった平場には7~11にはほぼ平行に配列している。これら1~11を堀の一部とするなら北側の柱穴列も同様な施設と考える事も出来、複数の使用時期があったろう事も考えられる。ここに北側の平場との高低差の関係をみると、1~5までは深さの最高5cmの小溝により隔てられているが、最高20cm平均10cmの高低差を有している。6~9は北側とは段により

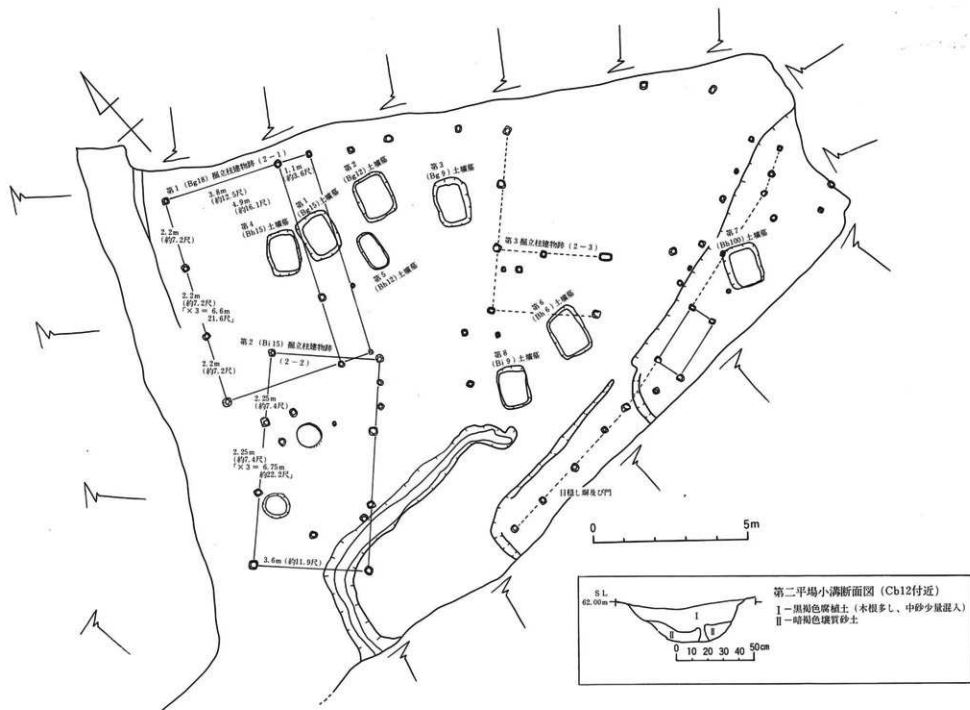


第11図 2-3建物

第10表	1	2	3	4	5	6	6'	7	7'	8	9	10	11	平均
深さ	0.48	0.42	0.48	0.39	0.22	0.48	0.46	0.40	0.75	0.26	0.34	0.48	0.23	0.41
標高(底)	61.13	61.20	61.12	61.19	61.11	60.77	60.65	60.79	60.44	60.93	60.70	60.51	60.64	60.86



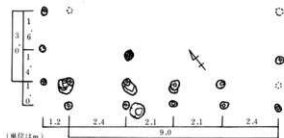
第12図 目隠し堀等



第13図 第二平場遺構圖

隔てられており、最高26cm、平均16cmの高低差を示す。西端は溝状になっているが北側の平地と同じ高さになる。全体的には東や南程低くなっている。調査時においてこの平地の南側が削り取られて崖縁が北に寄ったという考察がなされている。その規模や量については不明確である。館の施設や規模等を考えた場合にこれら柱穴列は家屋の一部であったのではという可能性も出て来る。

(4) 第三平地(8図・14図)
 巾5m長さ20m西端標高58.94m東端標高58.17m平均標高58.55mこの平地は第四平地と連なるもので調査地北側斜面の中段に造成されている。地山の状態は上記数値で示され東に傾斜



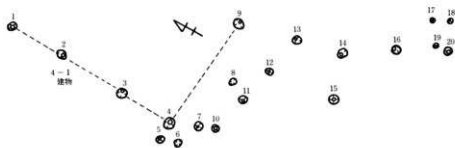
第14図 3-1建物

し第四平地とは幾分の段をもって接している。斜面上端の第一平地とは高低差8m、下方の第五平地とは7mの高低差がある。第一・第二・第五平地とのつながりは不明である。検出された遺構は柱穴列で館の施設の1つの建物のものであると考えられる。地山検出の状況と造成の過程を考慮すれば居住施設の可能性もある。その他施設としての可能性が平坦地との連絡路上という条件が加われば監視哨、見張り番詰所、門等の事が考えられる。広く色々な施設の可能性は考えられるにしても前述のごとく各平地との関係は不明であるので建物にともなう柱穴として状況をまとめる。掘立柱建物跡(Bd45X14図・11表)実測図についてはC列の柱穴は切り合いの関係にあり小さい方が大きい方を切っている。図に示したB₈は柱穴中に石を有する。D₈の直近の角にはC₂C₃で切り合い関係を有した柱穴と類似のものがある。この柱穴列を1つの建物とした場合の規模等については以下の通りとなる。桁行方位は北より東に40°だけ偏っている。4m×9m(2.2間×5間)の大きさで2面廂をもつ。身捨の桁行は2.4m(7.9尺)のものが両端に配され中2間は2.1m(6.9尺)である。梁行は西側廂に従うとすれば1.6m(5.2尺)と1.4m(4.6尺)の異なる間尺を有する形となる。B₆は1.0m(3.3尺)と狭少になっている。廂の角の部分にて桁行1.2m(4尺)梁行1.0m(3.3尺)の長方形を形づくると思われる。東側及び北側の廂については不明である。この様に1つの建物として見た場合、廂の部分を除いた柱間尺は推定の部分が多く、間取として柱を桁梁のそれぞれの交点に有したか否かも断定は出来ない。又切り合いの関係にある柱穴についてはこの建物の廂棟の柱穴の存在に意味がありそうで建替等については判断が難しい。いずれにしてもこの様な柱穴の残り方をしたのは基盤層又は地山まで掘り込んでいた為で造成地盤上の柱穴はその後の浸食等により削り消失した為であると思われる。以上の事は柱穴が斜面基盤上より検出された事実を解釈した結果である。

第11表	A ₁	B ₁	B ₈	B ₆	C ₁	C ₂	C ₃	C ₄	C ₅	D ₂	D ₈	D ₄	D ₅	D ₆	平均
深さ	0.28	0.11	0.02	0.09	0.16	0.52	0.26	0.16	0.20	0.28	0.33	0.15	0.20	0.34	0.22
標高(底)	58.52	58.72	58.73	58.39	58.76	58.34	58.58	58.58	58.50	58.74	58.70	58.77	58.81	58.47	58.62

(5) 第四平場(15図・12表・写真第3図)巾5m長さ20m、西端標高55.92m東端標高55.56m平均標高55.74m、この平場は第三平場にて述べた通り、小さい段と小さい凹地を経て第三平場と連らなっている。斜面上端の第二平場とは高低差約7m、第五平場とは約4mの高低差がある。各平場中平坦地や第五平場に近いこの平場がどの様な接点を有していたのか現有の資料よりはその結論を出し得ない。第二平場では南端の削刺及び崩落を想定しているがこの平場にも同様な過程の存在は充分考えられる。柱穴の確認された範囲は狭く配列は平場の延びる方向に雁行している。柱穴列の延長方向は崖になっている。図に示した柱穴列の内南北に伸びる1~4と9はこの平場にて幾分規則性の感じられるものである。1と2及び3と4の2柱穴間の長さは1.8m(6尺)であり、2と3の柱穴間の長さは2.2m(7.3尺)、4と9の柱穴間の長さは3.8m(12.7尺)である。1~4と4・9の列はほぼ直角を成す。1~4を深列とする建物が存在したとすると調査時においてこの建物を9~1の方向に切っていた第四平場縁はもっと北側に膨らまなければならない。膨らんでいた時点で下の第五平場は同じ様な形状をしているかそれに近い状態ではあったろう。又上の第四平場の崩落等があれば第五平場への堆積がある。以上の観点で第五平場の形状を見ると、延長方向の北部で東に膨らむような形状を呈している事が注目される。この事をもって直ちに崩落の証拠とする事は出来ないが、第五平場の溝の埋土土層断面等考慮すれば前述の平場の膨らみそしてその上への建物の存在が現実味をもって来る。

現状における形状の把握が充分に行なわれ得ない状態において更に過去における形状の推定復元する事の問題点を解析して、より正確な変化過程を明確にしてゆく事が今後の課題になる。



第15図 第四平場柱穴群

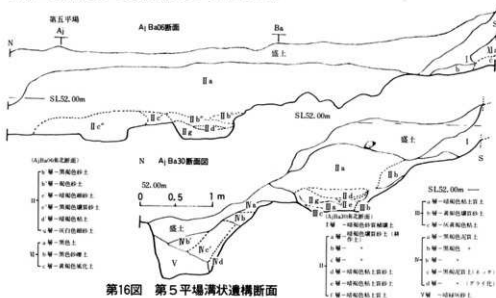
第12表	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	平均
深さ	0.52	0.58	0.56	0.21	0.17	0.30	0.26	0.33	0.46	0.40	0.21	0.28	0.37	0.48	0.30	0.07	0.13	0.27	0.33	0.33
標高(底)	55.31	55.31	55.37	55.78	55.81	55.67	55.54	55.14	55.52	55.44	55.36	55.22	55.20	55.22	55.27	55.43	55.38	55.35	55.27	55.40

(6) 第五平場 (遺構配置図・写真第1図航空写真全景等)

当調査地の北側最下段の平場とした所である。標高約52m平坦地と約1mの高低差を有す。東西長約80m、巾は最大10m狭い所でも約4m程ある。第四平場で述べた北への膨らみはBa18地点にて始まり、突端部はAh03近くになる。この地点より東部は平場縁が南へ方向を転じ道路に接する。この道路はBg109付近標高52.43mにて調査地の南縁を形取るように第二平場南端の崖下を通りながら第一平場南西崖下を標高を63.70mまで増し走っている。第五平場の南端は地形図にて示される通り、調査地南東部に収束している。西端は第2図地形図北西部にあたるが切土が行なわれているので不明である。この切り取り部は第三平場及び第一平場北西部及び西部の構造と関連をもち調査地の立体構造を解明するための重要な部分であったと思われる。この平場では遺構配置図及び第2図大断面図で示したごとの溝が検出された。

第五平場大溝 (遺構配置図・16図・写真第1図)

長さ約50m、最大巾約1.8m、最小巾約0.7m、平均巾1.5m、深さは遺構確認面より約0.2~0.4m平場地表面よりは約1.2mである。平場の南側の崖裾に沿って西から東に走るもので、平場の膨らみに沿って北側に曲った後は南下して第四平場第二平場の裾を取り囲む形で大きく彎曲し東端の水路に接する。調査区域Ba30付近の南北土層断面よりの埋土及び近傍の状況は、表面が盛土に覆われておりその下に耕作土がある。この耕作土下の埋埋土は粘土質が大半である。溝の掘られた地盤は、部分的に盛土(表面のものとは異なる)し造成されたと思われる個所がある。表面の盛土として区分したのものには崩落土が含まれると思われ、埋土遺物の近世以降の陶器片より平場面の新しさがうかがわれる。



第16図 第五平場溝状遺構断面

Ⅲ 第二平場の検出遺構（遺構配置図・第13図・写真第1図航空写真・第2図平場全景）

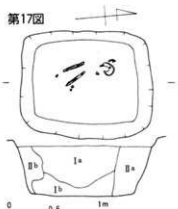
第二平場に於いては前出の掘立柱建物跡と小溝及び土墳墓8基が検出されている。この8基の土墳墓は前述の通り掘立柱建物柱穴を壊して作り柱穴間尺を狂わしていた事より発見されたという経緯があるが柱穴との切合を示す例は少い。土墳墓8基については以下の通りとなる。尚遺体については萩荘・館下長泉寺本堂に現在は葬られている。

第1土墳墓（Bg15）（17図・写真4図）「同平場第1掘立柱建物跡の柱穴を破壊した墓」
 平面形は正方形に近い方形を呈している。遺体として、土墳墓の北側から、頭蓋骨（下部）、歯・大腿骨のそれぞれ一部分が残存している。大腿骨のそばには古銭（寛永通宝でその内2枚には背文を持つ新寛永である）が3ヶ所に分かれ計8枚置かれている。埋葬には木棺が使用され、鉄釘45本、金具9個が確認されている。釘には棺の木質部が僅かに付着残存しているが材質は判別出来ない。金具としては、飾りと蝶番状の部分と思われる。副葬品としては前述の古銭の他に頭蓋骨の右耳のそばに煙管が1つ検出されている。この煙管には僅かにラウの竹管が残っている。雁首と吸い口は銅製で腐食している。雁首は銅板をかきしめて管状にし火皿部に填込んで成型してあるが管状部には割れ目が見える。ラウも2つに割れている。埋土の状況からは棺を埋葬した後に周囲に土を埋め更に土を被った様子がうかがわれる。埋葬後に棺は崩壊し被覆土が更に崩落し盛土が流入している。崩落流入は短時間に行なわれた様である。残存している土墳墓の内では一番深い残り方をしている。尚古銭について補うなら、8枚の内1枚は開元通宝であった。又上場寸法は $1.45\text{m} \times 1.20\text{m}$ 、下場寸法は $1.15\text{m} \times 0.95\text{m}$ 、深さ 0.6m である。断面土層については、Ia層（10Y R 3/4 暗褐色）砂質土・Ib層（10Y R 3/3 暗褐色）砂質土・IIa層（10Y R 3/3 暗褐色）砂質土「黄橙色土ブロック状」・IIb層（10Y R 3/3 暗褐色）砂質土「IIaの基質部少い」

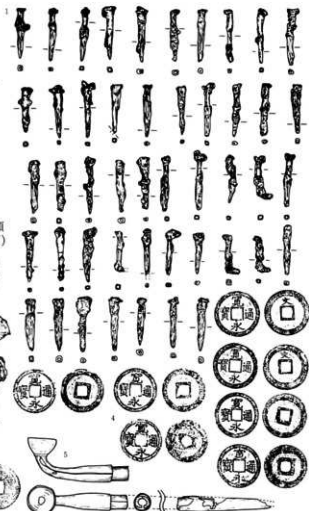
第2土墳墓（Bg12）（18図・写真4図）

平面形は長方形に近い方形を呈している。上場寸法は $1.05\text{m} \times 1.15\text{m}$ ・下場寸法は $1.25\text{m} \times 0.95\text{m}$ ・深さは 0.6m である。墓壇の方位は北から 18° 程東に偏っている。遺体としては、頭蓋骨及び大腿骨が残存している。副葬品としては、寛永通宝8枚が土墳墓中央部から南側にかけて出土している。頭蓋骨の近くより毛抜きが検出されている。記録にては数本の釘が残存している。埋土の状況からは、棺全体を同一の土で被い、更に盛土してあった事がうかがわれる。北側には地山の崩落土が見られる。尚古銭について補うならば8枚とも古寛永と思われる。断面土層については、層名と内容が第1土墳墓と一致しているので上記の説明を参照いただきたい。掘込み面から断面図Ia層上面までの土層については不明である。

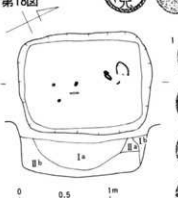
第17図



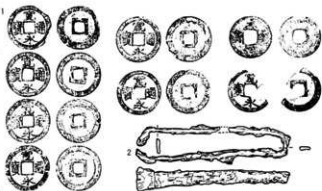
第1土壇墓 (Bg15) 1・2. 鉄器類
3・4. 古銭 5. 煙管 (銅)(S $\frac{1}{2}$)



第18図



第2土壇墓 (Bg12)
1. 古銭 2. 鉄製毛拵 (S $\frac{1}{2}$)



第3土墳墓 (Bg 09) (19図・写真5図)

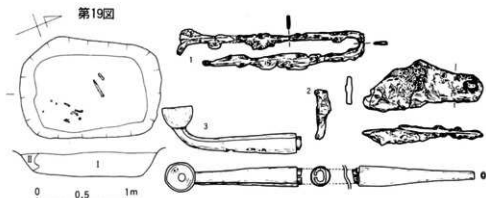
平面形は長楕円形を呈する。上場寸法は1.55m×1.1m、下場寸法は1.20m×0.85m、深さは0.35mである。墓墳の方位は北から20°程東に偏っている。遺体は僅かに大腿骨が残存していただけである。副葬品としては、煙管、古銭8枚、毛拵がある。鉄釘と金具様鉄製品(種別不明)も僅かに残存している。これら副葬品はほぼ北側の隅にまとまっている。煙管は第1土墳墓と同じような細工であるが雁首の部分は幾分長い又、吸い口部も残っている。古銭は1枚が背文を有する新寛永であり字も細い、他7枚は微妙な違いが感じられるが古寛永である。埋土はほぼ一様に南壁側に地山の崩落土が見られる。断面土層については、I層(10YR $\frac{3}{3}$ 暗褐色)砂質土「II層類似物少量含有」、II層(2.5Y $\frac{4}{4}$ オリブ褐色)砂質土「地山類似」「I層類似物含有」と以上である。

第4土墳墓 (Bh 15) (20図・写真5図)

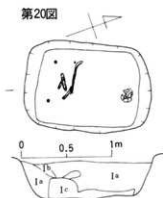
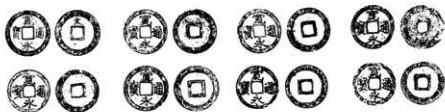
平面形は長方形に近い方形である。上場寸法は1.50m×1.00m、下場寸法は1.15m×0.85m・深さは0.50mである。墓墳の方位は、北から20°程東に偏っている。遺体は北側壁際に頭蓋骨・歯・南側に大腿骨が残存している。これら遺骨の残存量は本調査地にては多い方であるが遺体の性状を推測するに足る量ではなかった。副葬品として古寛永通宝が7枚添えられている。寛永通宝のあるものは表面の字が小振りであり、裏面の縁は表面のそれより巾広になっており、幾分直径も大きめである。他のものでは表面の字が肉太になっているものもある。埋土の状況からは次の事が言える。鉄釘が少量残存していた事より棺を使用し埋葬したと思われる。棺全体を被う形で一様な土が被せられその上に掘り上げた地山質の土で更に覆った。棺の崩壊とともに崩落が起り被覆土が埋積した。埋土中の小部分は植物の根の作用を受けている。断面土層については次の通りである。Ia層(10YR $\frac{5}{6}$ 茶褐色)砂質土、Ib層(10YR $\frac{3}{4}$ 暗褐色)砂質土、Ic層(10YR $\frac{4}{6}$ 褐色)砂質土、Id層(10YR $\frac{2}{2}$ 黒褐色)砂質土。

第5土墳墓 (Bh 12) (21図・写真5図)

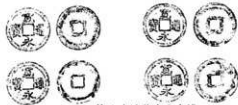
平面形は長楕円形を呈する。上場寸法は1.30m×0.65m、下場寸法は1.20m×0.55m、深さは0.30mである。墓墳の方位は北より約3°東に偏っている。遺体は頭蓋骨と大腿骨が残存している。この頭蓋骨は墓墳南側に位置している。歯も少量残存している。調査時の観察にては棺を使用せずに埋葬したのではないかという推定がされている。副葬品としては毛拵が1個添えられている。埋土の状況については次の通りとなる。断面土層は、Ia層(10YR $\frac{3}{3}$ 暗褐色)砂質土「(10YR $\frac{7}{6}$ 明黄褐色)砂質土がブロック状に混じる」、Ib層(10YR $\frac{3}{3}$ 暗褐色)砂質土「Ia層より混在質少ない」となるが、Ib層の断面形が遺体の埋葬状態を反映しているとすれば、掘り上げた土を遺体に一様に被い埋葬したが崩落の過程で遺体の下側に被覆土が入りこんだという事になるであろう。遺体を入れた棺等があれば上記の被覆土が入り込むという事が無いと思われる。



第3土壙墓 (Bg09) 1. 鉄毛抜 2. 鉄製品 3. 銅製煙管 4. 古銭 (S₄与)



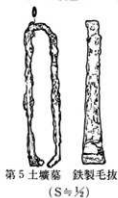
第4土壙墓 (Bh15)



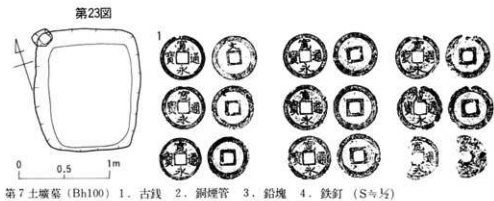
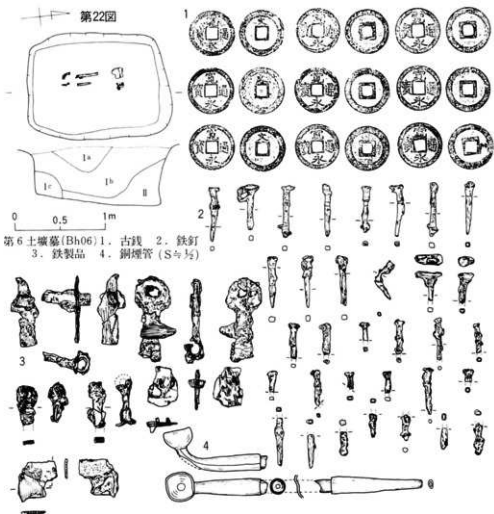
第4土壙墓出土古銭
(S₄与)

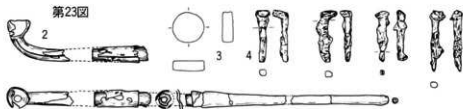


第5土壙墓 (Bh12)



第5土壙墓 鉄製毛抜
(S₄与)



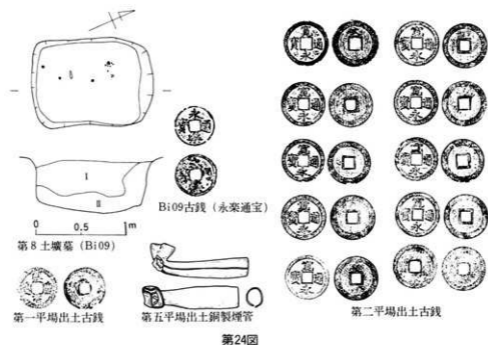


第6土壌墓 (Bh 06) (22図・写真6図)

平面形は長方形に近い方形である。上場寸法は $1.60\text{m} \times 1.20\text{m}$ 、下場寸法は $1.40\text{m} \times 0.95\text{m}$ 深さは 0.70m である。墓壇の方位は北から 3° 程東に偏っている。遺体は頭蓋骨・下顎骨・歯・大腿骨等が存在している。頭蓋骨等は東を向いている。副葬品は寛永通宝9枚と煙管1本である。寛永通宝の3枚は背文があり他は古寛永である。この古銭は下顎骨の左下より検出されている。煙管は第1土壌墓で述べたような細工がしてある。雁首の金属部分は短い方である。火皿部は長方形に近い形を呈している。木棺に使用した飾り具、釘等も残存している。これらには木質部が付着しているが材質は判別出来なかった。埋土の断面上層のそれぞれは次の様になる。Ia層(10YR 5/8 黄褐色)砂質土「暗褐色砂質土混在」、Ib層(10YR 5/8 暗褐色)砂質土「暗褐色砂質土混在Ia層より多い」、Ic層(10YR 5/8 黄褐色)砂質土、II層(10YR 3/3 暗褐色)砂質土「Ic層ブロック混在」以上の状況より考えられる事は棺を埋葬する時南側には深部より掘り上げた土を入れ、その上を掘り上げ泥土にて一様に被って盛土をしたという過程である。その後の崩壊、崩落により断面に示される様な状態になったと思われる。

第7土壌墓 (Bh 100) (23図・写真6図)

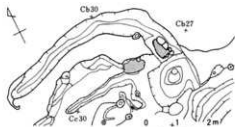
平面形は南側が丸味を帯びた長方形を呈する。上場寸法は $1.35\text{m} \times 1.15\text{m}$ 、下場寸法は $1.15\text{m} \times 0.90\text{m}$ 、深さは 0.65m である。墓壇の方位は北から 16° 程東に偏っている。遺体は小骨及び歯が僅かに残存している。副葬品としては寛永通宝9枚と煙管1本が添えられている。寛永通宝のうち1枚は字が肉細の直径は幾分大きめの背文を有するもので、他の8枚は古寛永である。煙管の細工は前述の通りであるが、この墓壇のものは吸い口部分が長い。尚この墓壇底面よりは鋭利様の形状を呈す鉛と思われるものが出土している。表面は鈍い白色の粉状の錆によって覆われている。この物体の直径は約 16.9mm 、高さは約 5.7mm 、以上より体積は約 1.2cm^3 、重さは約 11.37g であるからこれらの数値より求められる密度は約 9.6g/cm^3 となる。この密度の値は鉛の密度 (11.3g/cm^3) より小さいが、計測状況等考慮して一応鉛とする。この鉛がどの様な意味で存在するのかについては不明である。埋葬に際して使われたと思われる木棺の鉄釘4本が残存していた事を付記しておく。この遺構は第二平場目隠堀と考えられる柱穴群の1つを北西隅において切っているのでこの土壌墓は柱穴より新しい事がいえる。



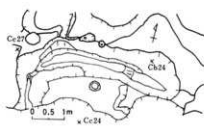
第8土墳墓 (Bi 09) (24図・写真6図)

平面形は長方形の方形である。上場寸法は $1.35m \times 0.95m$ 、下場寸法は $1.15m \times 0.9m$ 、深さは $0.65m$ である。墓墳の方位は北から 24° 程東に偏っている。遺体は歯と小骨片が残存するのみである。副葬品としての古銭は永樂通宝が14枚である。腐食が激しく拓影及び写真撮影は少数に停めた。11枚は 銭と思われる。木棺に使用した鉄釘が数本残存していたが破片にて実測等は実施しなかった。(第1から第8土墳墓までの木棺の釘は角釘であった事を付記しておく。)埋土の断面土層のそれぞれは次の様になる。I層(10Y R 4/4褐色)砂質土、II層(10YR5/8黄褐色)砂質土。埋葬状態としては棺の北側及び棺をII層の土で覆い更にI層の土にて盛土したものが、棺の崩壊及び被覆土の崩落により断面に示されるような状態になったと思われる。

第二平場の土墳墓は以上8基であり、第1土墳墓と第7土墳墓は他の遺構を切っている。これら土墳墓の時代を副葬品より推定すると以下の通りになる。第1・3・6・7土墳墓は新寛永の出土より寛文8年西暦1688年以降のものである。中でも第1土墳墓には開元通宝も併っている事から、寛文11年西暦1671年の使用禁止令以前と限定する事も出来そうである。その他墓墳の方位より(第1・5・6土墳墓)(第2・3・7土墳墓)(第8土墳墓)と3つの傾向がある。又、形状より(第1・2・7・8土墳墓)(第3・4・5土墳墓)(第6土墳墓)と三型態に区分出来る。2事項とも共通なのは第2と7土墳墓である。被葬者については不明である。



第25図 C b33溝・C b30焼土



第26図 C b27溝

第13表	1 区		2 区		3 区		4 区		5 区		
	1	2	1-5	1-5	1-4	2-1	2-2	4-1	3-1	1-3	
第14表	平場	4.5PC	5.5PC	6.5PC	6.5PC	7.5PC	7.5PC	8.5PC	11.5PC	12.5PC	12.5PC
	堀	1-5	3-1	2-3	1-5	1-3	1-4	2-3	4-1	1-1	2-1
第15表	方位	W-(40°-20°)-N	W-(20°-0°)-N	N-(0°-20°)-E	N-(20°-40°)-E	N-(40°-60°)-E					
	建物	1-5	3-1	1-2	1-3	1-1	4-1	1-4	1-5	2-1	2-3

第13表 建物身倉平面形分類表 第14表 建物身倉寸法表 第15表 建物(堀)方位表 (平場-建物)

N 第一平場の検出遺構(遺構配置図)

平場南東部の竪穴住居跡2棟、竪穴状遺構1、溝3条、焼土遺構1について以下に述べる。この区域は平場造成や第一平場と第二平場の接点として又自然宮力等により境変が大きい。

【1】(1) Cb33溝(25図・写真2図第1竪穴住居跡遠景中左側、同9図)

東西長約4.5m、南北長約2.0m、深さ約15cm、南東端をCb30焼土遺構の石組で切られている。溝の東側の部分は南側斜面に落ちる。残存形よりその性格は判定し難いが、単独な溝でなく、竪穴住居跡の周溝であったものが、周囲の壁を削られて残存形を示しているとも考えられる。この推定の住居跡の全容はどんなものかそれぞれの施設はどれか等以下に続く遺構の状況説明と合せ考えて見よう。

(2) Cb30焼土遺構(25図・写真9図及び10図)

地山を掘り下げた楕円形のもので、周囲の壁は硬く焼け、中には厚く木炭の堆積が見られる。そのすぐ東側にCb33溝を切る石組がある。この石組は東側と南側に河原石7個をまわし55×80cmの長方形のビットとなっている。又この長方形土壌の南に隣接して1.2×1.5mの楕円形土壌がある。これらの遺構について前述のような住居跡の施設として見るならば、焼土土壌、カマド、貯蔵穴とそれぞれ位置づけもできそうに思われる。この様な仮定に加えるに石組の東1.2mの所に小土壌があり、深さは16cmと浅いが、石組底より標高は高い。この小土壌が煙出し部であると考え事も出来そうである。

(3) Cb27溝(26図) Cd33溝(写真10図)

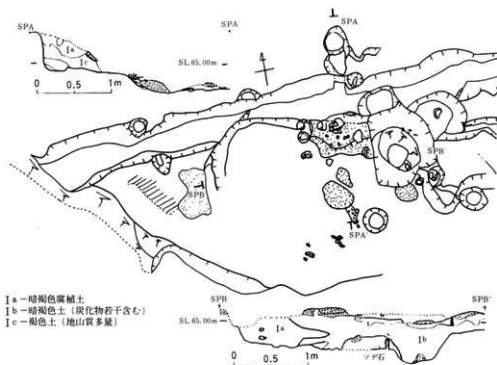
Cb24付近よりCc27に向け低くなり、Cb30焼土遺構関連貯蔵穴の南側で南へ方向を転じている。東西長5m、南北長1.5m、最大深さ70cmで全体形は舟形をしている。南へ方向を転じなければ第一竪穴住居跡を切るCd33溝に接続すると思われる。このCd33溝の平均の深さ

は22cmである。東西長約5.0m、巾平均約0.5mではほぼ直線状に延びている。この項で述べた溝中で最も溝らしい。以上の遺構埋土より土師器片少々を出土し時期的には他の遺構と同時に思われる。これら遺構の間には柱穴が数個あるが建物として識別出来なかった。

【2】竪穴住居跡

(1) 第1竪穴住居跡 (Cc33) (27図・写真7図)

平面形は南半分が削られているが一辺約2.5mの方形を呈する。残存する北壁すらCd33溝によって切られている。貼床・周溝の有無は不明である。柱穴は床面中央及び東側に見られるが伴うものか否か不明である。前述の北壁中央にはカマドが設けられている。煙道はCd33溝壁に口を開けている。この溝の底部高と煙道底高は等しいと思われる。竪抜き煙道は地山部の煙出し直前で崩壊している。カマド袖には河原石が使用されている。天井部まで石を使用したか否かは不明である。燃焼部から床の中央部にかけて焼土が堆積している。焼成部の焼土には土師器片や炭等が混入している。燃焼部より煙道部へは低い段差を持ち移行し煙出し部は10cm程低くなっている。煙道は北側に高く長さは約90cm、カマド軸はN6°Eの方位である。北東壁際には大きき60×70cmの貯蔵穴があり深さは表面より約20cmである。この貯蔵穴には遺物を伴う。

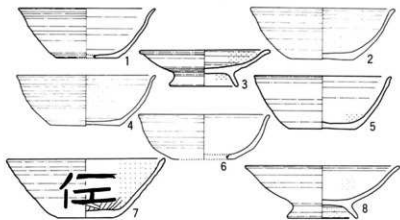


第27図 第1竪穴住居跡 (Cc33)

〔出土遺物〕 住居跡において残存しているのはカマド付近であり、その周辺には多くの遺物が出土した。状況の1例として、カマド西側の伏せた甕の中に杯の上に重ねられた高杯があった事を記す。土師器が大半を占め須恵器等若干出土している。種別及び内容・出土位置等は一覧表にて示し特徴ある事項のみ特に記述した。

土師器：杯（完形・実測出来る物8・破片4・小破片27片）（28図1～8写真7図1～7）埋土遺物も含めて表示してある。ロクロを使用し底部切離しは回転系切による。切離し後の調整はなく、幾分手を加えているのが28図2の杯である。この杯と同図3の高杯が重ねられ出土したが、高杯は同図4と胎土大きさ等類似性を有する。高杯が杯の蓋の役割をもつ可能性も考えられる。これら図2と4の内側には漆が付着している。同図7の埋土遺物に一部不鮮明ではあるが「任」と判読できる墨書が認められる。以上の杯の大半の胎土中に石綿様の物質を含有している。この物質は硬くてもろいが、熱した場合は赤熱するだけで何等変化を見せない針状の物である。

第16表	図番号	写真番号	出土位置	口径cm	底径cm	器高cm	胎土色調等	備考〔成形・調整・形態等（cm）は推定値〕	
Cc 33 竪穴住居跡 関連 出土 遺物	杯	28-1	7-3	床面	13.9	(6.5)	5.1	曹 5 Y R 6-6 樽	内里・外反・回転系切・口縁下段状・黒斑
	杯	28-2	7-6	カマド袖	14.3	6.4	5.3	曹 7.5 Y R 6-2灰 樽	内里・回転系切有調気味・石綿様含有・漆付着
	土台杯	28-3	7-1	＝	13.4	7.0	3.7	曹 2.5 Y R 6-8 樽	回転系切切 一 強外反・石綿様含有・内外黒斑
	杯	28-4	7-4	カマド内	14.2	7.0	5.2	曹 5 Y R 6-2灰 樽	内里・回転系切無調・石綿様含有物・漆付着
	杯	28-5	7-5	カマド内	14.0	6.8	5.4	曹 7.5 Y R 7-3 樽	内里・回転系切・直口・石綿様含有物
	器	28-6	＝	＝	13.4	6.6	4.6	粗 2.5 Y R 7-6 樽	内里
	土台杯	28-7	7-7	埋土	16.0	5.5	6.0	曹 10 Y R 8-3浅黄樽	内里・回転系切無調・石英含・墨書（任）
	台杯	28-8	7-2	埋土	15.8	7.2	5.4	曹 7.5 Y R 7-6 樽	内里・回転系切切 一 石綿様含有物・台内黒斑
杯	29-5	7-8	カマド袖	11.2	9.0	22.8	粗 7.5 Y R 8-4浅黄樽	口縁部積ナデ・頸18.8cm 胴21.5cm・磨耗	



1：床面出土 2・3：カマド袖
4～6：カマド内 7・8：埋土

第28図 第1竪穴住居跡（Cc33）出土遺物（Sキタ）

：甕(実測及び推定図化出来るもの3・破片6・小破片52片)(29図1～5・17表)

出土物のうち遺構伴出と認められるものはカマド西側に伏せて立ててあったもののみで、他は遺構各部よりの出土であるが伴出条件を満たすという確証の少ないものである。床面出土のものが貯蔵穴のものと接合した例はある。口縁破片よりはロクロ使用のもの4片認められるが他はロクロ不使用や摩滅により不明のものである。杯と同様に大半のものに石綿様含有物がある。

須恵器：杯(推定図化したもの3・その他破片10数片)(29図7～9・17表)

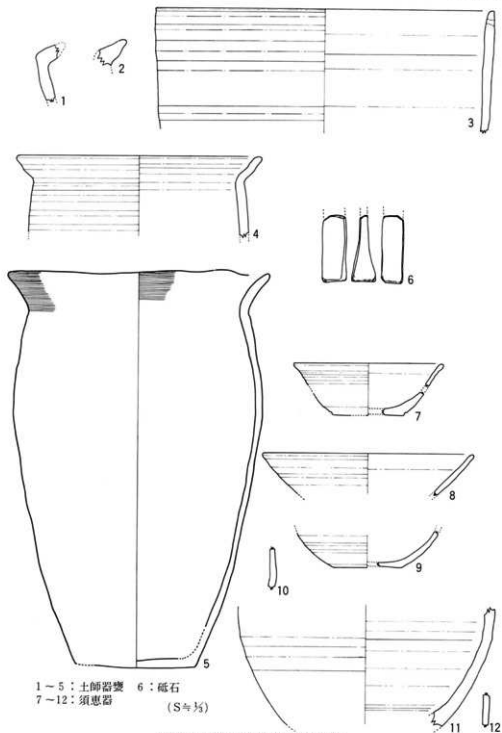
出土数は少く埋土よりの出土である。29図7の各値は底部と上半部より推定復元して算出したものである。同図8は口径が大きい浅い器形になると思われる。同図9は住居跡西側の出土物と接合したものである。他に破片ではあるが焼成の大変悪い遺物が埋土より出土している。

：壺(3個体?)(29図10～12・写真7図9～11・17表)

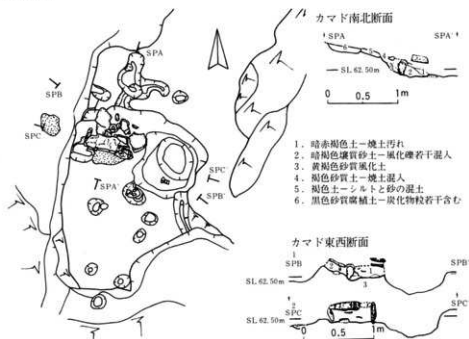
29図11は長頸壺の下部と思われる。同図12は自然軸と思われる物が附着している。

第17表	図番号	写番	出位	土質	遺存部	胎土色	調	焼成	備考「成形・調整・形態・含有物等・(C*)推定値」
Ce	杯	-	-	貯蔵穴	底部	普7.5 YR 5/6 鈍橙	普	内黒・回転糸切無調・	
		-	-	"	底部	普7.5 YR 5/6 灰褐	"	内黒・回転糸切・細い雲母片を含む・台割離	
	土	-	-	床面	底部	粗2.5 YR 5/6 橙	"	表面摩耗・赤変・内面7.5 YR 5/6 橙凹凸・体部摩手	
		-	-	埋土	口底部	普7.5 YR 5/6 灰白	不良	非内黒・回転糸切無調整・底部境界明瞭	
	壺	29-1	7-13	床面	頸部小片	普2.5 YR 5/6 淡黄	"	厚手・摩耗・石綿様含有物含む	
		29-2	7-14	埋土	口縁	普10 YR 5/6 浅黄橙	"	ロクロ引外桶口縁・厚手・石綿様含有物 (11径13.5)	
	住居跡	29-4	7-15	"	"	普10 YR 5/6 "	"	ロクロ引・弱外反口縁・内外桶ナデ(口径20.2)	
		29-3	7-12	"	"	普10 YR 5/6 "	"	ロクロ・直口・穴明き・石綿様含有物(口径28)	
	陶器	-	-	床面	"	粗7.5 YR 5/6 鈍橙	"	小型・口縁小巾外反・石綿様含有物・貯蔵穴片と接合	
		-	-	"	口底15片	粗7.5 YR 5/6 橙	"	外反欠損	
須恵器	-	-	貯蔵穴	口縁	粗7.5 YR 5/6 鈍橙	普	非ロクロ・厚手・岩綿様含有物		
	-	-	埋土	口縁小片	普7.5 YR 5/6 鈍橙	普	ロクロ・内彎気味		
土須	29-7	8-13	"	口底	普2.5 Y 5/6 灰白	"	回転糸切無調・外反・外面黒変(口12.4)底(5.9)高(4.3)		
	29-8	8-14	"	口縁	普2.5 Y 5/6 黄灰	"	ロクロ・内面摩耗(口径17.5)		
遺物	29-9	8-15	"	底部	普2.5 Y 5/6 黄灰	"	回転糸切無調・焼土3下及びCe33～30と接合(底5.6)		
	29-11	7-10	"	体部	精5 Y 5/6 灰	良	ロクロ・断面色調10 YR 5/6 灰黄褐・Cb36片と接合		
器	29-12	7-11	"	小片2			2.5 Y 5/6 黒褐体部片ロクロ印目・5 YR 5/6 黒褐片ロクロ自然軸		

Ce 33 貯蔵穴住居跡陶器遺物	第18表 (別表以外)破片数	土器杯()内黒()両黒「」他			土器壺			焼土木炭	
		口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部	床面	床面
	埋土	(18)《2》「2」	(24)「1」	(7)		10	3	床面一 カマド南及 貯蔵穴南	床面一 カマド南の 2ヶ所及び 中央部に材 2ヶ所
	床面	(4)《1》「2」	「3」	「2」		1	2		
	煙道	(2)	(1)			2			
	カマド		「2」			11		カマド一 内部	
	貯蔵穴	(9)				16	6		



第29図 第1 竪穴住居跡出土遺物



第30図 第2 竪穴住居跡 (Ce24)

(2) 第2 竪穴住居跡 (Ce24) (30図・写真8 図及び9 図)

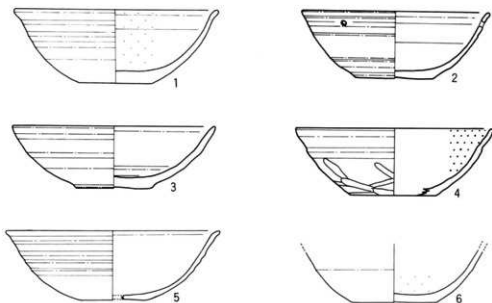
第2 平場の西端部に位置するが第1 竪穴住居跡との関係でこの項で扱う。第2 平場から第1 平場への登り道が当住居跡の北東隅近くにあり、北西から南側にかけては傾斜が急になる。平面形としては北東隅を残すのみであるが一辺約2.8 m前後の方形と思われる。貼床・周溝については不明であるが、貯蔵穴の南側そばより周溝らしきものは存在する。貯蔵穴の大きさは径約80cm、深さは床面より25~20cmとなる。これの埋土は南側より堆積したと思われる。黒色砂質腐植土が焼土や炭化物粒を混在させて南半下部に位置しその上の北半に黒褐色含礫土が堆積している。貯蔵穴埋土よりは遺物も出土している。遺物の多く出土しているカマドは袖も天井部も石で構築されているが大半は河原石による。カマドの東西断面2に示されるように石は熱を受け天井部の東・西袖の内側にて割れている。カマド南北断面にて浮いた形で表わされているものは天井石である。東西断面2のカマド内に太い線で示されている物は大きな須恵器下半部の破片である。東西断面1には内黒杯底部と小型土師器甕の口縁部が示されている。完形杯のそばにある煙出し部に近い位置の石は地山礫である。煙道部煙出部は残りが悪いため不明であるが煙道部は南側が低く、煙出し部は煙道より幾分低く掘り下げられているようである。上屋構造を支える柱穴については床面に示されているものすべてが概当するかどうか不明な点として残る。尚煙道の方位は北より19° 東に偏っている。

〔出土遺物〕 第1竪穴住居跡と同様にカマド周辺が残存しその周辺に多くの遺物が出土した。土器のみで鉄器類その他は出土しなかった。出土状態の例としては、カマド袖内にはほぼ完形の内黒杯がふせてあったのとそばに須恵中甕の体下部破片があった事である。全体の比率上から土師器甕の出土は多い。住居跡に伴う遺物を識別する際は遺構外のものとの関連を留意したが第1竪穴住居跡の例の様に遺構外の遺物と接合するものは見い出されなかった。

土師器：杯（完形及び推定図化5・破片1・その他27）（31図・写真8図1～4・19表）

31図1は写真8図出土状況及び同図1で示される完形に近い杯である。同図3は一對の確認は出来なかったか補修孔と思われる穿孔が見られる。埋土遺物の同図2は口径に比して器高が低い。埋土遺物の同図4の杯は底部から体下半にかけて不明瞭ながら不定方向のヘラミガキを施し、回転糸切底も磨いた様である。

第19表	図番号	写真番号	真位	出土土質	口径cm	底径cm	器高cm	胎土・色調等	備考(成形・調整・形態等・cmは推定値)
Ce 24 土 住 居 跡 遺 物	杯	31-1	8-1	カマド	14.5	5.4	5.2	粗 7.5 YR 7/2 浅黄橙	内黒・回転糸切無調・漆付着「完形」
	杯	31-2	8-2	ピット1	(13.5)	5.6	4.8	普 5 YR 7/2 橙	内黒・回転糸切無調・補修孔・石綿様含有物
	杯	31-4	8-4	埋土	13.7	(6.0)	4.9	普 7.5 YR 7/2 橙	内黒入念・クロク切磨不明・外面有段様
	杯	31-3	8-3	埋土	14.5	5.5	4.5	粗 7.5 YR 7/2 浅黄橙	非内黒? 磨耗・石綿様含有物
	杯	31-5	-	貯蔵穴	15.3	4.8	5.0	粗 7.5 YR 7/2 橙	内黒・回転糸切無調・薄手・石綿様含有物



第31図 第2竪穴住居跡出土遺物杯 (S₄ 1/2)

：甕（推定図化6・破片1・その他小破片24・第20表・32図1～6）

出土は破片が多い。遺構30図東西断面に示されてある破片は32図3・4であるが3は表示した様に非ロクロ成型で口唇部は一部平らである。4は薄手で2次的に熱を受けてか赤変している。同図1は煙出し部の遺物であるので伴出と見なし難い物である。同図6は大きさの点で4に似ている。この6は貯蔵穴の破片と埋土の破片が接合した例であるが、胎土に比して成型仕上げは良好である。同図2は6と同様に仕上げだけは良好である。以上6点の口縁部破片中にロクロ成型が確認されたのは4点である。その他破片にては同一個体と見なせるもの他の表と同様に何個でも1点としているので表示の数値は小さ目に出ている。

須恵器：杯（図及び写真は割愛・20表）

出土は極少数で埋土に口縁片1片と小土塊1の底部1だけである。口縁部は第1竪穴住居跡出土のものによく似ている。底部も第1竪穴住居跡の29図9に似ている。

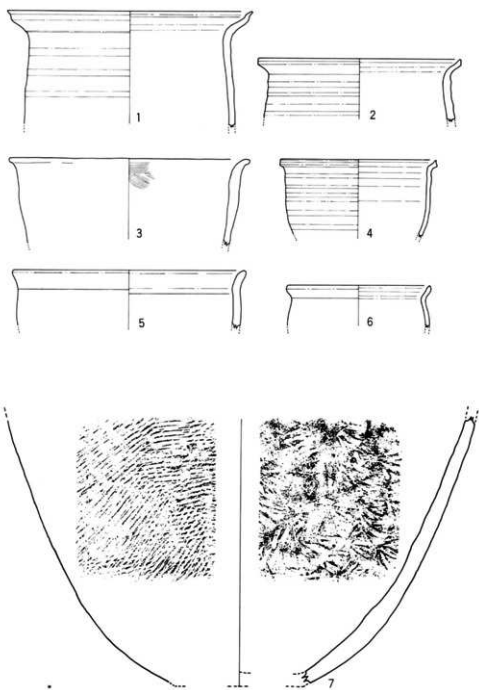
：甕（推定図化1点・その他1）（32図7）

図7は前述のカマド内のほぼ完形な杯のそばに出土した破片を接合して図化したものである。カマド内に出土した割には2次的に加熱されたようには見えない。

以上の出土遺物のうち、調整痕を有する杯について、再検討の余地がある。

第20表	図番号	写真 番号	出土位置	遺存部	胎土色	調焼成	備考(成形・調整・形態・含有物等・(C#)推定値)	
Ce 24 竪 穴 住 居 跡 間 連 出 土 遺 物 患 器	環	32-6	8-12 カマド	底部 $\frac{1}{2}$	普 10YR $\frac{1}{2}$ 灰黄褐	普	内里・回転糸切無調・2次受熱・石綿様含有物(6.2)	
	土	32-3	4-7 カマド	口縁部	粗 10YR $\frac{1}{2}$ 鈍黄橙	＃	非ロクロ・外反不整形口縁・石綿様含有物	
	要	4-4	4-9	＃	普 10YR $\frac{1}{2}$ 鈍黄橙	＃	ロクロ・複式口縁・石綿様含有物	
	24	4-1	4-6	煙出し部	粗 10YR $\frac{1}{2}$ 浅黄橙不良	＃	ロクロ・外反引き出し口縁・石綿様含有物極少	
	竪	4-6	4-11	貯蔵穴	＃ 10YR $\frac{1}{2}$ 灰黄褐	普	ロクロ・内彎口縁・石綿様含有物極少・石英目立つ	
	穴	4-5	4-10	ビット1	＃ 10YR $\frac{1}{2}$ 浅黄橙	＃	非ロクロ・摩耗	
	住	4-2	4-8	埋土	普 10YR $\frac{1}{2}$ 灰黄褐	＃	ロクロ・複式口縁・内面に褐色物付着・石綿様含有物	
	居	-	-	カマド	下体部	粗 5YR $\frac{1}{2}$ 鈍赤褐不良	＃	不整形・摩耗
	跡	-	-	ビット1	底部 $\frac{1}{2}$	粗 2.5Y $\frac{1}{2}$ 灰白	＃	体部との境界丸味を帯ぶ・表面剥離・軟質(底径6.6)
	間	-	-	埋土	口縁小片	普 2.5Y $\frac{1}{2}$ 灰黄青	＃	外反・外面段状凹凸(小型)
連	32-7	8-5	カマド	体下部	＃ 10BG $\frac{1}{2}$ 青黒	＃	叩目・裏当て(小型)	
出	-	-	埋土	体下部	＃ 2.5Y $\frac{1}{2}$ 黄灰	＃	内面2.5Y $\frac{1}{2}$ 黄灰・ヘラナデ・Ba27片類似	

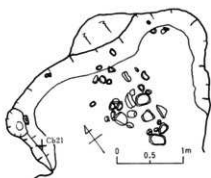
Ce 24 竪 穴 住 居 跡 間 連 出 土 遺 物	(別表以外) 破片数	第21表	土師器杯()内黒《 》両黒「」他			土師器甕			焼土	木炭
		口縁部	体部	底部	口縁部	体部	底部			
	埋土	(1)	(6)	(2)	(1)		10	1	カマドー 入口 ※ カマド西側 一段低い面 にもある	見られず
	床面	(1)	(1)							
	カマド	(1)「1」					2			
	貯蔵穴	(6)「1」	(3)「2」			2				
	ビット1		(2)				9			



第32図 第2豎穴住居跡 (Ce24) 出土遺物 (S≒1/3)

【3】Ca21 竪穴状遺構 (33図・写真9図・表22・23)

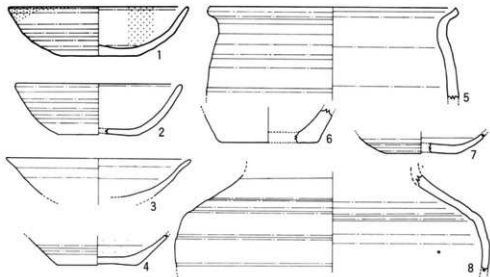
第一平場東端にあり、南半部は壊変を受けているが一辺約3.0mの方形を呈すと思われる。北側より中央寄り床面上20cmに河原石を配した焼土遺構がある。径15~30cmの河原石は赤変し内側には木炭が堆積している。北壁高は約35cmである。北東隅付近床面上には径約60cm焼土がある。柱穴等は検出されない。出土遺物は図及び表にて示す。



第33図 Ca21竪穴状遺構

第22表	図番号	写真番号	出土位置	口径cm	底径cm	器高cm	胎土色調等	備考「成形・調整・形態等(cmは推定値)」
Ca21 竪穴状遺構	33-1	1	埋土	(13.0)	7.0	4.0	普 5YR $\frac{5}{2}$ 鈍橙	内里・回転糸切・不整形・石綿様物含・漆付着
	33-2	2	"	13.7	6.5	4.2	普 7.5YR $\frac{5}{2}$ 鈍橙	ロクロ・直口・底部有調・Cb21片と接合
	33-56	5-6	"	(20.5)	(8.0)		普 7.5YR $\frac{5}{2}$ 灰白	ロクロ・複式・胴部様枕様縮・石綿様含有物

第23表	図番号	写真番号	出土位置	遺存部	胎土色調	焼成	備考「成形・調整・形態・含有物等・(cm推定値)」
Ca21 竪穴状遺構	33-3	3	埋土	口体部 $\frac{1}{2}$	普	10YR $\frac{5}{2}$ 鈍黄橙	普 (口径15.3) 高台・石綿様含有物・塗料様物質付着
	33-4	4	"	体底部 $\frac{1}{2}$	普	7.5YR $\frac{5}{2}$ 浅黄橙	普 (底径6.5) 内里・回転糸切・無調・内面かき傷
	33-7	7	"	底部	普	2.5Y $\frac{5}{2}$ 灰黄	普 (底径5.6)・回転糸切・無調
	33-8	8	"	体上部 $\frac{1}{2}$	粗	2.5Y $\frac{5}{2}$ 黄灰	普 ロクロ成形・外面調整粗末・胴張り・中型?



第34図 Ca21竪穴状遺構出土遺物 (S $\frac{1}{2}$)